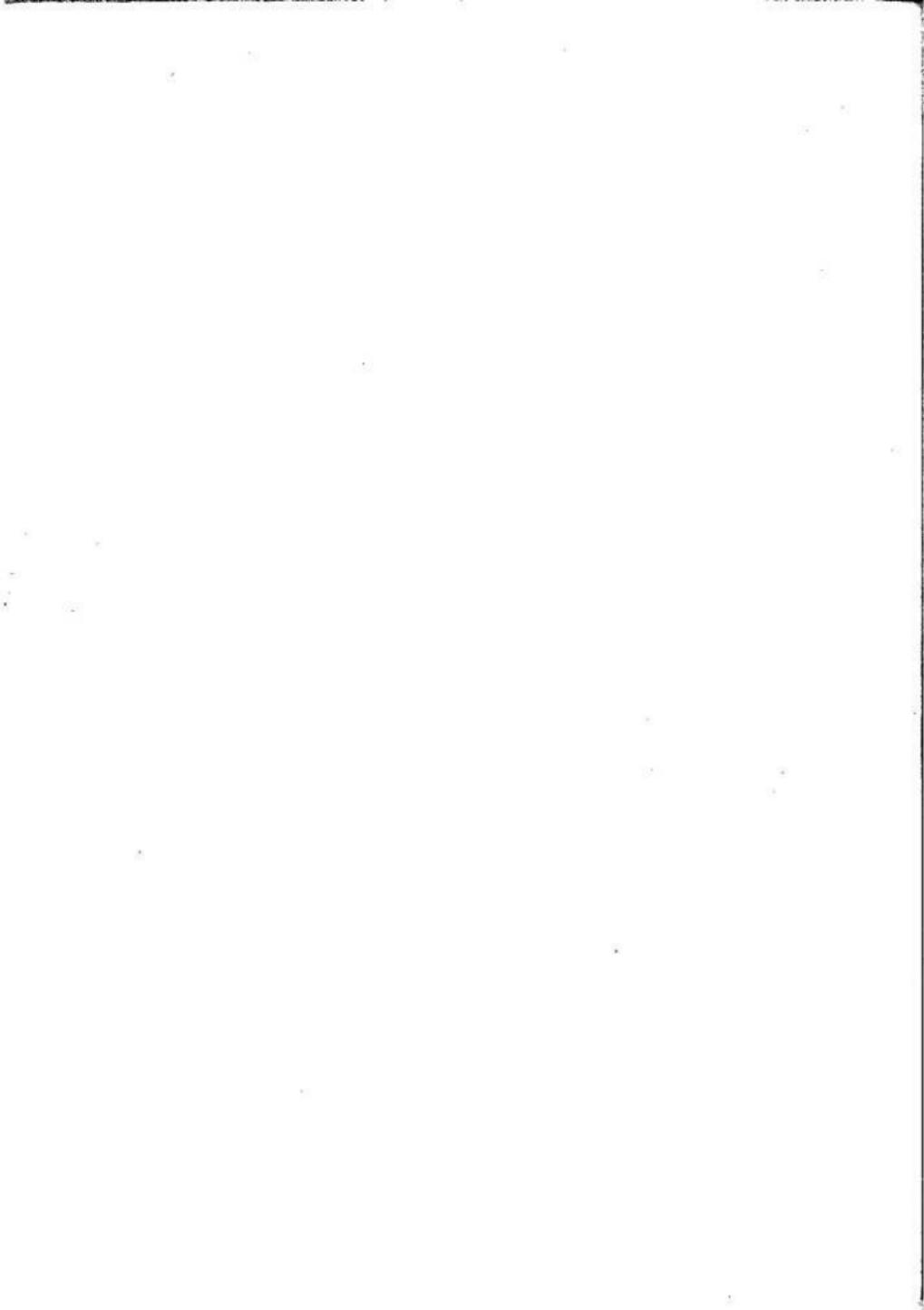


八尾市文化財調査研究会年報
昭和63年度

1989年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



八尾市文化財調査研究会年報

昭和63年度

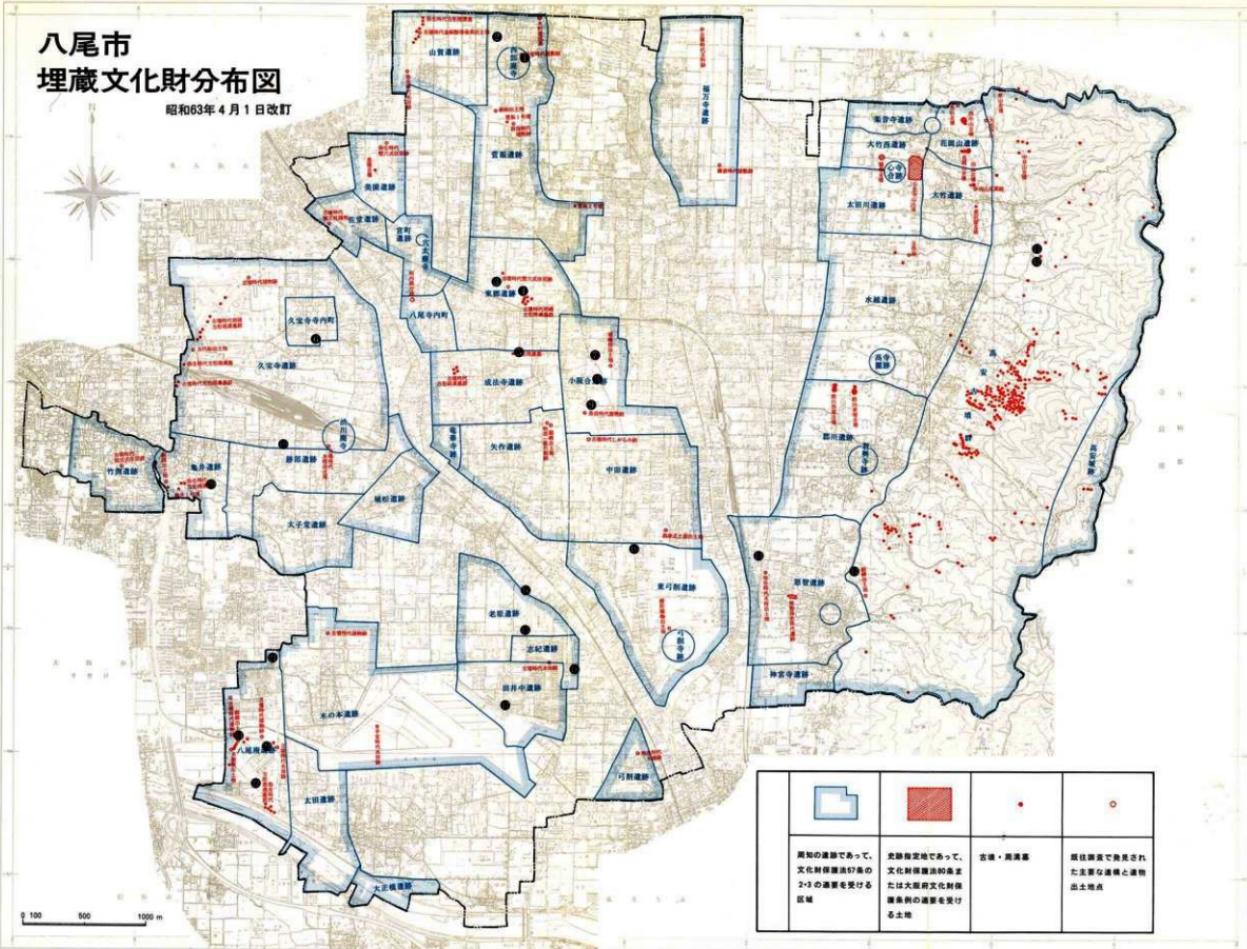


1989年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

八尾市 埋蔵文化財分布図

昭和63年4月1日改訂



序 文

河内平野の中心部に位置する現八尾市域は、かつて縄文海進の終期と共に、そこが大和川の氾濫原でもあっただけに、考古学的発掘により、河内平野の形成史が観察される極めて興味深い地域であります。同時にそこで、生活を始めた古代人の足跡が、遺物や遺跡として検出される地域でもあり、やがて『古事記』や『日本書紀』に記録された歴史を彷彿させる古代史のねむる重要な地域であります。それだけにこれらの文化財を、開発という名の破壊から後世に、せめて記録保存として残すことは、今日に生きる私共、市民の共通する責任でもあり、また、文化的使命もあります。それ故、私共は、市民と共に埋蔵文化財の保護と都市開発のはざまで、関係者の理解と協力を得て発掘調査を進めているところであります。

さて、当八尾市文化財調査研究会（財団）が、八尾市教育委員会の指示により、実施してまいりました昭和63年度の発掘調査は24件で、面積にして8766.99平方米に及びました。これらの調査により、貴重な遺構や遺物が確認され、地域史研究に欠かせぬ資料の一頁となるものと自負するところであります。

当財団設立のいま一つの目的であります、文化財愛護に関する啓発事業として、恒例の文化財講座『文化財トーク やお・むかし・むかし』の開催や小学生を対象とした『チビッコ文化財夏期学習』及び遺物の展示、地域での『現地説明会』などを開催して参りました。

また、歴史民俗資料館の運営として、春の特別展『八尾を掘る』、秋の特別展『愛宕塚古墳』を開催し、郷土文化の枠を広く市民各位に提供してきたところであります。

最後になりましたが、各埋蔵文化財調査の実施にあたり、御指導・御協力を賜わりました関係機関の各位に対しまして心から御礼申し上げます。

平成元年12月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 福島 孝

例　　言

1. 本書は、財團法人八尾市文化財調査研究会が、昭和63年度に行ったすべての事業の概要をまとめたものである。
1. 埋蔵文化財の発掘調査の項は、調査担当者（高萩千秋・原田昌則・成海佳子・西村公助・駒澤敦・近江俊秀（市教育委員会嘱託））の報告をもとに、原田が検討を加えてまとめた。
1. 本書に掲載した地図は、八尾市発行の2500分の1（昭和60年測量）を使用した。埋蔵文化財分布図は、八尾市教育委員会発行（昭和63年4月1日）のものをもとに作成した。
1. 本書と埋蔵文化財発掘調査報告書の内容が異なる場合は、後者を正しいものとする。

本　文　目　次

埋蔵文化財分布図

序文

例言

I	八尾市文化財調査研究会の概要	1
II	埋蔵文化財の発掘調査	4
1	菅原遺跡（第6次調査：幸町1丁目60-1）	7
2	菅原遺跡（第7次調査：泉町2丁目56他）	12
3	東郷遺跡（第28次調査：光町1丁目47）	22
4	東郷遺跡（第29次調査：光町2丁目28-1）	59
5	成法寺遺跡（第5次調査：南本町1丁目10-1）	65
6	久宝寺遺跡（第3次調査：久宝寺4丁目81-1）	70
7	小阪合遺跡（第15次調査：小阪合町2丁目52-11）	83
8	小阪合遺跡（第16次調査：青山町1～3・5丁目　山本南8丁目）	87
9	小阪合遺跡（第17次調査：青山町3丁目47）	93
10	東弓削遺跡（第4次調査：八尾木東1丁目）	96
11	高安古墳群内芝塚占墳（第1次調査：神立2丁目）	100

12	高安古墳群内芝塚古墳（第2次調査：神立2丁目）	100
13	恩智遺跡（第2次調査：恩智北町1丁目59・60）	110
14	恩智遺跡（第3次調査：恩智1045外6筆）	115
15	老原遺跡（第3次調査：東老原1丁目42-1）	118
16	老原遺跡（第4次調査：東老原1丁目）	125
17	田井中遺跡（第7次調査：空港1丁目81）	129
18	田井中遺跡（第8次調査：志紀町西3丁目）	132
19	跡部遺跡（第4次調査：跡部本町1丁目4-1・4-2）	136
20	亀井遺跡（第1次調査：南亀井町1丁目41）	147
21	八尾南遺跡（第11次調査：西木の木48・49）	151
22	八尾南遺跡（第12次調査：若林町2丁目174）	168
23	八尾南遺跡（第13次調査：若林町1丁目76-3）	172
24	長原遺跡（第1次調査：大阪市平野区長吉川辺3丁目）	176
III	委託業務	178
(1)	八尾市立歴史民俗資料館の管理	178
(2)	環山樓の公開	180
IV	啓発普及事業	181
V	その他	182
VI	受贈図書一覧	183

I 八尾市文化財調査研究会の概要

1 目的

八尾市域の文化財の調査・保存・研究を通じて文化財の保護を図るとともに、市民の文化財保護に関する理解を深め、地域文化の発展に寄与し、永く後世に文化遺産を継承することを目的とする。

2 事業内容

- ・八尾市立歴史民俗資料館の管理
- ・埋蔵文化財の発掘調査および内業整理業務の受託
- ・埋蔵文化財以外の文化財の調査研究
- ・文化財に関する講座・講演会および展示会の開催
- ・八尾市教育委員会からの受託業務
- ・その他目的を達成するために必要な業務

3 設立年月日

昭和57年7月1日

4 事務局所在地

大阪府八尾市清水町1丁目21番1号

5 歴史民俗資料館所在地

大阪府八尾市千塚3丁目180番地の1

6 役員および組織 (平成元年3月31日現在)

顧問 1名

理事 13名 (理事11名・監事2名)

評議員 13名



事務文書

調査室－埋蔵文化財の調査研究・啓発事業およびそれに関わる庶務
事業室－歴史民俗資料館の管理・事業運営およびそれに関わる庶務

7 役員・職員の名簿 (平成元年3月31日現在) (50音順)

顧問	山脇 悅司	八尾市長(前理事長)
理事長	福島 孝	
理事	今川 金治	八尾商工会議所会頭
"	貴島 正男	八尾市郷土文化推進協議会会长
"	田代 克巳	帝塚山短期大学教授
"	辻合 喜代太郎	帝國女子大学名誉教授
"	永井 貴美子	八尾市議會議員
"	西谷 信次	八尾市教育長
"	古橋 了	星電器製造株式会社取締役社長
"	松浦 康太	八光信用金庫理事長
"	森岡 安治郎	八尾市農業協同組合組合長
"	吉房 康幸	大阪府教育委員会文化財保護課長
監事	伊藤 弘	八尾商工会議所副会頭
"	西崎 宏	八尾市収入役
評議員	浅井 允晶	堺女子短期大学教授
"	安積 由高	やお文化協会常任理事
"	阿部 季	やお文化協会事務局長
"	上井 久義	関西大学教授
"	奥野 俊雄	やお文化協会常任理事
"	櫻井 敏雄	近畿大学教授
"	棚橋 利光	大阪府立八尾高等学校教諭
"	塙口 義信	堺女子短期大学教授
"	細見 二郎	八尾商工会議所副会頭
"	松井 一雄	八尾市教育委員会社会教育部長
"	三上 幸寿	八尾市歴史編纂委員
"	村川 行弘	大阪経済法科大学教授
"	森口 康次郎	八尾市議會議員

調査室

調査室長 堀内 薫
調査係 高萩 千秋
〃 原田 崑則
〃 成海 佳子 (嘱託)
〃 西村 公助 (〃)
〃 駒澤 敦 (〃) 平成3月退職
庶務係 富田 よしの
〃 中谷 晓子 (嘱託)

事業室

事業室長 安井 良三 (市立歴史民俗資料館長兼務) 八尾市教育委員会より出向
事業係長 浅井 隆二 八尾市教育委員会より出向
事業係 小谷 利明
〃 尾崎 良史

8 理事会・評議員会の開催

会議名	開催年月日	議事内容
第1回 理事会		<ul style="list-style-type: none">• 評議員の選出に関する件• 理事および監事の選任に関する件
第1回 評議員会	昭和63年6月16日	<ul style="list-style-type: none">• 理事長の選出に関する件• 昭和62年度事業報告承認の件• 昭和62年度収支決算承認の件
第2回 理事会		<ul style="list-style-type: none">• 平成元年度事業計画承認の件• 平成元年度収支予算承認の件
第2回 評議員会	平成元年3月30日	

II 埋蔵文化財の発掘調査

昭和63年度に跡八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示を受けて実施した発掘調査は24件で、発掘調査面積は、8766.99m²を図る。面積では昭和62年度を下回ったものの、調査件数では24件と同数で2年続きで高い水準であった。これらの要因としては、高景気に支えられた活発な経済活動や、都市部を中心とする地価高騰等の諸条件を背景とする社会情勢が、一地方都市である本市にも波及した結果と考えられる。これらの開発に伴う発掘調査の増加と引き替えて、数多くの貴重な考古資料が検出され、新たな知見が蓄積されつつある反面、発掘調査に追われるなかで、それらの成果の公表が遅れがちになっているのも偽りない事実である。発掘調査は開発に伴う一過性のものであり、社会情勢に左右されることはある。しかし、近年のこのような動きは、長い歴史の中では1つの点にすぎないが、今後の推移には注意をはらう必要があろう。

昭和63年度に実施した発掘調査では、縄文時代前期～平安時代後期までの遺構・遺物を検出しており、多大な成果を得た。以下、おもな検出遺構・出土遺物を時代順に概観する。

縄文時代前期 遺構は検出されなかったが、23八尾南遺跡で爪形文土器の小破片が数点検出されている。

弥生時代前期 17田井中遺跡で溝2条が検出された。**弥生時代中期** 10東弓削遺跡で土坑が検出され、集落が広範囲に広がることが判明した。また、23八尾南遺跡では水田が検出されている。**弥生時代後期** 1菅振遺跡では竪穴住居2棟が検出された。2棟ともに焼失住居で、内部には建築材である垂木が炭化材となって遺存していた。10東郷遺跡では溝2条が検出され、不明瞭であったこの時期の集落内での動向の一部が明らかになった。20龜井遺跡では集落の一部を検出した。調査地はこの時期の集落が検出されている調査地の東部に位置することから、集落の範囲を推定するうえで貴重である。23八尾南遺跡では水田を検出した。この時期の水田は調査地の南側の調査区（第5次調査）で検出されており、これらを含めると約2000m²にわたって水田が拓かっていたことが明らかとなった。

古墳時代前期〔庄内式古相〕 5成法寺遺跡・10東弓削遺跡で居住地が検出されている他、5成法寺遺跡では方形周溝墓3基が検出されている。〔庄内式新相〕 2菅振遺跡・19跡部遺跡で居住地が検出されている。なかでも、2菅振遺跡は遺跡推定範囲の北西部で初めて確認されたもので、既往調査の成果を含めると広範囲に集落が存在していたことが窺える。〔布留式古相〕 6久宝寺遺跡で方形周溝墓1基が検出された。17田井中遺跡では、居住地が検出されている。**古墳時代中期** 22八尾南遺跡で方墳4基が検出された。**古墳時代後期** 2菅振遺跡で掘立柱建

物を中心とする居住地を検出した。この時期の集落の検出例は、八尾市域では数少ないものである。11・12芝塚古墳では、横穴式石室内から組合式家型石棺が3棺検出され、高安古墳群を考えるうえで多くの課題を残す結果となった。14恩智遺跡では、土器棺墓1基を検出した他、多数の埴輪片が出土しており、付近に古墳が存在した可能性が高い。一方、18田井中遺跡では水田が検出されている。

平安時代後期 1壹振遺跡で掘立柱建物2棟の他、井戸・土坑が検出されており、集落が東方へ広がることが判明した。3東郷遺跡では、井戸1基が検出された。この時期の遺構は、当調査地から西150mに位置する第25次調査で検出されていることから、遺跡推定範囲の中央部から北西部一帯にこの時期の集落が存在していたようである。なお、井戸側に使用されていた曲物の外側には墨書き年銘があり、この時期の土器類の実年代を推定するうえで貴重な資料と言えよう。6老原遺跡では溝の中から板塔婆が出土しており、当時の宗教観の一端を知るうえで重要である。



1壹振遺跡（第6次調査）調査風景（東から）

昭和63年度発掘調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	原図者	原因	調査期間	面積 (sq)	担当
1	豈 振(第6次)	幸町1丁目60-1	八尾市	改良住宅建設	昭和63年 6月21日～8月11日	320	原田
2	豈 振(第7次)	泉町2丁目56地	セシコ・㈱	事務所付倉庫建設	平成元年 2月1日～3月29日	900	原田
3	東 郷(第28次)	光町1丁目47	丸十興業	ビル建設	昭和63年 7月26日～8月11日	86	西村
4	東 郷(第29次)	光町2丁目28-1	豊倉キャウ	共同住宅	平成元年 3月6日～3月25日	220	西村
5	或 法寺(第4次)	南木町1丁目10-1	大阪シーリング印刷㈱	事務所建設	昭和63年 11月7日～12月5日	540	高萩
6	久 宝寺(第3次)	久宝寺4丁目74	吉川 武	共同住宅	昭和63年 12月5日～12月28日	330	西村
7	小 舶合(第15次)	小阪合町2丁目 52 11	八尾市	ポンプ場設置場	昭和63年 5月17日～10月31日	356	高萩
8	小 舶合(第16次)	青山町1～3・5丁目 山本商店8丁目	八尾市	区画整理	昭和63年 7月5日～8月26日	500	高萩
9	小 舶合(第17次)	吉山町3丁目47	堀本 単一	共同住宅	昭和63年 10月3日～10月4日	32	高萩
10	東 町 刷(第4次)	八尾木東1丁目	八尾市	下水道工事	昭和64年 1月3日～1月23日	72	原田
11	高安占墳群(第1次) 芝 墓 古 墳	神立2丁目	八尾市	道路建設	昭和63年 5月23日～6月11日	100	原田 駒澤
12	高安占墳群(第2次) 芝 墓 古 墳	神立2丁目	八尾市	道路建設	平成元年 2月25日～4月15日	30	高萩
13	恩 智(第2次)	恩智北町1丁目 59・60	翼 三郎	共同住宅	昭和63年 8月29日～9月1日	100	西村
14	恩 智(第3次)	恩智1045外6丘	大阪市	浄化槽	昭和63年 11月7日～11月17日	48	西村
15	老 原(第3次)	東老原1丁目42-1	関電奈良㈱	社宅建設	昭和63年 10月27日～11月16日	320	原田
16	老 原(第4次)	東老原1丁目	八尾市	下水道工事	平成元年 2月14日～3月1日	40	西村
17	田 井 中(第7次)	空港1丁目81	大阪防衛施設局	通信鉄塔建設	昭和63年 5月30日～6月16日	25	西村
18	田 井 中(第8次)	志紀町西3丁目	近畿財務局	宿舎建設	昭和63年 10月1日～2月20日	996	成海
19	跡 部(第4次)	跡部本町1丁目 4-1・4-2	種田 竹松	共同住宅	昭和63年 10月1日～10月22日	300	西村
20	龟 井(第1次)	南龜井町1丁目41	大昌印刷 販売㈱	T場建設	昭和63年 11月7日～11月24日	200	高萩 近江
21	八 尾 南(第11次)	西木の本1丁目 48・49	下村清之祐	共同住宅	昭和63年 7月19日～7月26日	100	駒澤 近江
22	八 尾 南(第12次)	若林町2丁目174	小倉屋 山本食品㈱	店舗建設	昭和63年 8月29日～10月21日	860	原田
23	八 尾 南(第13次)	若林町1丁目76-3	朝日生命 保険㈱	事務所建設	昭和63年 9月14日～2月25日	1800	成海 駒澤
24	長 原(第1次)	大阪市平野区 長吉川辺3丁目	八尾市	下水道工事	昭和63年 8月2日～8月4日	8	成海

1 萱振遺跡（第6次調査）

調査地 八尾市幸町1丁目60-1

調査期間 昭和63年6月21日～昭和63年8月11日

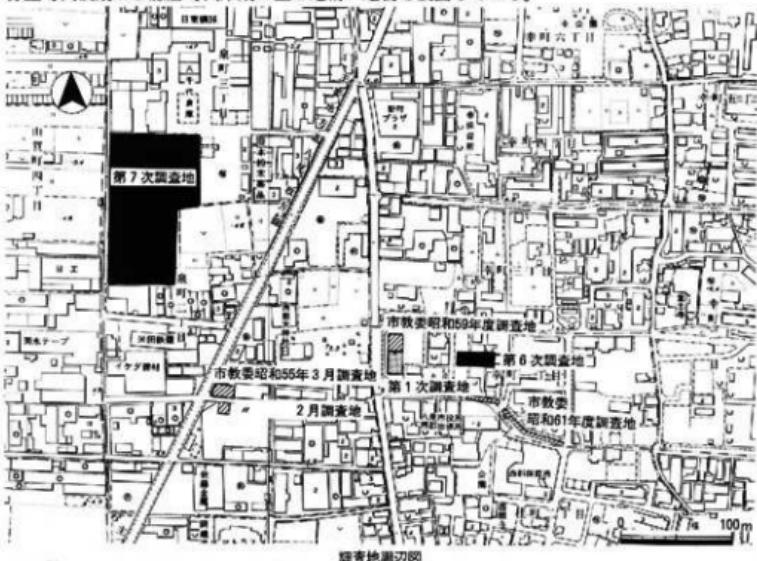
調査面積 320m²

はじめに

今回の発掘調査は住宅建設に伴って実施したもので、当調査研究会が萱振遺跡内で実施した発掘調査の第6次調査にあたる。

当遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川の右岸に位置する沖積地に位置しており、現在の行政区画では、緑ヶ丘1～3丁目、萱振町1～7丁目、東町1～3丁目、桂町1～3丁目、幸町1・3・4・6丁目に所在している。

今回の調査地が位置する萱振遺跡の北部では、昭和58～59年にかけて大阪府教育委員会が府立八尾北高校の建設に伴って発掘調査を実施したのを始めとして、昭和59年には当調査研究会^{註1}が今回の調査地の西50m地点で発掘調査（第1次調査）^{註2}を実施している。これらの調査の結果、弥生時代後期から鎌倉時代末期に至る遺構・遺物を検出している。



調査概要

住宅建設予定地に合わせて東西29m・南北9mの調査区を設定した。掘削に際しては、試掘結果を参考にして現地表下1mまでを機械で掘削し、以下1mを人力で掘削した。その結果、現地表下1.2m～1.4m（標高4.6～4.4m）付近に存在する茶灰色シルト層上面で平安時代後期・江戸時代に比定される遺構を検出した（第2調査面）。さらに0.5～0.7m掘り下げた結果、標高3.9m前後付近に存在する灰黄～灰褐色シルト上面で弥生時代後期に比定される遺構を検出した（第1調査面）。

第1調査面

第1調査面は、現地表下1.9m（標高3.9m）付近に存在する灰黄～灰褐色シルト上面を調査対象とした。その結果、弥生時代後期に比定される、竪穴住居2棟（S1-1・2）、井戸1基（SE-1）、土坑2基（SK-1・2）、溝1条（SD-1）を検出した。なかでも、2棟検出した竪穴住居はともに焼火家屋で、内部からは建築材である垂木が炭化材となって放射状に倒れていたほか、多量の炭・灰が出上した。

第2調査面

第2調査面は、現地表下1.2～1.4m（標高4.6～4.4m）付近に存在する茶灰色シルト上面を調査対象とした。その結果、平安時代後期に比定される掘立柱建物2棟（SB-1・SB-2）、井戸7基（SE-2～6、8・9）、溝10条（SD-2～SD-11）、小穴83個（SP-2～SP-84）のほか、江戸時代後期に比定される井戸2基（SE-7・SE-10）を検出した。

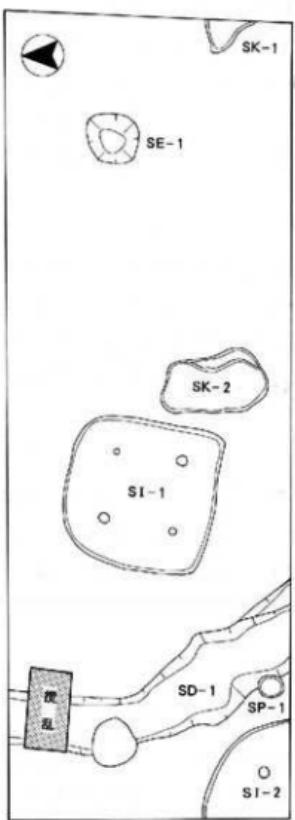
まとめ

今回の調査では、弥生時代後期・鎌倉時代後期・江戸時代後期に比定される遺構を検出した。なお、当調査地の西50mの地点で実施した調査（第1次調査）においても、弥生時代後期と平安時代後期の遺構が検出されていることから、両時期の集落がさらに東側に広がることが明らかとなった。

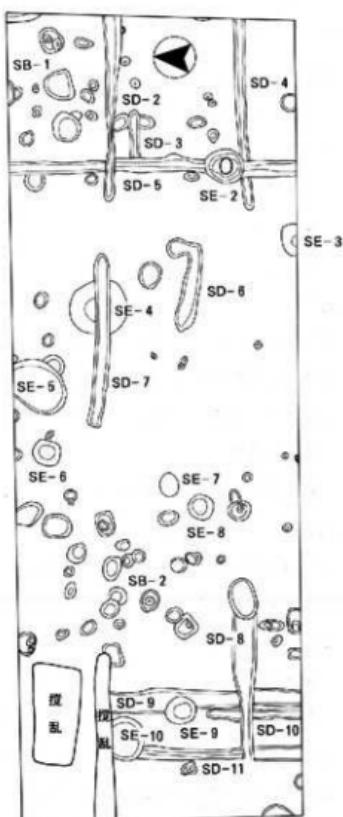
註1 広瀬雅信「菅原遺跡調査速報」「八尾市文化財紀要」八尾市教育委員会 1985

註2 岸八尾市文化財調査研究会「1号墳A遺跡（第1次調査）」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要」昭和61年度 岸八尾市文化財調査研究会報告13 1987

註3 前掲註2



第1調査面



第2調査面

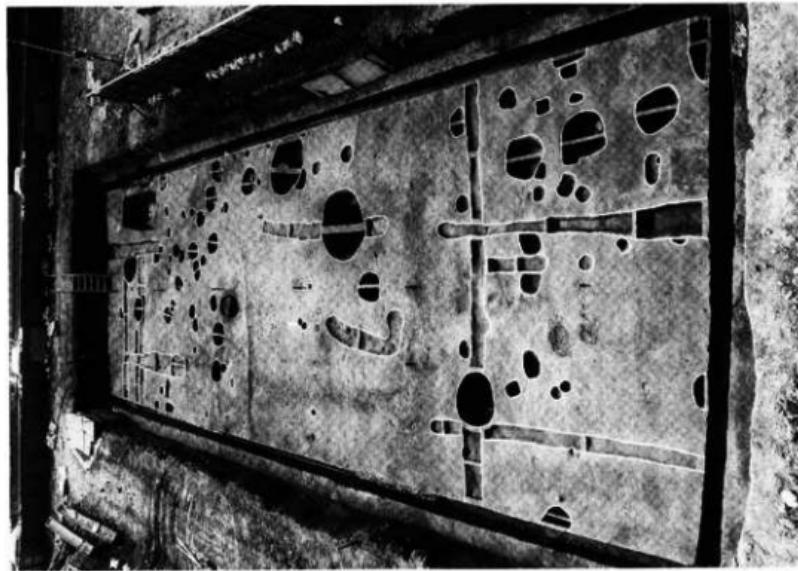
0 10m

検出構造平面図

1 菅原遺跡



第1調査面全景（東から）



第2調査面全景（東から）



S I - 1 検出状況（北から）



S I - 2 検出状況（北から）

2 葦振遺跡（第7次調査）

調査地 八尾市泉町2丁目56他11筆・57他6筆

調査期間 平成元年2月1日～平成元年3月29日

調査面積 900m²

はじめに

今回の発掘調査は倉庫建設に伴うもので、当調査研究会が葦振遺跡内で実施した発掘調査の第7次調査にあたる。

調査地点は、第6次調査地点の北西250mに位置する。

調査概要

調査では、建物の基礎杭予定地に南北方向に5本（第1トレンチ～第5トレンチ）、東西方向に2本（第6トレンチ・第7トレンチ）の計7本のトレンチを設定した。ただ、南北方向のトレンチについては、調査区内の中央部を東西方向に伸びる里道があるため、この部分を調査対象外としたため調査区が二分される結果となった。したがって、南北方向のトレンチについては、北区と南区に区別した。

各調査区の規模は、第1トレンチ～第5トレンチの北区（長さ48m）、第1トレンチ～第5トレンチの南区（長さ14m）、第6トレンチ（長さ36m）、第7トレンチ（長さ35m）で、幅は第1トレンチの北区・南区が4mである他は、すべて2mである。

掘削方法は、第1トレンチ～第5トレンチの北区および第1トレンチ南区では、機械掘削1.2m前後、人力掘削0.2m前後で、第2トレンチ～第5トレンチの南区および第6トレンチ・第7トレンチでは機械掘削0.8m前後、人力掘削0.2m前後である。

各調査区ともに1面を調査対象にしたが、第4トレンチの南区については、2面を調査対象とした。調査の結果、各調査区から古墳時代前期・古墳時代後期・近世に比定される遺構・遺物を検出した。

第1トレンチ（北区）

現地表下1.4m（標高3.3m）前後に存在する灰褐色粘質シルト層を調査対象層とした。その結果、溝4条（SD-1～4）・小穴2個（SP-1・2）を検出した。そのうち、SD-2から古墳時代前期に比定される遺物が出土したほか、SD-4からは古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

第1トレンチ（南区）

現地表下1.3m（標高3.6m）前後に存在する灰褐色粘質シルト上面を調査対象とした。その結果、井戸1基（SE-1）・土坑1基（SK-1）溝1条（SD-3）を検出した。遺物はSE-1・SK-1・SD-3から古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

第2トレーナ（北区）

現地表下1.5m（標高3.5m）前後に存在する淡灰色シルト上面を調査対象面とした。その結果、土坑1基（SK-2）・溝1条（SD-1）・小穴4個（SP-3～6）を検出した。

遺物は、SP-6から古墳時代前期に比定される遺物が出土したほか、SP-4・SP-5からは古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

第2トレーナ（南区）

現地表下1.2m（標高3.7m）前後に存在する淡灰色シルト上面を調査対象面とした。その結果、溝1条（SD-5）・小穴（SP-7～20）を検出した。遺物は、SD-5・SP-5・8・11・12・13・15・18から古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

第3トレーナ（北区）

現地表下1.6m（標高3.5m）前後に存在する灰褐色粘質シルト上面を調査対象面とした。その結果、土坑1基（SK-3）・溝4条（SD-1・SD-6～8）・小穴12個（SP-21～32）を検出した。遺物はSP-24・27から古墳時代前期に比定される遺物が出土したほか、SK-3・SD-6・SP-2から古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

第3トレーナ（南区）

現地表下1.1m（標高3.6m）に存在する灰褐色シルト上面を調査対象面としたが、遺構は検出されなかった。

第4トレーナ（北区）

現地表下1.3m（標高3.5m）前後に存在する灰褐色粘質シルト上面を調査対象面とした。その結果、土坑2基（SK-4・5）・溝4条（SD-1・6・7・9）・小穴6個（SP-33～38）を検出した。遺物は、SK-4・5、SD-6・7・9、SP-36・38から古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

第4トレーナ（南区）

この調査地では、2面（第1調査面・第2調査面）にわたる調査を実施した。

第1調査面

現地表下0.9m（標高3.8m）前後に存在する茶褐色シルト上面を調査対象面とした。その結果、溝1条（SD-10）・小穴5個（SP-39～43）を検出した。遺物は、SD-10から古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

第2調査面

第1調査面より0.3m前後下部に存在する灰黄色シルト上面を調査対象面とした。その結果、溝1条（SD-11）を検出した。遺物は古墳時代前期に比定される土器類がコンテナ箱に4箱程度出土した。

第5トレンチ（北区）

現地表下1.3m（標高3.5m）前後に存在する褐灰色シルト質粘土上面を調査対象面とした。その結果、溝4条（SD-1・7・12・13）を検出した。遺物はSD-7から古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

第5トレンチ（南区）

現地表下1m（標高3.6m）前後に存在する淡灰色シルト上面を調査対象面とした。その結果、土坑1基（SK-6）・小穴8個（SP-44～51）を検出した。遺物はSP-44から古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

第6トレンチ

現地表下0.8m（標高3.8m）前後に存在する淡黄灰色シルト上面を調査対象面とした。その結果、井戸1基（SE-2）・土坑2基（SK-7・8）・溝5条（SD-3・11・14～16）・小穴3個（SP-52～54）を検出した。遺物はSD-11から古墳時代前期、SK-7・8から古墳時代中期、SE-2から近世に比定される遺物が出土した。

第7トレンチ

現地表下0.7m（標高3.9m）前後に存在する淡灰色茶色シルト上面を調査対象面とした。この結果、溝6条（SD-14・15・17～20）・小穴6個（SP-55～60）を検出した。遺物はSD-14・17・18・19・20、SP-55・56から古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

まとめ

調査の結果、調査区の中央部を東西方向に伸びる里道を境として、南側と北側では約0.3m前後の比高差が認められ、旧地形が南側から北側にかけてゆるやかに傾斜をもつ地形であったことが判明した。検出した遺構・遺物は古墳時代前期（庄内式新相）・古墳時代後期・近世に比定されるものである。以下、時期ごとに概観する。

古墳時代前期（庄内式新相）

この時期に比定される遺構は、第1トレンチ（北区）のSD-2、第2トレンチ（北区）のSP-6、第3トレンチ（北区）のSP-24・27、第4トレンチ（南区-第2調査面）および第6トレンチのSD-11である。SD-11を除けば、調査地の北部中央から西部一帯に広がりが認められる。SD-11は、南東-北西方向に流路を持つもので、検出長2m幅4.5m深さ1.5mを測る。溝内からは、壺・鉢・高杯・甕等の上器片が多量に出土したほか、広鉗・方形容器等の木製品が出土している。また、溝内から出土した上器類は、ほとんどローリングを受けて

いないことから、調査地の南東部一帯にこの時期の集落が存在した可能性が高いものと考えられる。

古墳時代後期（6世紀後半～7世紀前半）

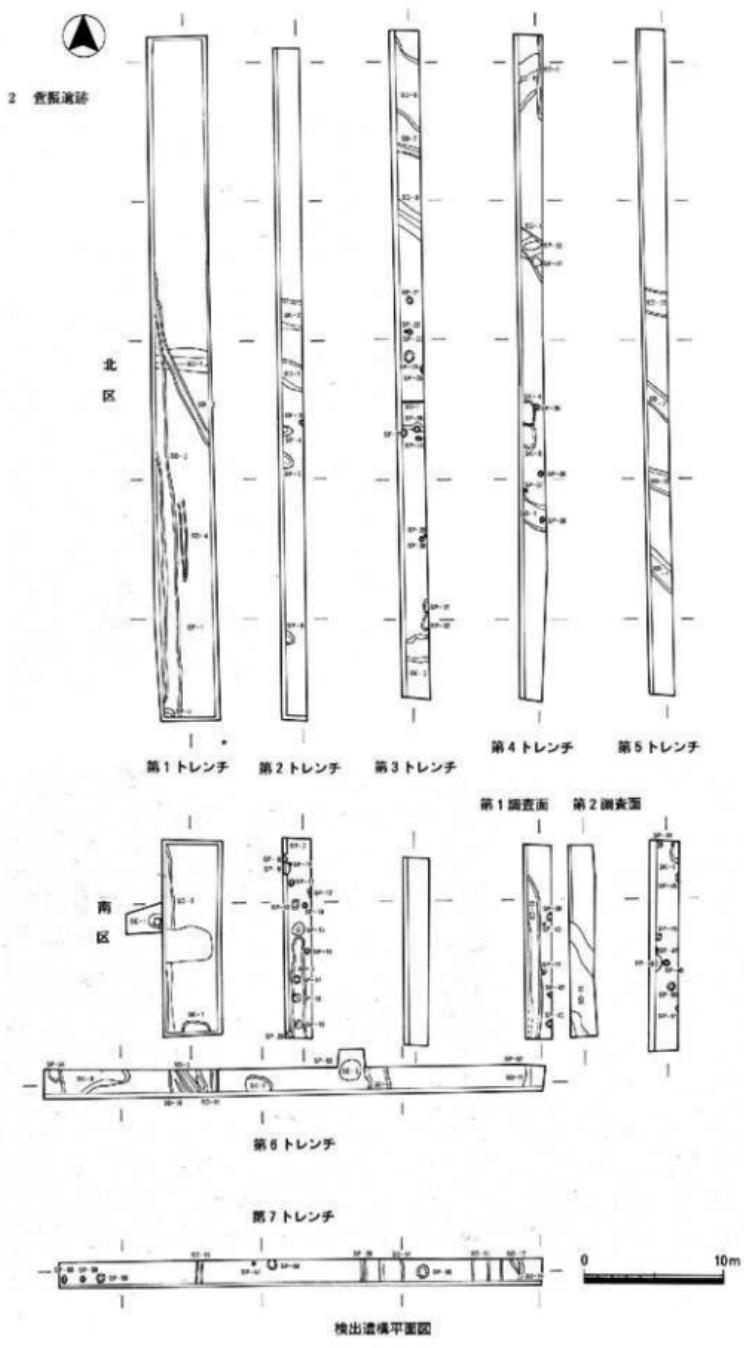
この時期に比定される遺構・遺物は調査区の全域で確認でき、この時期大規模な集落が存在していたことが明らかになった。そのなかでも、第1トレンチ・第2トレンチ（南区）、第2トレンチ・第3トレンチ（北区）の中央部、第4トレンチ・第5トレンチ（南区）付近では掘立柱建物を構成したものと推定される小穴を多数検出しており、集落内での居住域を推定するうえで重要であろう。また、出土遺物のなかには軒丸瓦1点のほか、平瓦・丸瓦の破片が多数出土しており、今後調査区の東方に位置した西郡廃寺との関係に注意をはらう必要があろう。

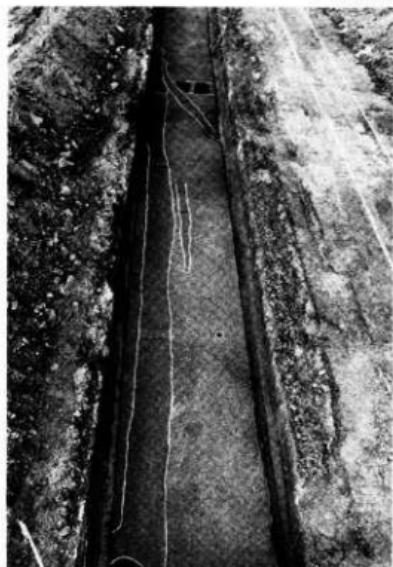
近世

第6トレンチで井戸1基（SE-2）を検出した。その形状から農業用の井戸であったものと推定できる。



第1トレンチ南区 SE-1検出状況（東から）





第1 トレンチ北区全景（南から）

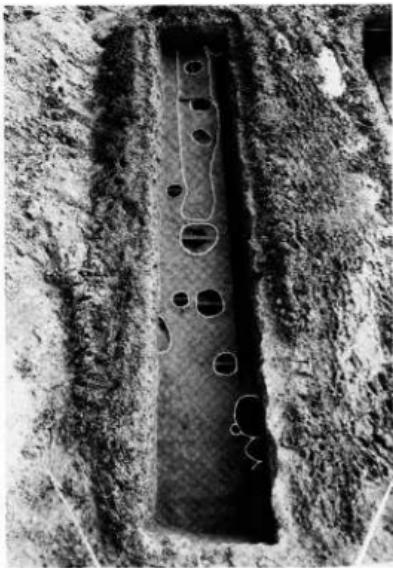


第1 トレンチ南区全景（北から）

2 竜張道跡



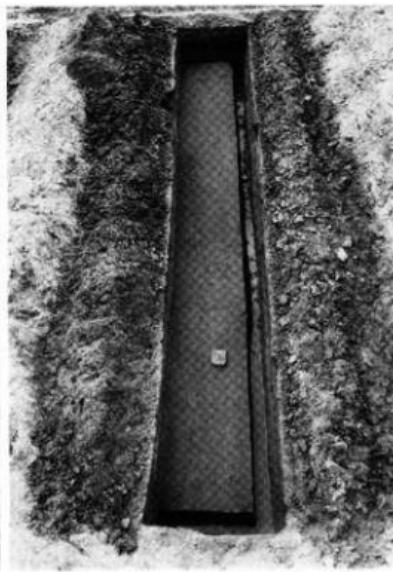
第2トレンチ北区全景（南から）



第2トレンチ南区全景（北から）



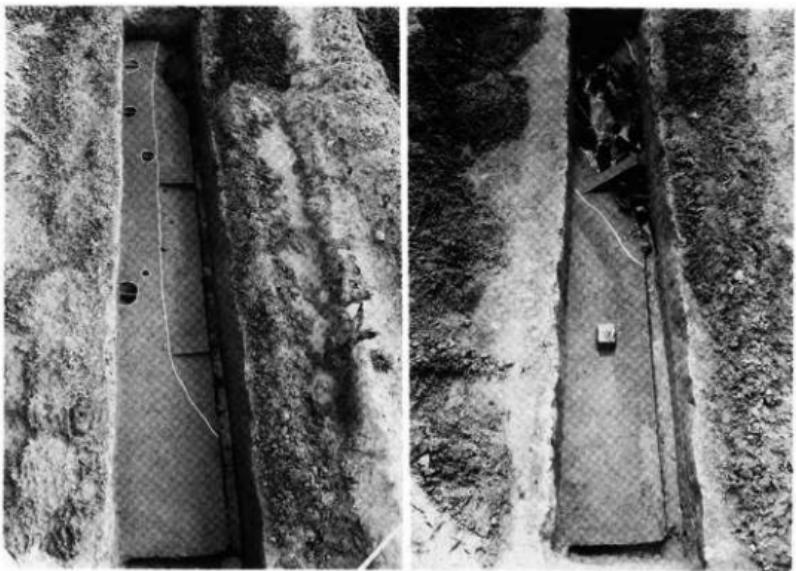
第3トレンチ北区全景（南から）



第3トレンチ南区全景（北から）



第4 トレンチ北区全景（南から）



第4 トレンチ南区第1調査面全景（北から）

同左 第2調査面全景（北から）

2 竜脈遺跡



第5 トレンチ北区全景（南から）



第5 トレンチ南区全景（北から）



第6 トレンチ全景（東から）



第7 トレンチ全景（東から）

3 とうごう
3 東郷遺跡 (第28次調査)

調査地 八尾市光町1丁目47

調査期間 昭和63年7月26日～昭和63年8月11日

調査面積 150m²



調査地周辺図

周辺の発掘調査一覧表

	調査主体	調査期間	文献	発行
第1次	八尾市教育委員会	55年1月	八尾市遺跡調査報告書・東郷遺跡調査報告書 八尾市文化財調査報告6	1981.3
第2次	八尾市教育委員会	56年4月	八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度	1983.8
第3次	同 上	56年4月	同上	-
第4次	同 上	56年5月	同上	-
第5次	同 上	56年6月～56年7月	同上	-
第6次	同 上	56年7月～56年8月	同上	-
第7次	同 上	56年9月～56年10月	同上	-
第8次	同 上	56年10月～56年12月	同上	-
第9次	同 上	56年12月	同上	-
第10次	同 上	57年2月～57年3月	同上	-
第11次	同 上	57年5月～57年6月	同上	-
第12次	当 調査研究会	57年8月	同上	-
第13次	同 上	57年9月～57年10月	同上	-
第14次	同 上	58年3月～58年4月	同上	-
第15次	同 上	58年5月	同上	-
第16次	同 上	58年8月	同上	-
第17次	同 上	58年11月～58年12月	八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和59年度 (財)八尾市文化財調査研究会報告6	1985.3
第18次	同 上	59年3月～59年4月	八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 曙和63年度 (財)八尾市文化財調査研究会報告17	1989.3
第19次	八尾市教育委員会	60年4月	八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書 八尾市文化財調査報告12	1986.3
第20次	当 調査研究会	60年10月～61年3月	八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度 (財)八尾市文化財調査研究会報告13	1987.9
第21次	八尾市教育委員会	61年11月	東郷遺跡第21次埋蔵文化財発掘調査概要 八尾市文化財調査報告13	1986.10
第22次	同 上	61年12月	八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書II 八尾市文化財調査報告15	1987.3
第23次	当 調査研究会	62年2月～62年3月	昭和61年度事業概要報告 八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度	1987.12
第24次	同 上	62年4月	(財)八尾市文化財調査研究会報告16	1988.12
第25次	同 上	62年7月～62年9月	八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書I 八尾市文化財調査報告17	1988.3
第26次	同 上	63年1月	同上	-
第27次	八尾市教育委員会	62年8月	八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書I 八尾市文化財調査報告17	1988.3
第28次	当 調査研究会	63年7月～63年8月	今後報告	-
第29次	同 上	元年3月	同上	-

3 東郷遺跡

はじめに

今回の発掘調査は、社屋建設に伴うもので、八尾市教育委員会・当調査研究会が東郷遺跡内で実施した第28次調査にあたる。

当遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置しており、現在の行政区画では北本町・東本町・光町・桜ヶ丘・庄内町一帯にあたる。

東郷遺跡内では、昭和56年度から昭和62年度に至るまで八尾市教育委員会・当調査研究会により27次にわたる発掘調査が継続的に実施されてきた。その結果、弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡であることが判明している。

今回の調査地は、当調査研究会が実施した第17次調査地の南にあたる。

調査概要

社屋建設予定地にあわせて、東西15m・南北10mの調査区を設定した。掘削に際しては、八尾市教育委員会の指示書に基づき、現地表下1.0~1.2mまでに堆積する土層を機械で掘削し、以下の各層は人力掘削を実施して、遺構・遺物の検出につとめた。

基本層序

第0層：盛土。0.8~1.0m。現地表の標高は7.7~7.8mである。

第1層：暗灰色粘土。0.1~0.3m。近年までの耕作土である。

第2層：淡茶色細砂混粘土。0.1~0.15m。

第3層：茶灰色細砂混粘土。0.1~0.3m。中世の遺物を若干含む。

第4層：暗灰茶色細砂混粘土。0.1~0.2m。弥生時代後期~古墳時代前期と平安時代後期の遺物を含む。

第5層：灰色細砂。0.3m以上。古墳時代前期と平安時代後期の遺構検出面である。

検出遺構と出土遺物

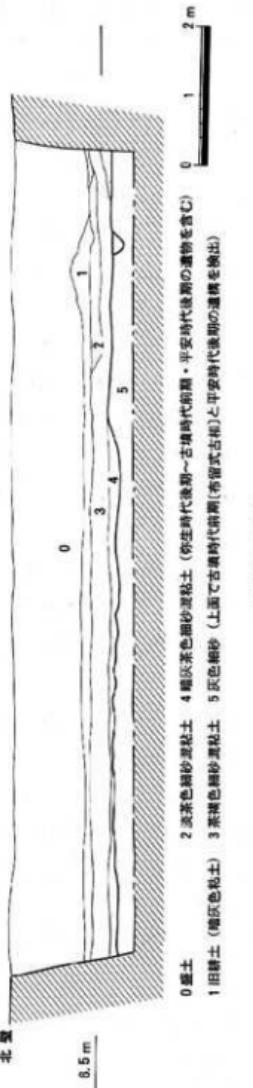
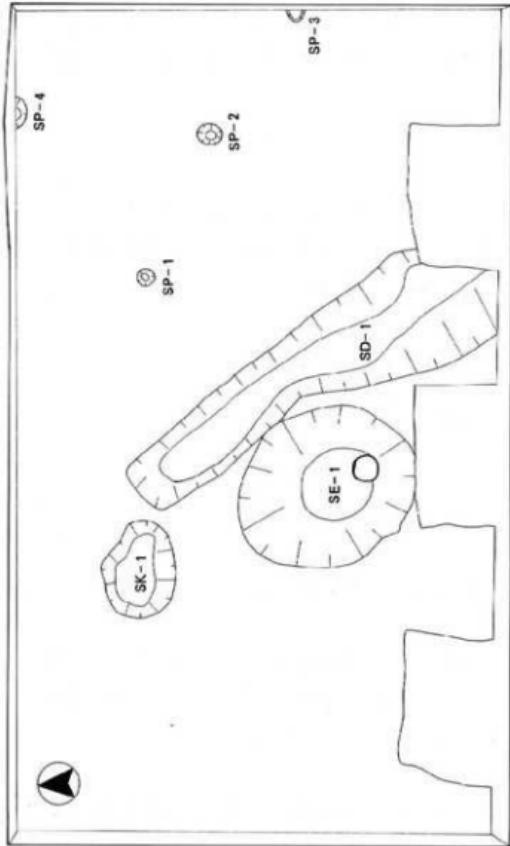
調査の結果、現地表下1.35~1.45m（標高6.25~6.35m）に存在する第5層上面で、古墳時代前期（布留式古墳）の溝1条（SD-1）と平安時代後期の井戸1基（SE-1）・土坑1基（SK-1）・小穴4個（SP-4）を検出した。

SD-1

南東~北西に伸び、検出長5.8m・幅1.6m・深さ0.3mを測る。内部堆積土は暗灰茶色細砂混粘土である。内部からは壺（1~8）、小型丸底壺（9・10）、高杯（11）、鉢（12~14）、器台（15~18）、甕（19~39）が出土している。

SE-1

調査区の中央で検出した。上面の形状は楕円形を呈するもので、掘形の南部寄りに曲物を積み井戸側としている。東西幅2.3m・南北幅2.5m・深さ0.65mを測る。曲物井戸側は、最下段



3 東側遺跡

が完存していたが、下から2段目は上部が腐敗して欠損していた。遺存部分の高さは33cmを測る。曲物井戸側の構築に際しては、下部から上部へ行くに従って大きい物を重ねており、曲物の径は下部から順に37cm・39cmである。井戸の堆積土は上から、第1層茶灰褐色細砂混粘質土、第2層暗灰褐色粘質土、第3層黒灰色粘土（炭含む）、第4層灰褐色細砂、第5層暗灰色粘土、第6層暗灰褐色細砂混粘質土、第7層暗灰色粘土、第8層淡灰色細砂混粘土で、井戸側内の堆積土は、第9層灰黑色粘土である。遺物は井戸内に堆積する第7層から土師器小皿（42～73）・中皿（74～92）・杯（93・94）、瓦器小皿（95）・瓦器碗（96～120）、土師器羽釜（121）、陶器（122）、井戸側内の第9層灰黑色粘土から土師器小皿（129～134）・中皿（135～140）・盤（141）、瓦器碗（123～128）が出土している。

SK-1

SE-1の北西側で検出した。上面の形状は東西方向に長い橢円形を呈し、東西幅1.3m、南北幅1.06m、深さ0.17mを測る。内部堆積土は上から暗灰茶色細砂混粘土・灰茶色細砂混粘土である。暗灰茶色細砂混粘土からは、土師器の甕（40）が出土している。

SP-1

北東側で検出した。上面の形状は円形を呈し、径0.25m、深さ0.23mを測る。内部堆積土は上から暗灰色細砂混粘土、灰色粘土である。小穴内からの遺物の出土はなかった。

SP-2

SP-1の南東で検出した。上面の形状は楕円形を呈する。東西幅0.3m、南北幅0.36mを測る。内部堆積土は、茶褐色細砂混粘土である。小穴内からの遺物の出土はなかった。

SP-3

調査区の南東側で検出した。検出した南北幅は0.23m、深さ0.15mを測る。内部堆積土は上から淡茶色粘土、暗茶灰色細砂混粘土である。小穴内からの遺物の出土はなかった。

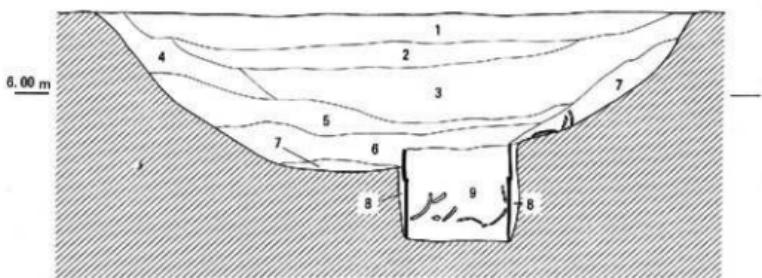
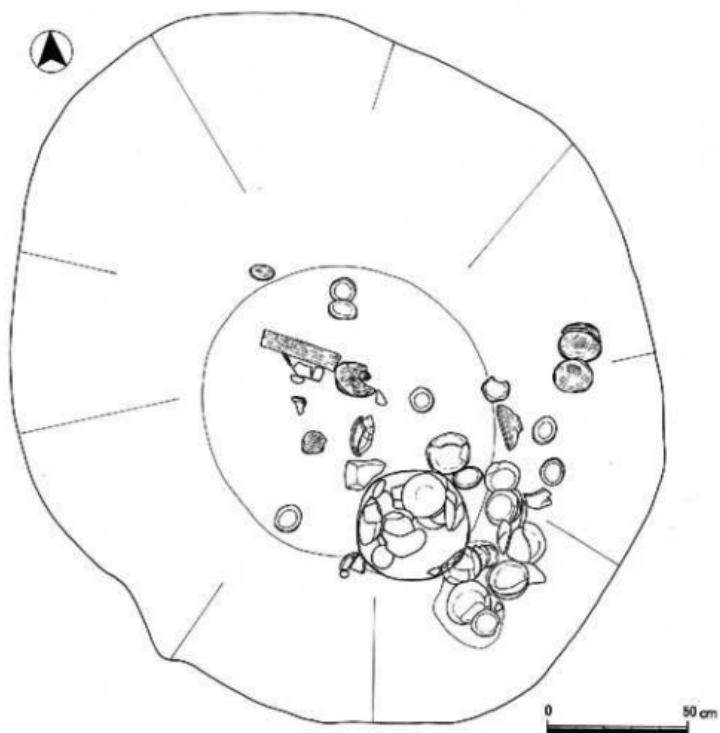
SP-4

調査区の北東で検出した。検出した東西幅は0.47m、深さ0.2mを測る。内部堆積土は、暗灰色細砂混粘土である。小穴内からは土師器の杯（41）が出土している。

まとめ

今回の調査では、古墳時代前期と平安時代後期の遺構・遺物を検出した。当調査地の北側の第17次調査・第21次調査では、古墳時代前期の方形周溝墓と平安時代後期と思われる小穴や溝^{註1}が検出されており、また南側の第14次調査でも古墳時代前期の遺構が検出されている。このことから、今回の調査において検出した遺構は、当遺跡内における当該期の集落の動向を考える上で重要な資料であるといえる。

また、SE-1の第7層から出土した和泉型の瓦器碗は、八尾市域編年Ⅱ-1に、井戸側^{註4}



- | | | |
|--------------|-------------|------------|
| 1 黑灰褐色細砂混黏土 | 4 灰褐色細砂 | 7 雜灰色黏土 |
| 2 雜灰褐色黏土 | 5 雜灰色黏土 | 8 淡灰色細砂混黏土 |
| 3 黑灰色黏土（灰含心） | 6 雜灰褐色細砂混黏土 | 9 灰黑色黏土 |

SE-1 平剖面圖

3 東郷遺跡

内出土の瓦器碗は1~2に区分でき時期差が認められた。このことから、井戸を廃絶した後、井戸側の最下段から2段あたりまで掘削して、土坑として再利用していた可能性が考えられる。

また、井戸側に転用されていた曲物容器の外側には下記の墨書が記されていた。

〔永カ〕 〔十カ〕 〔癸カ〕
□ (□□□) □ 一月廿一日福□□□

この井戸は、出土した瓦器碗の形式から11世紀末から12世紀前葉に使用されていたものと考えられる。11世紀末から12世紀前葉で、「永」ではじまる年号には「永保」(1081~1084)、「永長」(1096~1097)、「永久」(1113~1118)の三つがあり、そのいずれかにあたるものと推定できる。

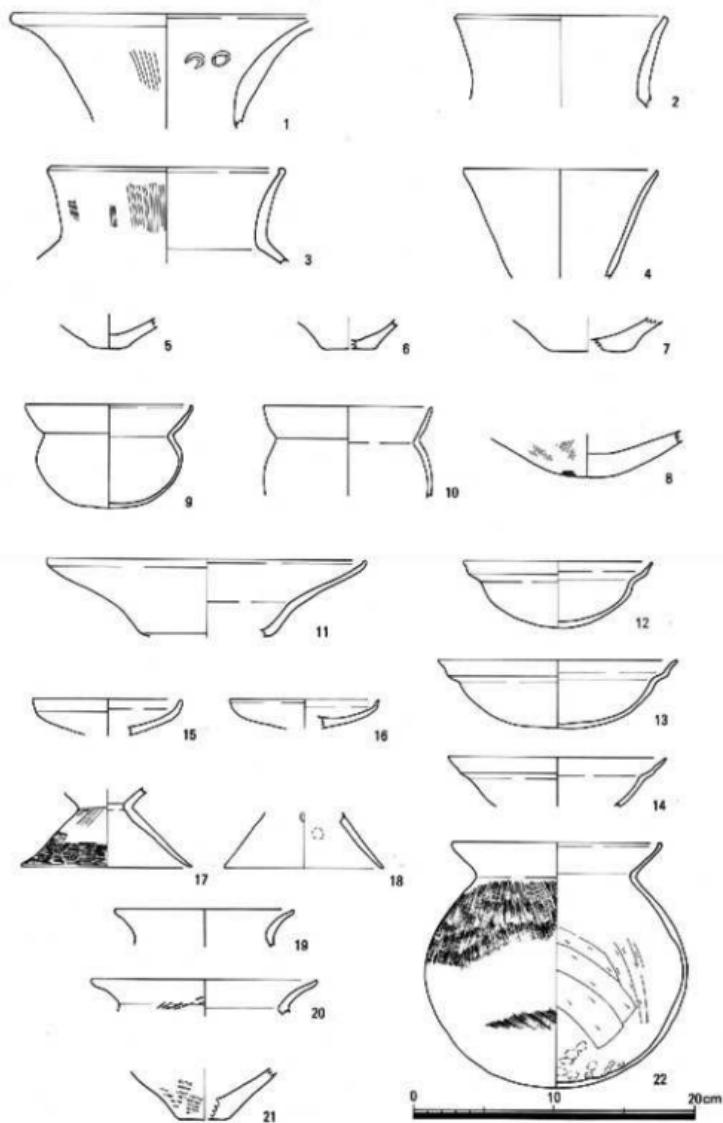
なお、墨書の判読にあたり奈良国立文化財研究所の稲村宏氏の御教示を得た。

註1 ㈱八尾市文化財調査研究会『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要』昭和59年度 『東郷遺跡発掘調査概要報告』 ㈱八尾市文化財調査研究会報告6 1985

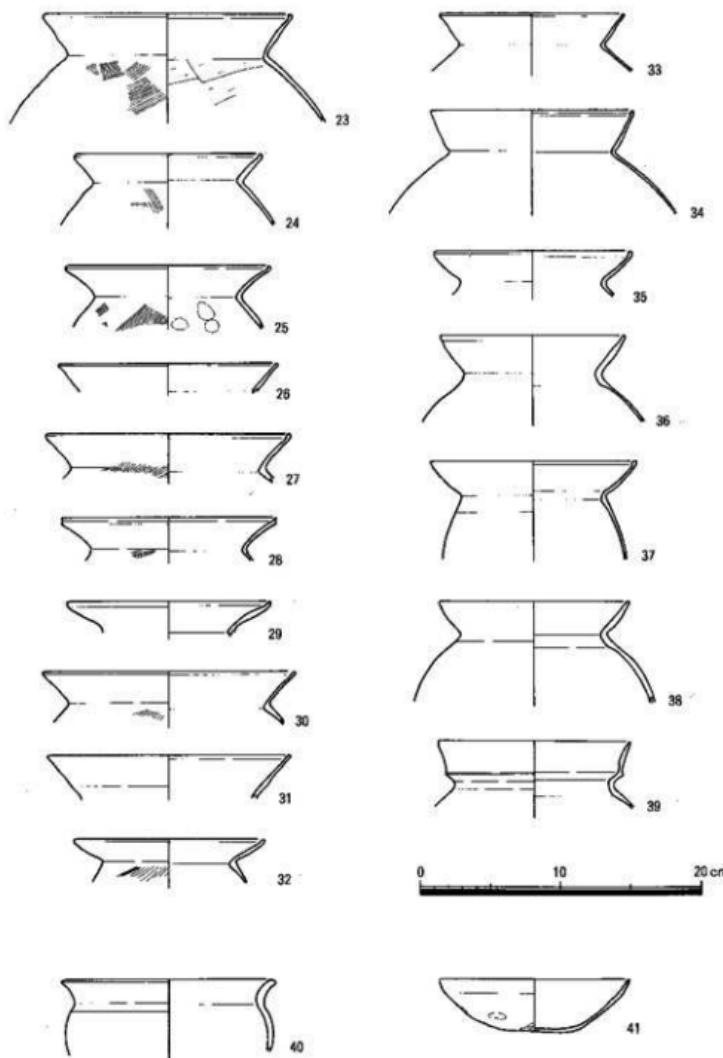
註2 八尾市教育委員会『東郷遺跡第21次埋蔵文化財調査概要』八尾市文化財調査報告13 1986.10

註3 ㈲八尾市文化財調査研究会『東郷遺跡』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和63年度』 ㈱八尾市文化財調査研究会報告17 1988.3

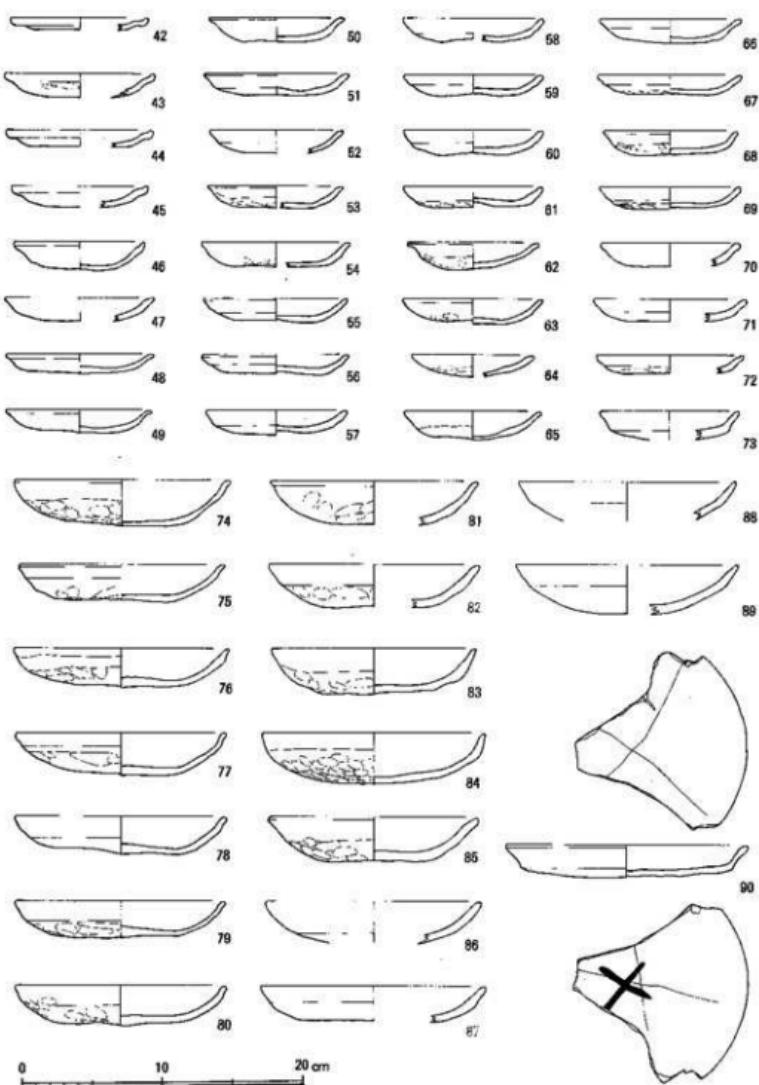
註4 ㈲八尾市文化財調査研究会『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要』昭和61年度 『壹振A遺跡発掘調査概要報告』 ㈱八尾市文化財調査研究会報告15 1989



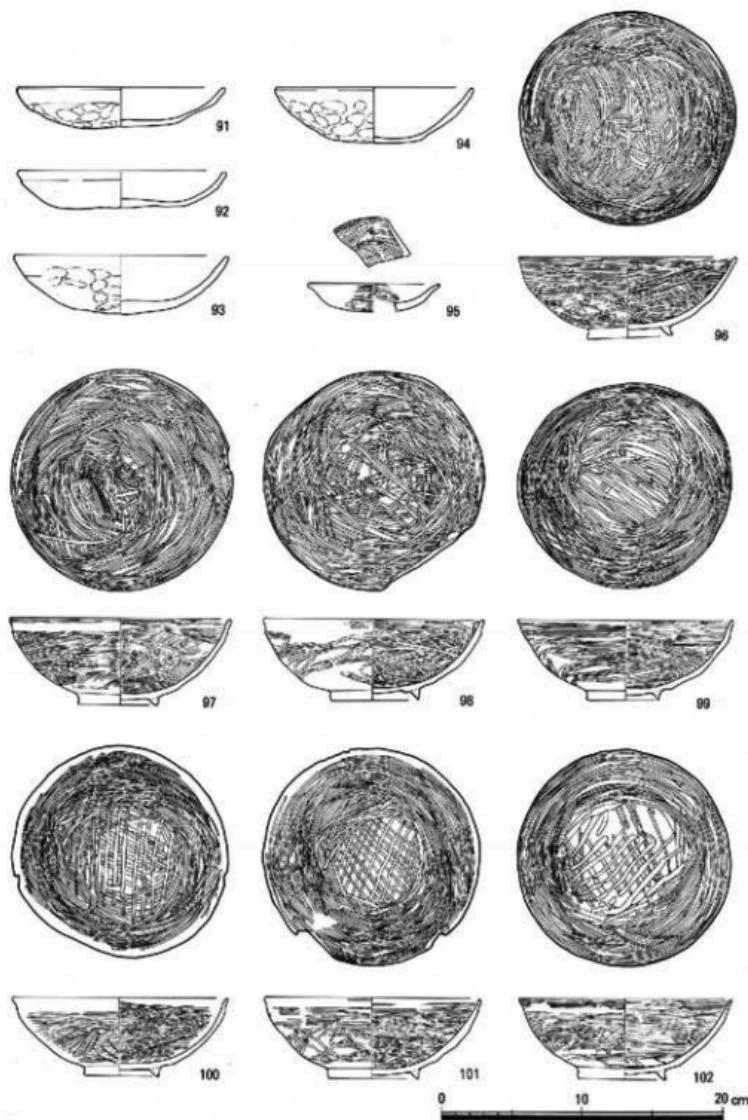
SD-1 出土遺物実測図



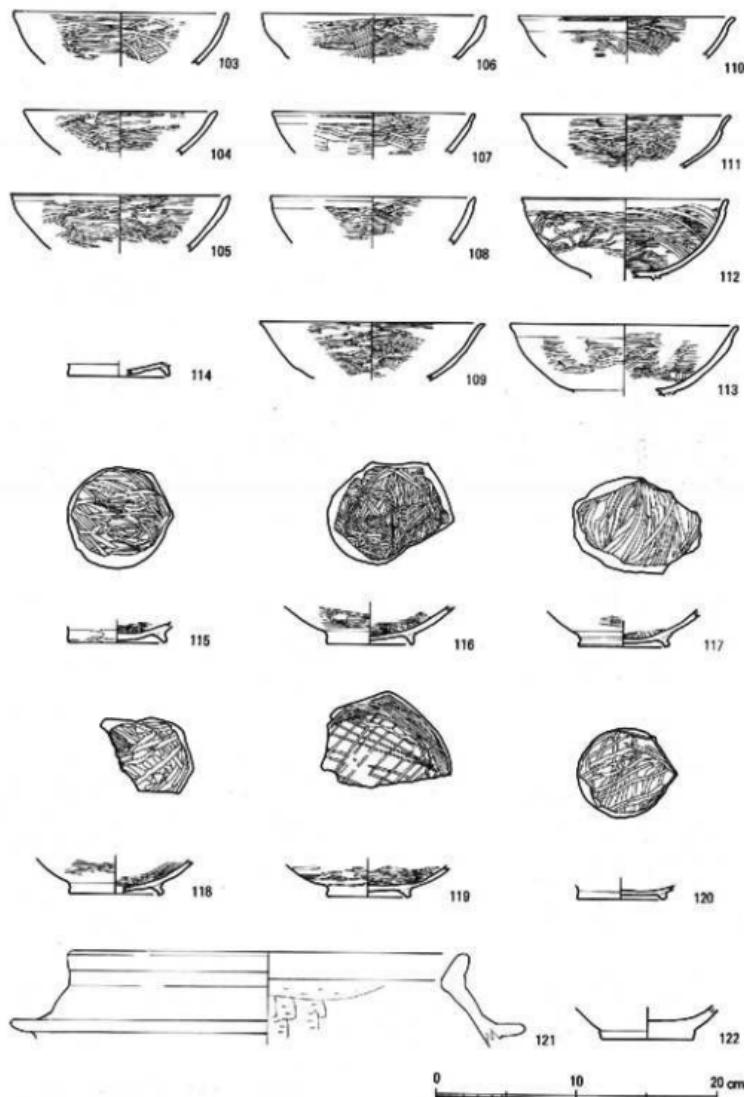
SD-1 (23~39) SK-1 (40) SP-4 (41) 出土遺物実測図



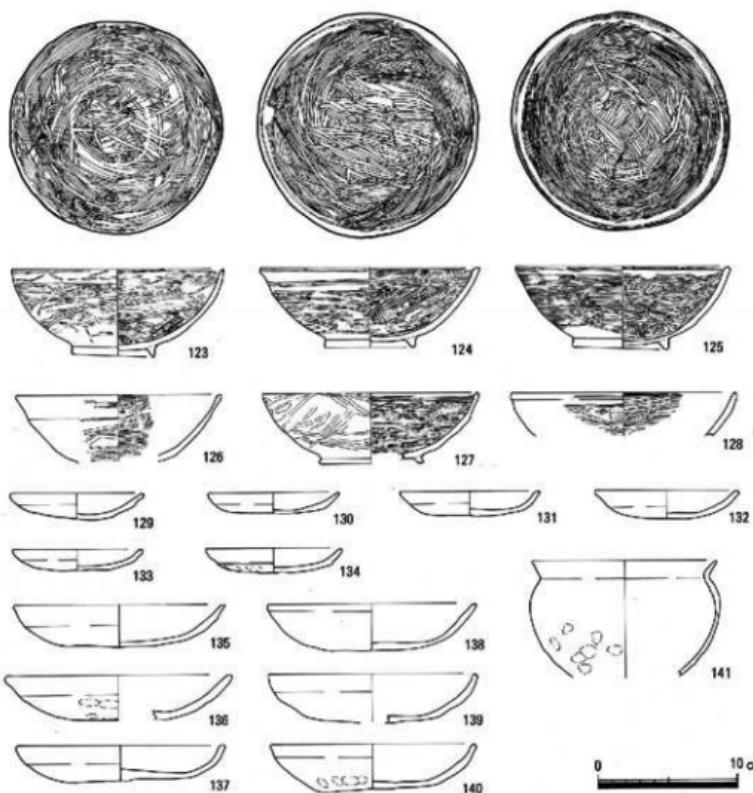
SE-1 第7層出土遺物実測図



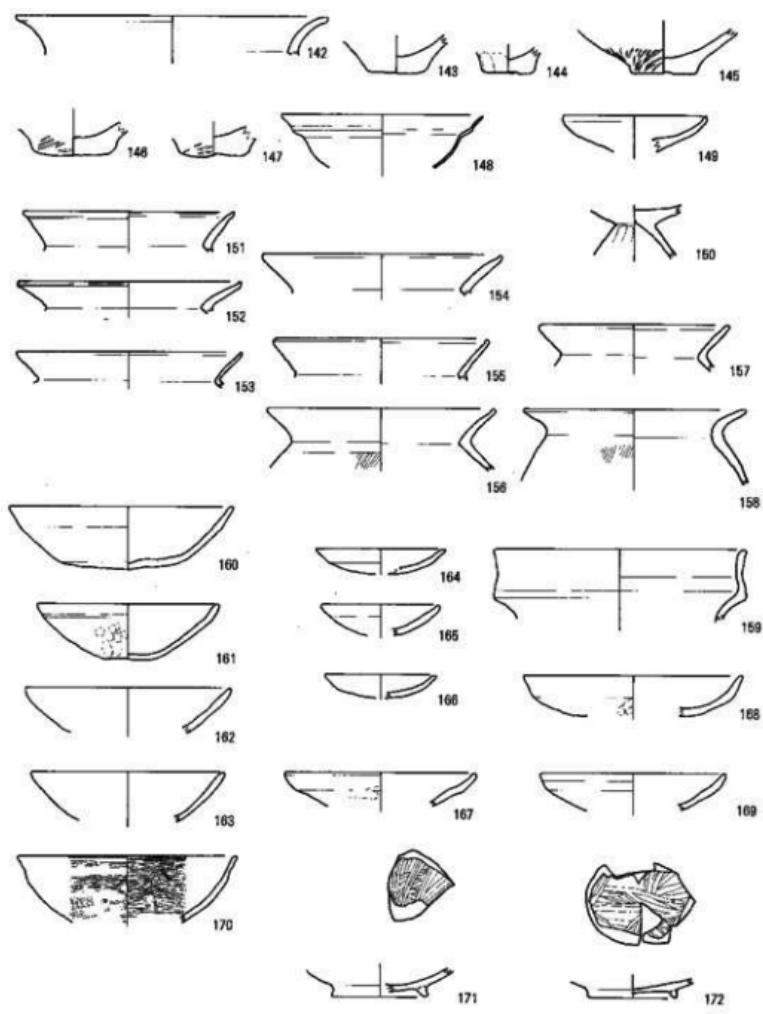
SE-1 第7層出土遺物測量圖2



SE-1 第7層 出土遺物実測図3



SE-1 井戸側内出土遺物



0 10 20 cm

包含層 出土遺物実測図

出土遺物観察表

SD-1

遺物番号	名 標	広量 (cm)	口径 (cm)	器高	成 形・調 整 方 法	色 調	胎 土	焼 成	備 考
1	土師器	21.8			口縁部内外面ヨコナデ。頸部外表面の一部にヘラミガキが認められるが、他は調整不明顯。	赤茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) を含む。	良好	口縁部分
	盃				頸部内側中位に、円形竹管文を2個施す。				
2	土師器	14.7			口縁部内外面ヨコナデ。頸部外表面はナデと認められるが、調整不明顯。口縁部外表面の一部に粘土接着合板が遺存。	灰茶色	やや粗 長石・石英・ 陶灰(±墨母 (0.1~1mm))	良好	口縁部分
	盃								
3	土師器	16.4			口縁部内外面ヨコナデ。頸部外表面の一部にハケナデが認められるが、他は調整不明顯。	赤褐色	やや粗	良好	口縁部分
	盃				体部内側はヘラミガキと認められる。体部外表面は調整不明顯。				
4	土師器	13.7			口縁部内外面ヨコナデ。頸部外表面は指頭圧成形の後、ナデを施したと思われるが、調整不明顯。	赤茶色	やや粗 長石 (0.5 mm) と赤色酸化鉄を含む。	良好	口縁部分
	盃								
5	土師器	底 径 3.0			底部内外面ナデ。底部外側面の一部に粘土接着合板が遺存。	淡褐色	青 長石 (0.1 mm) をわざ かに含む。	良好	底部のみ
	盃								
6	土師器	底 径 4.0			底部内側の一部に板状工具の圧痕が認められるが、他はナデ。底部外側面はヨコナデ。	淡褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) を含む。	良好	底部分
	盃								
7	土師器	底 径 6.3			底部内側の一部に板状工具の圧痕が認められるが、他はナデ。底部外側面はヨコナデ。	淡褐色 ↓ 淡灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) を含む。	良好	底部分
	盃								
8	土師器	底 径 3.0			底部内外面はナデ。底部外表面にハケナデ(6本/cm)と、上位付近は縦方向に、下位は横方向に施すが、他は調整不明顯。	淡灰茶色 ↓ 乳灰色	やや粗 長石・チャート・石英(0.1mm)を含む。	良好	底部分
	盃								
9	土師器	11.5 7.4			口縁部内外面ヨコナデ。体部内側の一部に板状工具の圧痕が認められるが、ナデ。体部外表面の上位はヘラミガキ。下位から底部はヘラミガキを施す。	乳赤茶色 ↓ 淡灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) と赤色酸化鉄を含む。	良好	45以上
	小型丸底壺								
10	土師器	11.9			口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面はナデ。	赤褐色	やや粗 長石・石英 (0.1mm) 赤色酸化鉄を含む。	良好	口縁部分
	小型丸底壺								
11	土師器	22.6			口縁部内外面ヨコナデ。杯部内側はナデ。杯部外表面は一部にハケナデが遺存するが、調整不明顯。	淡赤褐色 ↓ 乳灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) と赤色酸化鉄を含む。	良好	口縁部分
	高杯								
12	土師器	13.4 4.8			口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ともにナデと認めるが調整不明顯。	淡赤茶色 ↓ 乳灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) と赤色酸化鉄を含む。	良好	45以上
	小型鉢								

遺物番号	器種	法量 (cm) 口径 基高	成形・調整技法	色調	胎上	焼成	備考
13	上師器 小型鉢	16.9 4.9	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ともにナデと思われるが調整不明瞭。	淡茶色 ↓ 淡灰茶色	やや粗 長石・チャート・ 石英(0.1~ 1mm)赤色酸化鉄を含む。	良好	口縁部分
14	土師器 小型鉢	15.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ともに調整不明瞭。	乳灰茶色 ↓ 淡灰茶色	密	良好	口縁部分
15	土師器 小型器台	10.1	口縁部内外面ヨコナデ。受部外面の一部にヘラミガキが認められるが、他は調整不明瞭。	淡灰茶色 ↓ 淡灰茶色	密	良好	受部%
16	土師器 小型器台	10.6	口縁部内外面ヨコナデ。受部内外面ともに調整不明。	淡灰茶色 ↓ 淡灰褐色	密	良好	受部%
17	土師器 器台	幅 径 12.0	胎部内面はナデ。胎部外面中位から下位は模方向の番なヘラミガキ。受部との境から上位の一部にハケナデ(6本/cm)を遺存。受部と胎部の境の内面に粘土接合痕遺存。	赤褐色 ↓ 淡灰茶色	密 長石(0.1 mm)をわずかに含む。	良好	胎部%
18	土師器 器台	幅 径 11.2	胎部内外面とともに調整不明瞭。胎部内面の上位に指頭圧痕が遺存。胎部上位の3方に通し孔を穿つ。	赤褐色 ↓ 淡灰茶色	やや粗 石英・長石 (0.1~1 mm)を含む。	良好	胎部%
19	土師器 裏	12.6	口縁部および胎部内外面ヨコナデと思われるが調整不明。	淡茶色	やや粗 長石・チャート・角閃石(0.1~1 mm)を含む。	良好	口縁部分
20	土師器 裏	16.0	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部下面位にタタキ(4条/cm)が遺存する。胎部内面はヘラケズリ。	淡灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好	口縁部分
21	上師器 甕	底 径 3.6	底部内面ナデ。底部外表面はタタキ(3条/cm)、外底面はナデ。底部内面に粘土接合痕遺存。	淡茶褐色 ↓ 暗灰褐色	やや粗 長石・石英・ チャート(0.1 ~0.5 mm)を 多量に含む。	良好	底部%
22	土師器 甕	14.2 17.5	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面上位附近はナデ。中位附近はヘラケズリ。下位に指頭圧痕が遺存。体部外面上位から中位附近ハケナデ(11本/cm)。下位は調整不明瞭。	淡灰褐色 ↓ 淡褐色	やや粗 長石・石英・ 角閃石・漂母 (0.1~2 mm)をやや 多量に含む。	良好	外面焼付青 はび完形
23	土師器 甕	17.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面はヘラケズリ。体部外表面の一部にハケナデ(6本/cm)が施される。	淡灰褐色	やや粗 長石・石英・ 角閃石・漂母 (0.1~4 mm)をやや 多量に含む。	良好	口縁部分
24	上師器 甕	13.1	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面はヘラケズリ。体部外表面の一部にハケメが認められるが、調整不明瞭。	淡灰茶色 ↓ 淡灰褐色	やや粗 長石・角閃石・ 石英(0. 1~1 mm)を含む。	良好	口縁部分
25	土師器 甕	14.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面は指頭圧痕後弱いナデ。指頭圧痕が遺存。体部外表面はハケナデ(8本/cm)。口縁部外表面の一部に粘土接合痕が遺存する。	淡灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~1 mm)をやや 多量に含む。	良好	口縁部分
26	上師器 甕	15.4	口縁部内外面ヨコナデ。	灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~1 mm)を含む。	良好	口縁部分

3 東御遺跡

遺物番号	器種	法面 (cm) 口徑 高さ	成形・調整技術	色調	胎土	焼成備考
27	土師器 壺	17.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面はヘラヶズリ。口縁部外面上位から頸部にかけてハケナデ(6本/cm)を施す。口縁部外面上位に粘土接合痕が遺存。	淡灰褐色	やや粗 長石・石英・ 角閃石(0. 1~0.5mm) を含む。	良好 口縁部外
28	土師器 壺	15.2	口縁部内外面はヨコナデ。頸部内面はヘラヶズリ。頸部外面上部の一部にハケナデ(6本/cm)が認められる。	淡灰褐色	やや粗 長石・石英・ 角閃石(0. 1~0.5mm) を含む。	良好 口縁部外
29	土師器 壺	14.4	口縁部内外面はヨコナデ。	淡灰褐色	やや粗 長石・石英・ 角閃石(0. 1~0.5mm) を含む。	良好 口縁部外
30	土師器 壺	17.8	口縁部内外面はヨコナデ。体部内面はヘラヶズリ。体部外面上位の一部にハケナデ(7本/cm)が認められるが、他の調整不明瞭。	乳灰褐色 と 乳灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好 口縁部外
31	土師器 壺	17.2	口縁部内外面はヨコナデ。口縁部内面端部附近に浅い沈線状の擦みが残る。	乳灰色 と 乳灰茶色	密 雲母(0.1 mm)をわず かに含む。	良好 口縁部外
32	土師器 壺	13.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面はヘラヶズリ。体部外面上位にハケナデ(8本/cm)を施す。口縁部外面上位附近に粘土接合痕が遺存。	乳灰褐色 と 乳灰白色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。 赤色酸化粒を含む。	良好 口縁部外
33	土師器 壺	13.0	口縁部内外面はヨコナデ。体部内面はヘラヶズリと思われる。体部外面は調整不明瞭。	乳灰茶色 と 暗灰色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好 口縁部外
34	土師器 壺	14.4	口縁部内外面はヨコナデ。体部内面は調整不明瞭。	乳灰茶色 と 乳灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好 口縁部外
35	土師器 壺	13.8	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面はヘラヶズリ。頸部外面上部にハケメが進行するが、他の調整不明瞭。	淡灰茶色 と 淡灰褐色	密 長石(0.1 mm)をわず かに含む。	良好 口縁部外
36	土師器 壺	13.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面はヘラヶズリと思われる。体部外面は調整不明瞭。頸部内面はナデと思われる。	淡灰褐色 と 乳灰茶色	やや粗 長石・石英・ チャート(0. 1~1mm) をやや多量 に含む。	良好 口縁部外
37	土師器 壺	14.6	口縁部内外面はヨコナデ。体部内面はヘラヶズリと思われるが調整不明瞭。体部外面上部にナデが認められるが他の調整不明瞭。	淡灰褐色	やや粗 長石・石英・ チャート(0. 1~0.5mm) をやや多量 に含む。	良好 口縁部外
38	土師器 壺	13.4	口縁部内外面はヨコナデ。体部内面はヘラヶズリと思われる。体部外面は調整不明瞭。体部外面上部はナデと思われる。	乳灰色 と 乳灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1mm) 赤色酸化粒 を含む。	良好 口縁部外
39	土師器 壺	13.6	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面はナデと思われる。体部外面上部はヘラヶズリ。体部外面上位は調整不明瞭。	乳灰茶色	やや粗 石英・長石・ チャート(0. 1~1mm) 赤色酸化粒 を含む。	良好 口縁部外

SK-1

遺物番号	器種	底量 口径 (cm) 高さ	形態・調整枝法	色調	胎土	焼成	備考
40	土師器 甕	15.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面は弱いヘ リガキ。体部外表面はナデ。	淡茶灰色 ↓ 乳灰茶色	密 石英・長石 (0.1~0. 5mm) をわ ずかに含む。	良好	外面に煤付 着 口縁部分

SP-4

遺物番号	器種	底量 口径 (cm) 高さ	形態・調整枝法	色調	胎土	焼成	備考
41	土師器 甕	13.4 3.8	口縁部内外面はヨコナデ。体部および底部 内外面は指傾正形後ナデ。体部外表面に指傾 痕が遺存。	淡茶灰色 ↓ 淡灰茶色	密 石英・雲母 (0.1mm) をわずかに 含む。	良好	劣以上

SE-1 第7層

遺物番号	器種	底量 口径 (cm) 高さ	形態・調整枝法	色調	胎土	焼成	備考
42	土師器 小甕	9.8 0.9	口縁部内外面ヨコナデ。側はナデ。	淡茶灰色	密	良好	口縁部分
43	土師器 小甕	10.6 1.7	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。 体部外面の一部に指傾圧成形による指ナデの 痕跡が遺存する。	淡乳茶色	密 赤色酸化粒 をわずかに 含む。	良好	口縁部分
44	土師器 小甕	10.4 1.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。 体部内面の一部にヨコナデが認められる。	淡灰茶色	密 赤色酸化粒 を含む。	良好	口縁部分
45	土師器 小甕	9.8 1.5	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。体 部外面はナデ。体部外表面の一部に指傾圧痕が 認められる。	淡乳茶色	密 赤色酸化粒 を含む。	良好	口縁部分
46	土師器 小甕	9.2 2.1	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面は一部に ヨコナデを施した後にナデを施す。体部およ び底部外表面は指傾圧成形後弱いナデ。底部外 表面に指傾圧痕が認められる。	乳灰茶色 ↓ 淡乳灰色	密	良好	完形
47	土師器 小甕	10.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。 体部内面の一部にヨコナデ。	淡乳茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~1 mm) をやや 多量に含む。	良好	劣
48	土師器 小甕	10.4 1.4	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。底 部内面ナデ。体部および底部外表面弱いナデ。	淡乳茶色	やや粗 長石・石英・ チャート(0. 1~0.5mm) を含む。	良好	完形
49	土師器 小甕	10.2 1.7	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。底 部内面ナデ。体部および底部外表面弱いナデ。	淡乳茶色	やや粗 長石・石英・ チャート(0. 1~0.5mm) を含む。	良好	完形
50	土師器 小甕	9.6 1.7	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内 外表面ナデ。底部外表面の一部に指傾圧成形によ る圧痕が認められる。	淡乳茶色	密 赤色酸化粒 をわずかに 含む。	良好	ほぼ完形

3 東部遺跡

遺物番号	器種	法盤 (cm)	口径 高さ (cm)	成形・調整技術	色調	胎土	焼成 備考
51	土師器	10.2	1.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外面凹いナデ。	淡灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好 分以上
52	土師器	9.4	1.6	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。体部外面ナデ。	乳茶灰色 淡乳褐色	密	良好 口縁部%
53	土師器	9.6	1.6	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。底部内面ナデ。体部および底部外面指頭圧成形後弱いナデ。体部外面に指頭圧痕が遺存する。	淡赤茶色 乳灰褐色	密 赤色酸化粒 を含む。	良好 分
54	土師器	10.6	1.8	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。底部内面ナデ。体部および底部外面指頭圧成形後弱いナデ。体部外面の一部に指頭圧痕および粘土接合痕が遺存。	淡灰茶色 乳赤茶色	密 赤色酸化粒 を含む。	良好 分
55	土師器	10.2	1.7	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。底部内面ナデ。体部および底部外面指頭圧成形後弱いナデ。体部外面に粘土接合痕および指頭圧痕が遺存。	淡乳茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~1 mm)赤色酸 化粒を含む。	はぼ光形
56	土師器	10.2	1.5	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。底部内面ナデ。体部および底部外面指頭圧成形後弱いナデ。底部外面に粘土接合痕が遺存。	淡乳茶色 淡乳褐色	やや粗 石英(0.1 ~1mm)を 含む。	はぼ光形
57	土師器	9.8	1.7	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。底部内面ナデ。体部および底部外面弱いナデ。体部外面に粘土接合痕が遺存。	淡茶灰色 乳灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)赤色酸 化粒を含む。	良好 光形
58	土師器	9.8	1.7	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。底部内面ナデ。体部および底部外面指頭圧成形後弱いナデ。体部外面に指頭圧痕が遺存。体部外面の一部に粘土接合痕が遺存。	乳茶茶色 淡灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)赤色酸 化粒を含む。	良好 分以上
59	土師器	9.8	1.7	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。底部内面ナデ。体部および底部外面は弱いナデ。体部外面の一部に粘土接合痕が遺存。	淡乳茶色	やや粗 長石・石英・ チャート(0. 1~0.5mm) を含む。	良好 分以上
60	土師器	9.8	1.8	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。底部内面ナデ。体部および底部外面指頭圧成形後弱いナデ。口縁部および底部外面上に粘土接合痕が遺存。	淡灰茶色 暗灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~1 mm)を含む。	良好 光形
61	土師器	9.8	1.5	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。底部内面ナデ。体部および底部外面指頭圧成形後弱いナデ。体部外面上に指頭圧痕および粘土接合痕が遺存。	乳灰茶色 淡灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~1 mm)を含む。	良好 光形
62	土師器	9.2	1.9	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。底部内面ナデ。体部および底部外面指頭圧成形後弱いナデ。体部外面上に指頭圧痕が遺存。口縁部および体部外面上に粘土接合痕が遺存。	乳灰茶色 乳灰白色	密	良好 光形
63	土師器	10.0	1.8	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。底部内面ナデ。体部および底部外面指頭圧成形後弱いナデ。体部外面上に粘土接合痕が遺存。	乳灰茶色	密 赤色酸化粒 を含む。	良好 光形
64	土師器	8.6	—	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。底部内面弱いナデ。	淡乳茶色	密	良好 口縁部%

造物番号	器種	造量 口径 (cm) 器高	成形・調整枝法	色調	胎土	焼成	備考
65	土師器	9.6	口縁部外面および体部内面ヨコナデ。底部内面ナデ。体部および底部外表面は指頭圧成形後削いナデ。口縁部外側に粘土接合痕が遺存。	乳灰白色 1 乳灰茶色	密	良好	完形
		2.1					
66	土師器	10.0	口縁部外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外表面は指頭圧成形後削いナデ。口縁部および体部外表面に粘土接合痕が遺存。体部外表面の一部に指頭圧成形後削いナデ。	淡灰茶色 1 乳灰茶色	密 赤色酸化粒 ・長石(0.1mm)をわ すかに含む。	良好	完形
		1.8					
67	土師器	10.2	口縁部外面および体部内面ヨコナデ。底部内面はほぼ一定方向のナデ。体部および底部外表面は指頭圧成形後削いナデ。体部外表面の一部に粘土接合痕が遺存。	乳灰茶色 1 淡赤茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5mm)を含む。	良好	完形
		1.5					
68	土師器	9.4	口縁部外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外表面指頭圧成形後削いナデ。体部外表面に指頭圧成形が遺存。	乳灰白色 1 乳灰橙色	密	良好	完形
		1.7					
69	土師器	10.0	口縁部外面および体部内面ヨコナデ。底部内面はほぼ一定方向のナデ。体部および底部外表面は指頭圧成形後削いナデ。体部外表面に指頭圧成形および粘土接合痕が遺存。	乳灰茶色 1 淡赤茶色	やや粗 石英・長石 (0.1~1mm)を含む。	良好	完形
		1.5					
70	土師器	9.6	口縁部外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。口縁部の端部の一部に粘土接合痕が遺存。	乳 橙 色 1 淡乳褐色	密	良好	口縁部分
71	土師器	10.8	口縁部外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外表面は指頭圧成形後削いナデ。	淡灰茶色 1 乳灰茶色	密	良好	口縁部分
		1.6					
72	土師器	10.4	口縁部外面および体部内面ヨコナデ。体部外表面は指頭圧成形後削いナデ。体部外表面の一部に指頭圧成形が遺存。	乳灰茶色 1 乳灰橙色	密	良好	口縁部分
73	土師器	9.8	口縁部外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。口縁部および体部外表面の一部にヘラミガキ状の面取りを施す。	乳灰白色 1 乳白色	密	良好	口縁部分
74	土師器	15.2	口縁部外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外表面は指頭圧成形後削いナデ。体部外表面に指頭圧成形が遺存。	乳灰茶色 1 乳灰茶色	密	良好	完形
		3.3					
75	土師器	14.5	口縁部外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外表面は指頭圧成形後削いナデ。体部外表面に指頭圧成形および字彙が遺存。	淡灰茶色 1 淡乳灰色	密 長石・石英 (0.1mm)をわずかに含む。	良好	1%以上
		2.7					
76	土師器	15.2	口縁部外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外表面は指頭圧成形後削いナデ。体部外表面に指頭圧成形が遺存。体部外表面の一部に粘土接合痕が遺存。	淡灰茶色 1 淡灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5mm)赤色酸化粒を含む。	良好	ほほ完形
		2.8					
77	土師器	14.8	口縁部外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外表面は指頭圧成形後削いナデ。体部外表面に指頭圧成形が遺存。体部外表面の一部に粘土接合痕が遺存。	淡灰茶色 1 淡灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~2mm)を含む。	良好	完形
		3.1					
78	土師器	14.9	口縁部外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外表面は指頭圧成形後削いナデ。体部外表面に粘土接合痕が遺存。	乳灰茶色 1 乳灰色	やや粗 長石・石英 (0.1~2mm)を含む。	良好	完形
		2.7					

3 東郷跡跡

造形番号	器種	法量 (cm) 口径 器高	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考
79	土師壺	14.7 2.7	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナダ。体部および底部外表面は指頭圧成後弱いナデ。体部外表面に指頭圧痕が遺存。体部外表面の一部に粘土紐接合痕が遺存。	乳灰茶色 ↓ 淡灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~1mm)を含む。	良好	完形
80	土師器	14.8 2.9	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナダ。体部および底部外表面は指頭圧成後弱いナデ。体部外表面に指頭圧痕が遺存。体部外表面の一部に粘土紐接合痕が遺存。	淡灰茶色 ↓ 淡灰色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5mm)を含む。	良好	完形
81	土師壺	14.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面の一部にヨコナデを施すが他はナダ。体部外表面は指頭圧成後弱いナデ。体部外表面に指頭圧痕が遺存。体部外表面の一部に粘土紐接合痕が遺存。	淡灰色 ↓ 灰白色	密	良好	口縁部分
82	土師壺	14.8	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面はナダ。体部外表面は指頭圧成後弱いナデ。体部外表面に指頭圧痕が遺存。	淡灰茶色 ↓ 淡灰白色	密	良好	口縁部分のみ
83	土師壺	14.5 3.3	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナダ。体部および底部外表面は指頭圧成後弱いナデ。体部外表面に指頭圧痕が遺存。体部外表面の一部に粘土紐接合痕が遺存。	乳灰茶色 ↓ 淡灰色	やや粗 長石・石英・チマート(0.1~0.5mm)を含む。	良好	完形
84	土師器	15.7 3.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナダ。体部および底部外表面は指頭圧成後弱いナデ。体部外表面に指頭圧痕が遺存。	淡灰茶色 ↓ 淡灰褐色	やや粗 長石(0.1mm以下)酸化鉄をやや多量に含む。	良好	%
85	土師器	14.8 3.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面はナダ。体部および底部外表面は指頭圧成後弱いナデ。体部外表面に指頭圧痕が遺存。	乳灰白色 ↓ 淡灰茶色	やや粗 長石(0.1mm以下)酸化鉄をやや多量に含む。	良好	%
86	土師器	15.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面はナダ。体部外表面はナダ。	乳灰色 ↓ 乳赤茶色	密	良好	口縁部分
87	土師器	16.0	口縁部内外面はヨコナデ。体部内面はナダ。体部外表面は指頭圧成後弱いナデ。体部外表面に指頭圧痕が遺存。	淡灰色 ↓ 暗灰褐色	密	良好	口縁部分
88	土師器	15.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面はナダ。体部外表面は弱いナデ。	淡茶灰色 ↓ 淡灰色	密	良好	口縁部分
89	土師器	15.8	口縁部内外面は弱いヨコナデ。体部内面はナダ。体部外表面は指頭圧成後弱いナデ。	淡灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5mm)をやや多量に含む。	良好	%
90	土師器	17.0 2.3	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部外表面はナダ。底部内面の中央付近に「メ」字形のヘラ記号を施し、底部外表面の中央付近には更に「メ」字形に墨書きを施す。	淡茶灰色 ↓ 淡灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5mm)をやや多量に含む。	良好	%
91	土師器	14.6 3.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面以下および底部内面にはほぼ一定方向のナデ。体部および底部外表面は指頭圧成後弱いナデ。体部外表面に指頭圧痕が遺存。	乳灰茶色 ↓ 乳赤茶色	密	良好	完形
92	土師器	14.8 2.7	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナダ。体部および底部外表面は指頭圧成後弱いナデ。底部外表面に粘土紐接合痕が遺存。	乳灰茶色 ↓ 乳赤茶色	やや粗 長石・石英・チマート(0.1~0.5mm)を含む。	良好	完形

遺物番号	器種	法量 口径 (cm) 深さ	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考
93	上部器 环	15.2 4.2	口縁部内外面削りヨコナデ。体部および底 部内面ナデ。体部および底部外側は指壓圧成 形後削りナデ。体部外面、指壓圧痕が遺存。	淡茶色 1 暗灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~1 mm) をわず かに含む。	良好	%
94	上部器 环	14.0 4.0	口縁部内外面削りヨコナデ。体部および底 部内面ナデ。体部および底部外側は指壓圧成 形後削りナデ。体部外面に指壓圧痕が遺存。	淡茶灰色 1 淡茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) を含む。	良好	%
95	瓦器 小皿	9.2	口縁部内外面密なヘラミガキ。体部内面は 密なヘラミガキ。体部外側は未分割の密なヘ ラミガキ。	黒灰色	粗良	良好	口縁部%
96	丸器 碗	15.5 5.9 高台径 6.0 高台高 0.8	口縁部内外面密なヘラミガキ。体部内面か ら見込みにかけて乱方向の密なヘラミガキを 施す。体部外側は 5 分割のヘラミガキを施す。 高台部周辺ヨコナデ。	黒灰色	精良	良好	完形
97	瓦器 碗	15.6 6.2 高台径 5.6 高台高 0.7	口縁部内外面はヨコナデの後にヘラミガキ。 体部内面から見込みにかけて分化しない乱方 向の密なヘラミガキ。体部外側は 5 分割の密 なヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。	黑色 1 黑灰色	精良	良好	完形
98	瓦器 碗	15.6 5.9 高台径 6.2 高台高 0.7	口縁部内外面はヨコナデの後にヘラミガキ。 体部内面から見込みにかけて分化しない乱方 向の密なヘラミガキ。体部外側は 5 分割の密 なヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。	黒灰色 1 暗灰色	精良	良好	ほぼ完形
99	瓦器 碗	15.1 4.9 高台径 4.9 高台高 0.6	口縁部内外面密なヘラミガキ。体部内面は 密なヘラミガキ。見込みは一方の密なヘラ ミガキ。体部外側は 5 分割のやや粗いヘラミ ガキ。高台部周辺ヨコナデ。外面に重ね燒痕。	灰黑色 1 暗灰色	精良	良好	完形
100	瓦器 碗	15.2 5.6 高台径 5.2 高台高 0.7	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面密なヘラ ミガキ。見込みは格子状ヘラミガキ。体部外 側は 5 分割の密なヘラミガキ。高台部周辺ヨ コナデ。	黒灰色 1 灰黑色	精良	良好	完形
101	瓦器 碗	15.3 5.7 高台径 6.3 高台高 0.7	口縁部内外面ヨコナデの後削りヘラミガキ。 体部内面密なヘラミガキ。見込みは格子状ヘラ ミガキ。体部外側は 5 分割のやや粗いヘラ ミガキ。高台部周辺ヨコナデ。	黒灰色 1 暗灰色	精良	良好	ほぼ完形
102	瓦器 碗	15.0 5.9 高台径 6.1 高台高 0.8	口縁部内外面密なヘラミガキ。体部内面密 なヘラミガキ。見込みはやや粗い格子状ヘラ ミガキ。体部外側は 5 分割のやや粗いヘラ ミガキ。高台部周辺ヨコナデ。外面に重ね燒痕。	灰黑色 1 灰白色	精良	良好	完形
103	瓦器 碗	15.0	口縁部内外面はやや粗いヘラミガキ。体部 内面は密なヘラミガキ。体部外側はやや粗い ヘラミガキ。	黒灰色 1 暗石 (0.1 mm) をわず かに含む。	やや粗 長石 (0.1 mm) をわず かに含む。	良好	口縁部%
104	瓦器 碗	13.6	口縁部内外面はやや粗いヘラミガキ。体部 内外面は密なヘラミガキ。体部外側の一部に 指壓圧痕が遺存する。	灰黑色 1 暗灰色	やや粗 長石・石英 (0.1 mm) をわずかに 含む。	良好	口縁部%
105	丸器 碗	15.4	口縁部内外面ヨコナデの後削りヘラミガキ。 体部内面は密なヘラミガキ。	乳灰色 1 黑灰色	精良	良好	口縁部%
106	丸器 碗	15.9	口縁部内外面はヨコナデの後、やや粗いヘ ラミガキ。体部内外面は密なヘラミガキ。内 外面ともに皮膚剥離不良である。	淡赤褐色 1 乳灰茶色	精良	良好	口縁部%

3 東都跡跡

番号	器種	底面 (cm) 横幅	成形・調整技術	色調	胎土	焼成	備考
107	瓦器 碗	14.3	口縁部内外面はヨコナデの後、密なヘラミガキ。体部内外面は密な単位輪の太いヘラミガキ。	黒灰色 ↓ 暗灰色	精良	良好	口縁部外
108	瓦器 碗	14.4	口縁部内外面はヨコナデの後、密なヘラミガキ。体部内部は品方向の密なヘラミガキ。体部外表面は横方向の密なヘラミガキ。	黒灰色	精良	良好	口縁部外
109	瓦器 碗	15.8	口縁部内外面はヨコナデの後、やや粗いヘラミガキ。体部内部は品方向の密なヘラミガキ。体部外表面は横方向の密なヘラミガキ。	黒灰色 ↓ 暗灰色	精良	良好	口縁部外
110	瓦器 碗	15.2	口縁部内外面はヨコナデの後、密なヘラミガキ。体部内部と外表面ともに密なヘラミガキ。	黒灰色 ↓ 暗灰色	精良	良好	口縁部外
111	瓦器 碗	14.8	口縁部内外面はヨコナデの後、密なヘラミガキ。体部内部は品方向の密なヘラミガキ。体部外表面は横方向の密なヘラミガキ。	黒灰色	精良	良好	口縁部外
112	瓦器 碗	14.6 高台径 4.8	口縁部内外面はヨコナデの後、粗いヘラミガキ。体部内部から見込みにかけて乱方向の密なヘラミガキ。体部外表面は五分割のやや粗い横方向のヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。	黒灰色	精良	良好	%
113	瓦器 碗	16.0 高台径 7.4	口縁部内外面はヨコナデの後、一部に粗いヘラミガキ。体部内部から見込みにかけて乱方向の密なヘラミガキ。体部外表面は横方向のやや粗いヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。	黒灰色 ↓ 暗灰色	精良	良好	%
114	瓦器 碗	高台径 7.0 高台高 0.7	高台部周辺ヨコナデ。他の調整不明。	暗灰色	普通	良好	成部外
115	瓦器 碗	高台径 6.7 高台高 0.8	見込みは乱方向の密なヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。	黒灰色 ↓ 暗灰色	精良	良好	底部充存
116	瓦器 碗	高台径 6.0 高台高 0.8	体部内部から見込みにかけて乱方向の密なヘラミガキ。体部外表面は横方向のやや粗いヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。	乳白色 ↓ 暗灰色	精良	良好	底部充存
117	瓦器 碗	高台径 6.2 高台高 0.8	体部内部から見込みにかけて乱方向の密なヘラミガキ。体部外表面は横方向のやや粗いヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。体部外表面に重ね削痕。	黒灰色 ↓ 暗灰色	精良	良好	底部充存
118	瓦器 碗	高台径 6.3 高台高 0.8	体部内部から見込みにかけて乱方向の密なヘラミガキ。体部外表面は横方向の粗いヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。体部外表面に重ね削痕。	灰白色 ↓ 黒灰色	精良	良好	底部外
119	瓦器 碗	高台径 5.6 高台高 0.7	体部内部は密なヘラミガキ。見込みは格子状ヘラミガキ。体部外表面は密なヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。体部外表面と高台部の境に接合振痕。	黒灰色	精良	良好	底部外
120	瓦器 碗	高台径 6.2 高台高 0.5	見込みは格子状ヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。	黒灰色	精良	良好	底部のみ

遺物番号	器種	底量 (cm) 周長	成形・調整技術	色調	胎土	焼成	備考
121	土器 土釜	28.0 周径36.8	口縁部内外面および鉢底ヨコナデ。体部内面は削りヘラケズリ。口縁部外面下位に沈線状の溝が刻む。	茶褐色 淡褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好	口縁部分
122	陶器 碗	高台径 6.4 高台高 0.7	高台部は削り出し高台。体部内外面ともにロクロナデ。外底面に回転水切り痕が遺存。	褐色 淡灰褐色 胎土 乳素灰色	細密	堅致	底部分

S E - 1 井戸側内

遺物番号	器種	底量 (cm) 周長	成形・調整技術	色調	胎土	焼成	備考
123	瓦器 瓶	15.0 6.3 高台径 5.8 高台高 1.0	口縁部内外面は密なヘラミガキ。体部内面は薄なヘラミガキ。見込みは互方向の密なヘラミガキ。鉢底外面は五分割のやや粗いヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。	黒灰色	精良	良好	光形
124	瓦器 瓶	15.6 5.9 高台径 6.2 高台高 0.7	口縁部内外面はヨコナデの後、密なヘラミガキ。体部内面は密なヘラミガキ。見込みは一方斜の密なヘラミガキ。体部外面は五分割の密なヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。	黒灰色	精良	良好	光形
125	瓦器 瓶	15.0 5.9 高台径 7.0 高台高 0.7	口縁部内外面および体部内面は密なヘラミガキ。見込みは乱方向の密なヘラミガキ。体部外面は五分割の密なヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。	黒灰色	精良	良好	光形
126	瓦器 瓶	14.6	口縁部内外面はヨコナデの後、粗いヘラミガキ。体部内面は密なヘラミガキ。体部外面はやや粗いヘラミガキ。	黒灰色 暗灰色	精良	良好	口縁部分
127	瓦器 瓶	15.4 5.0 高台径 6.8 高台高 0.7	口縁部内外面は密なヘラミガキ。体部内面は薄なヘラミガキ。見込みは乱方向の密なヘラミガキ。体部外面は五分割のやや粗いヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。	黒灰色 暗黑色	精良	良好	口縁部分
128	瓦器 瓶	15.8	口縁部内外面はヨコナデの後、密なヘラミガキ。体部内外面は密なヘラミガキ。	黒灰色	精良	良好	口縁部分
129	土師器 小皿	9.2 1.8	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外面は指頭圧成形弱いナデ。	乳茶灰色 淡茶色	赤色酸化鉄 を多量に含む。	良好	光形
130	土師器 小皿	9.1 1.5	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外面は指頭圧成形弱いナデ。底部外面に粘土結合痕が遺存。	乳茶色 乳灰白色	密	良好	ほぼ光形
131	土師器 小皿	9.9 1.7	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外面は指頭圧成形弱いナデ。体部外面の一部に粘土結合痕が遺存。	淡乳茶色 乳灰白色	密	良好	ほぼ光形
132	土師器 小皿	9.5 1.8	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外面は指頭圧成形弱いナデ。	淡茶灰色 乳灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好	光形
133	土師器 小皿	9.1 1.5	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外面は指頭圧成形弱いナデ。体部外面の一部に粘土結合痕が遺存。	乳茶灰色 乳灰白色	密	良好	光形

3 東部遺跡

遺物番号	器種	法量 (cm) 口径 器高	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考
134	土師壺	9.5	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。底面ナデ。	乳黄茶色 ↓ 淡茶黄色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好	完形
	小皿	1.8	体部および底部外面は指頭圧成後凹いナデ。体部外面の一部に指頭圧痕が遺存。				
135	土師器	14.7	口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。	淡乳茶色 ↓ 乳赤茶色	密 赤色酸化粒 をやや多量 に含む。	良好	完形
	中皿	3.0	体部および底部外面は指頭圧成後凹いナデ。体部外面の一部に指頭圧痕が遺存。				
136	土師器	16.0	口縁部内外面および体部内面上位はヨコナデ。体部中位以下はナデ。体部外面は指頭圧成後凹いナデ。体部外面の一部に指頭圧痕が遺存。	灰茶色 ↓ 暗灰茶色	密	良好	口縁部分
	中皿						
137	土師器	14.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外面は指頭圧成後凹いナデ。	淡乳茶色 ↓ 乳赤茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)赤色酸 化粒を含む。	良好	完形
	中皿	2.5					
138	土師壺	17.5	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外面は指頭圧成後凹いナデ。体部外面の一部に指頭圧痕が認められる。	淡乳茶色 ↓ 乳灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)赤色酸 化粒を含む。	良好	ほぼ完形
	中皿	3.3					
139	土師器	14.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外面は指頭圧成後凹いナデ。	灰茶色	密	良好	1/4
	中皿						
140	土師器	14.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外面は指頭圧成後凹いナデ。体部および底部外面に粘土接合痕が遺存。体部外面の一部に指頭圧痕が遺存。	淡乳茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)赤色酸 化粒を含む。	良好	完形
	中皿	3.2					
141	土師器	13.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面指頭圧成後ナデ。体部外面下位に指頭圧痕が遺存。	淡灰茶色 密	良好	1/4	
	裏						

包含層出土遺物

遺物番号	器種	法量 (cm) 口径 器高	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考
142	你生土器	22.2	口縁部内外面ヨコナデ。	淡灰茶色 ↓ 乳赤茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好	口縁部分
	裏						
143	你生土器	1	底部内面ナデ。底部外面の一部にタタキ が遺存するが、調整不正確。	乳灰茶色 ↓ 乳茶赤色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好	底部のみ
	裏 底 径 4.0						
144	你生土器		底部内面ナデ。底部外山は指頭圧成後ナ デ。底部外側面の一部に指頭圧痕が遺存。	淡灰色 ↓ 淡灰茶色	やや粗 長石・石英・ チャート(0. 1~0.5 mm)を含む。	良好	底部のみ
	裏 底 径 3.6						
145	你生土器		底部内面ナデ。底部外面はタタキ(4条/ cm)、底部外側面および外底面ナデ。	淡灰褐色 ↓ 淡灰橙色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好	底部のみ
	裏 底 径 4.8						
146	你生土器		底部内面ナデ。底部外面の一部にタタキ が遺存する。	赤褐色 ↓ 暗灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好	底部のみ
	裏 底 径 5.0						

遺物番号	器種	法量 口径 (cm) 容量	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考
147	外生上器 壺	直径 4.2	底部内面ナデ。底部外面の一部にタキメ が遺存する。	淡赤褐色 ↓ 浅墨褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) を含む。	良好	底部のみ
148	土師器 小型壺	14.4	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。	淡赤茶色 ↓ 乳茶灰色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) を含む。	良好	口縁部%
149	土師器 小型器台	10.5	口縁部内外面ヨコナデ。受部内外面ナデ。	乳茶色 ↓ 淡赤茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) 赤色鐵化粒 を含む。	良好	受部%
150	土師器 小型器台		受部内外面および脚部内面は調整不明瞭。 脚部外面は指押しが認められる。受部下位に 柱上腰合痕が一部に遺存する。脚部中位の 透し孔は三孔と想われる。	淡灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.5~0.1 mm) 赤色鐵 化粒を含む。	良好	脚部
151	土師器 壺	15.0	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外沿脚部下 位に凹状の瘤みが現る。頸部内面はヘラケ ズリ。	淡灰褐色 ↓ 淡墨灰色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.1 mm) チャート(0. 1~1 mm) を含む。	良好	口縁部%
152	土師器 壺	15.8	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外表面部付 近に沈線状の瘤みが現る。頸部内面はヘラケ ズリ。	淡灰褐色 ↓ 乳灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.1 mm) チャート(0. 1~1 mm) を含む。	良好	口縁部%
153	土師器 壺	16.0	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面はヘラケ ズリ。他は調整不明。	淡灰茶色 ↓ 乳茶灰色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) を含む。	良好	口縁部%
154	土師器 壺	17.0	口縁部内外面ヨコナデ。	乳灰褐色 ↓ 乳茶灰色	やや粗 長石・石英 (0.1~1 mm) を含む。	良好	口縁部%
155	土師器 壺	15.0	口縁部内外面ヨコナデ。他は調整不明。	淡灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) を含む。	良好	口縁部%
156	土師器 壺	16.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面はヘラケ ズリ。体部外面の一部にハケメが認められる。	乳灰茶色 ↓ 乳灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) 赤色鐵 化粒を含む。	良好	口縁部%
157	土師器 壺	13.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面はヘラケ ズリ。体部外面は調整不明瞭。	乳灰茶色 ↓ 乳灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) 赤色鐵 化粒を含む。	良好	口縁部%
158	土師器 壺	15.8	口縁部内外面および体部内面上位はヨコナ デ。体部内面以下はヘラケズリ。体部外面の 一部にハケメが認められる。	淡灰茶色 ↓ 乳灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) を含む。	良好	口縁部%
159	土師器 壺	17.6	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面はナデ と思われるが、調整不明瞭。	灰白色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) をわざ かに含む。	良好	口縁部%
160	土師器 壺	15.8 4.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内 面ナデ。体部および底部外面指印成形後器 いナデ。体部外側の一部に指印压痕が遺存す る。	淡灰茶色 ↓ 淡灰褐色	や 長石・石英 (0.1 mm) をわざ かに含む。	良好	%

3 東郷遺跡

遺物番号	器種	法量 (cm)	口径 器高	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考
161	土師器 环	13.0 4.2		口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外面指頭圧成形後弱いナデ。体部外面上に指頭圧痕が遺存する。	淡灰茶色 ↓ 淡灰褐色	密	良好	%
162	土師器 环	14.3		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面指頭圧成形後弱いナデ。体部外面上の一部に指頭圧痕が遺存する。	乳灰茶色 ↓ 暗灰茶色	密	良好	口縁部分
163	土師器 环	13.6		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面指頭圧成形後弱いナデ。体部外面上の一部に指頭圧痕および粘土接合痕が遺存する。	淡灰茶色 ↓ 淡赤茶色	密 長石・石英 (0.1 mm) をわずかに 含む。	良好	口縁部分
164	土師器 小皿	9.2		口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部外面上ナデ。口縁部および体部外面上の一部に粘土接合痕が遺存する。	乳灰褐色 ↓ 淡赤茶色	密 赤色酸化鉄 を含む。	良好	%
165	土師器 小皿	8.4		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面指頭圧成形後弱いナデ。体部外面上に指頭圧痕が、また、口縁部および体部外面上に粘土接合痕が遺存する。	乳灰茶色 ↓ 淡灰褐色	密	良好	%
166	土師器 小皿	7.8		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面上の一部に粘土接合痕が遺存する。	乳灰褐色 ↓ 乳灰白色	密 赤色酸化鉄 を含む。	良好	%
167	土師器 中皿	13.6		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面指頭圧成形後弱いナデ。体部外面上の一部に指頭圧痕が遺存する。	乳灰褐色 ↓ 乳灰白色	密 赤色酸化鉄 を含む。	良好	口縁部分
168	土師器 中皿	15.4		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面指頭圧成形後弱いナデ。体部外面上の一部に指頭圧痕が遺存する。	乳灰褐色 ↓ 乳灰白色	密	良好	%
169	土師器 中皿	13.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。見込みは乱方向の密なヘラミガキ。体部外面上は密なヘラミガキ。	淡赤茶色 ↓ 淡灰茶色	密 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好	口縁部分
170	瓦器 桶	15.4		口縁部内外面ヨコナデの後、やや粗いヘラミガキ。体部外面上は密なヘラミガキ。	黒灰色	稍良	良好	口縁部分
171	瓦器 桶		高台径 6.6 高台高 0.8	見込みは乱方向の密なヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。	黒灰色	稍良	良好	底部分
172	瓦器 桶		高台径 6.0 高台高 0.5	見込みは乱方向の密なヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。	黒灰色	稍良	良好	底部分以上



調査区全景（西から）

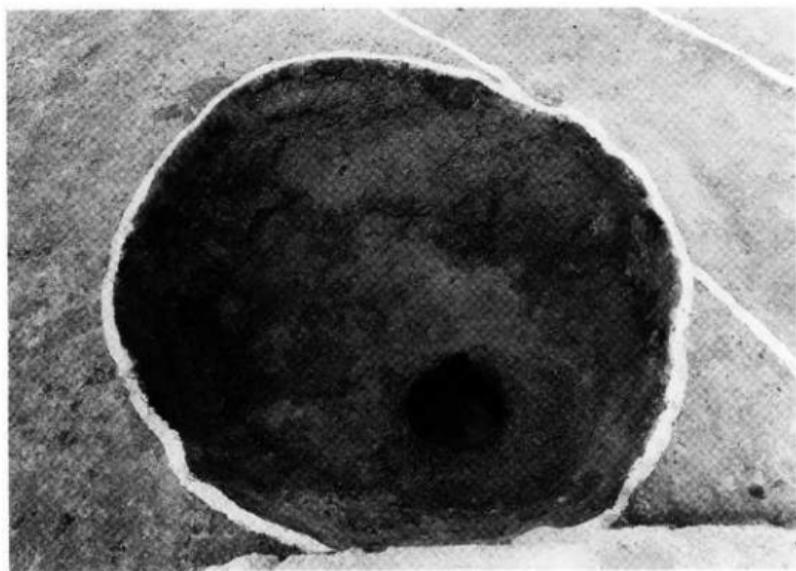


SD-1 掘出状況（南から）

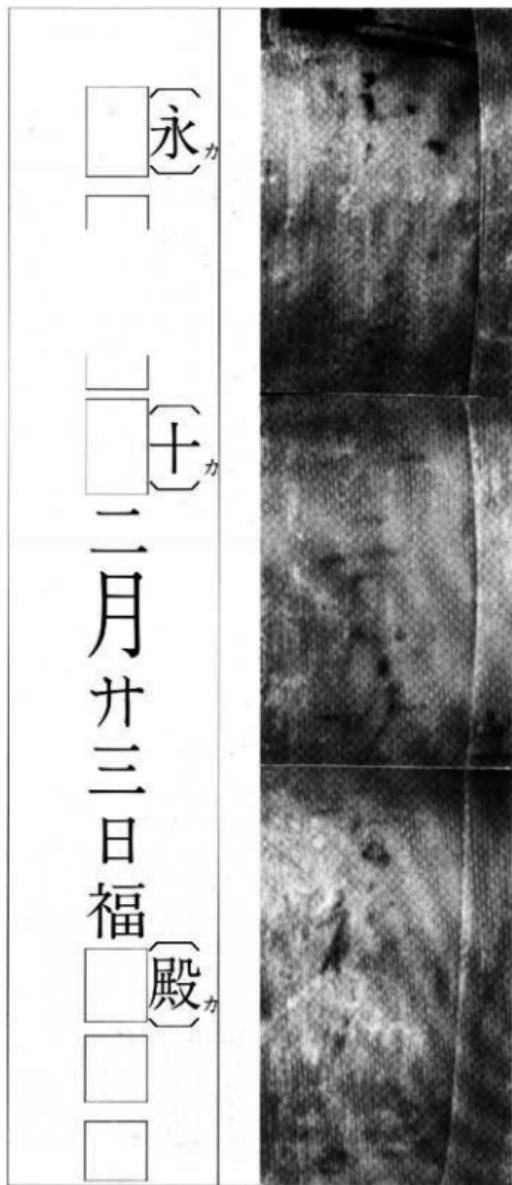
3 東部遺跡



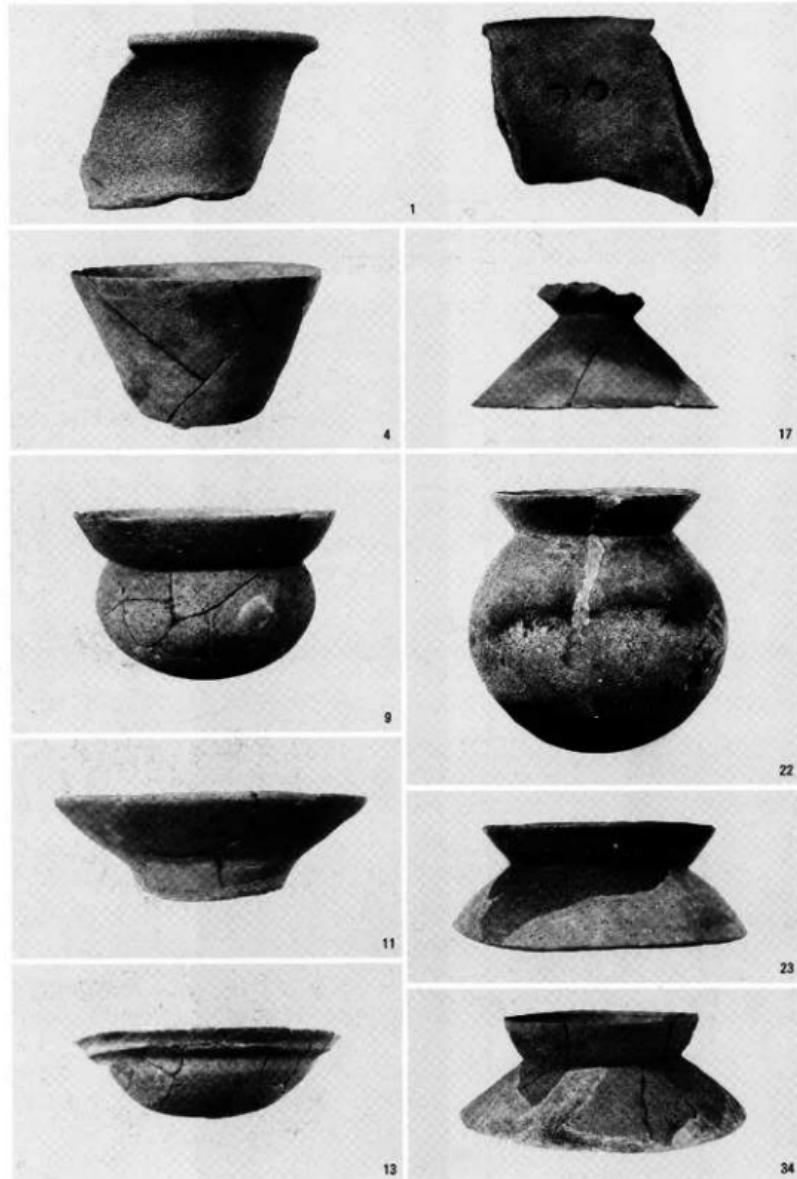
SE-1 遺物出土状況（南から）



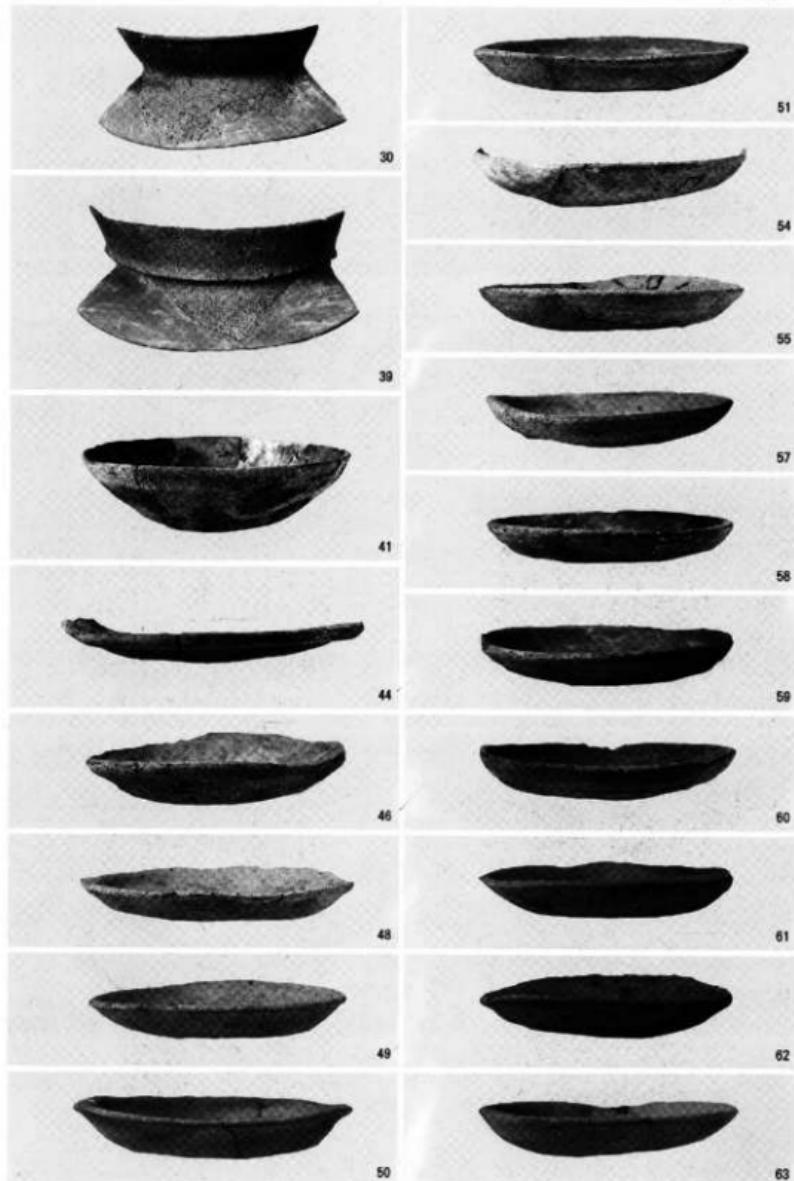
同上 完備



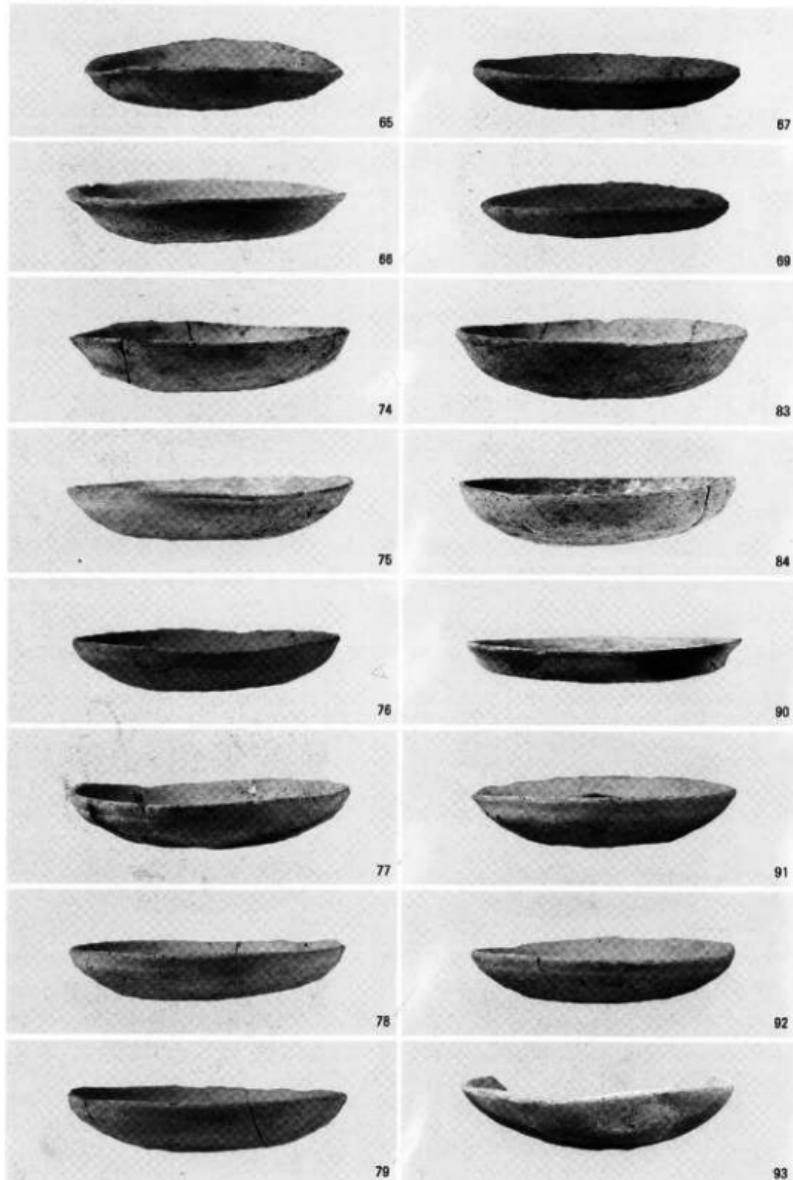
SE-1 井戸側外面墨書き



SD-1 出土遺物



SD-1 (36-39) SP-4 (41) その他SE-1 第7層出土遺物



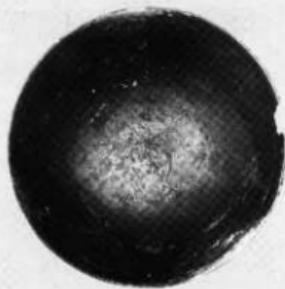
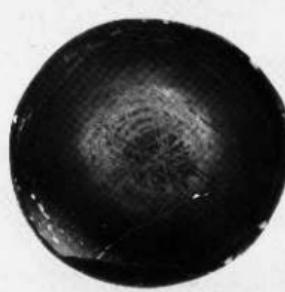
SE-1 第7層出土遺物



96



98



97



99

SE-1 第7層出土遺物



100



102



115



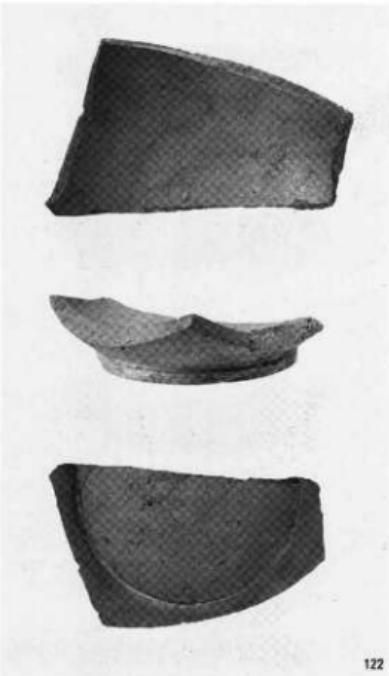
117



101

121

SE-1 第7層出土遺物



122



124



123



125

SE-1 第7層 (122)・SE-1 井戸側内 (123~125) 出土遺物

3 東側遺跡



129



137



130



138



131



139



132



140



133



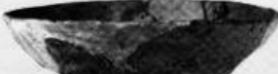
134



141



135



140

SE-1 井戸側内 (129~135・137~141)・包含層 (140) 出土遺物

4 東郷遺跡（第29次調査）

調査地 八尾市光町2丁目28-1他3筆

調査期間 平成元年3月6日～平成元年3月25日

調査面積 220m²

はじめに

今回の発掘調査は共同住宅建設に伴って実施したもので、当調査研究会が東郷遺跡内で実施した発掘調査の第29次調査にあたる。

今回の調査地は、当調査研究会が昭和57年度に実施した第11次調査地から東へ約50m地点にあたる。

調査概要

共同住宅建設予定地に合わせて東西13m・南北16mの調査区を設定した。掘削に際しては、現地表下1.2mまでを機械で掘削し、以下の各層は人力によって掘削した。

当調査地での基本層序は、第0層盛土・第1層旧耕土・第2層灰青色細砂混粘土・第3層暗茶色疊混粘土・第4層茶灰褐色粗砂混粘土・第5層茶灰色粘質シルトである。

調査の結果、現地表下1.6m（標高6.4m）付近に存在する第5層上層で、弥生時代後期の溝2条（SD-1・SD-2）、古墳時代前期（庄内式期）の溝2条（SD-3・SD-4）、中世の溝5条（SD-5～9）、近世の溝1条（SD-10）、時期不明の土坑3基（SK-1～3）を検出した。

検出遺構と出土遺物

SD-1

南西～北東方向に伸びる溝で、検出長17m、幅1.9m～3.2m、深さ0.4mを測る。内部堆積土は、上から茶褐色疊混粘土・暗灰色シルト混粘土で、暗灰色シルト混粘土からは弥生時代後期の鉢（1）が出土している。

SD-2

南東～北西方向に伸びる溝で、SD-1と合流している。検出長4m、幅2.6m、深さ0.4mを測る。内部堆積土は上から茶褐色疊混粘土・暗灰色シルト混粘土で、暗灰色シルト混粘土からは、弥生時代後期の長頸壺（2）が出土している。

SD-3

南東～北西方向に蛇行して伸びる溝で、検出長5m、幅0.4～0.75m、深さ0.06mを測る。内

4 東部遺跡

部堆積土は、茶褐色シルト混粘土で、溝内からは、土師器の細片が少量出土した。

SD-4

南北方向に伸びる溝で、検出長4m、幅1.9m、深さ0.35mを測る。内部堆積土は、茶褐色粗砂混粘土で、溝内からの遺物の出土はなかった。

SD-5

東西方向に伸びる溝で、検出長5.5m、幅0.45m、深さ0.07mを測る。内部堆積土は、灰色細砂混粘土で、溝内からは土師器の細片が少量出土した。

SD-6

東西方向に伸びる溝で、検出長3.5m、幅0.24m、深さ0.06mを測る。内部堆積土は、灰色細砂混粘土で、溝内からは土師器の細片が少量出土した。

SD-7

東西方向に伸びる溝で、検出長10.5m、幅0.56～0.8m、深さ0.1mを測る。内部堆積土は、灰色細砂混粘土で、溝内からは土師器の細片が少量出土した。

SD-8

東西方向に伸びる溝で、検出長8m、幅0.4～1.06m、深さ0.16mを測る。内部堆積土は、灰色細砂混粘土で、溝内からの遺物の出土はなかった。

SD-9

東西方向に伸びる溝で、検出長7m、幅1.05～1.75m、深さ0.1mを測る。内部堆積土は、灰色粗砂混粘土で、溝内からは土師器の細片が少量出土した。

SD-10

南北方向に伸びる溝で、検出長3.7mを測る。幅および深さは、溝の西側が調査区外にあり不明である。溝内からは陶磁器の細片が少量出土している。

SK-1

調査区の北西側で検出した。上面の形状は、東西方向に長い楕円形を呈する。東西幅1.13m、南北幅0.8m、深さ0.15mを測る。内部堆積土は茶灰色シルト混粘土で、土坑内からの遺物の出土はなかった。

SK-2

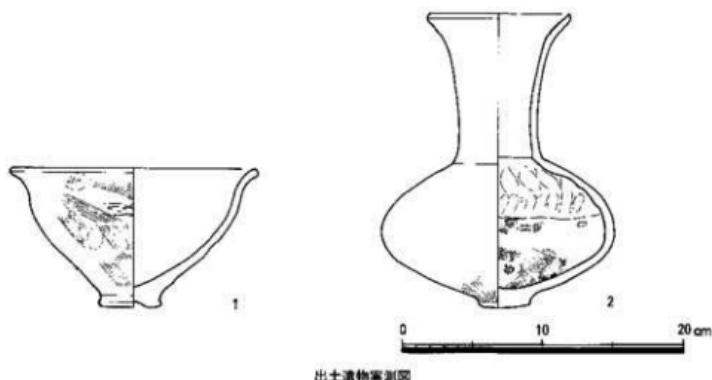
SK-1の東側で検出した。上面の形状は、円形を呈する。径0.7m、深さ0.1mを測る。内部堆積土は茶褐色シルト混粘土で、土坑内からの遺物の出土はなかった。

SK-3

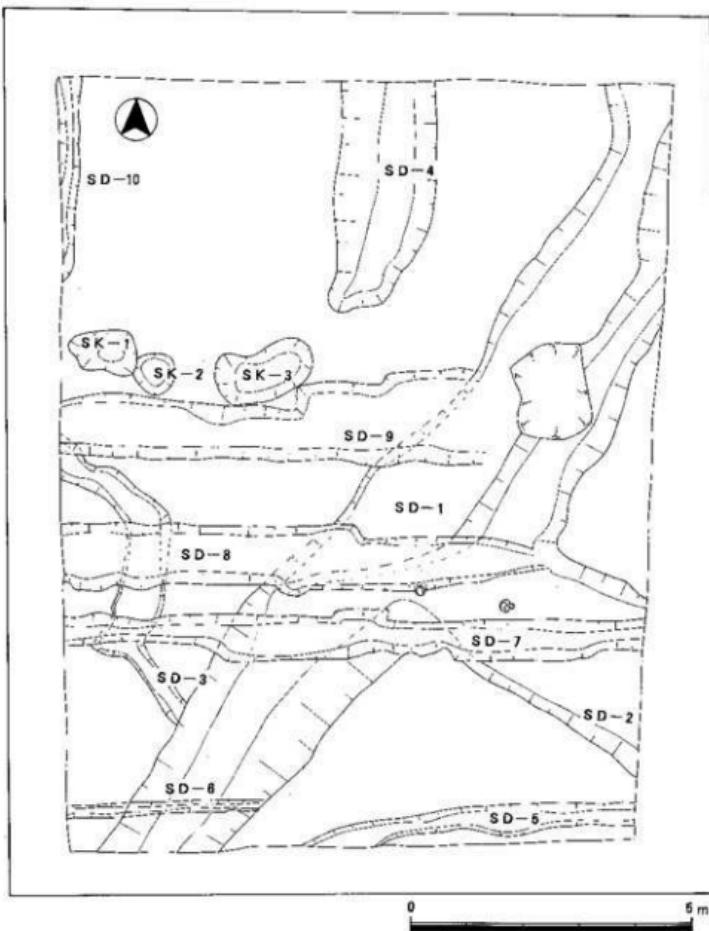
SK-2の東側で検出した。上面の形状は、不定形を呈する。東西幅1.8m、南北幅1m、深さ0.1mを測る。内部堆積土は暗茶色シルト混粘土で、土坑内からの遺物の出土はなかった。

まとめ

今回の調査では、弥生時代後期・古墳時代前期・中世・近世の遺構を検出した。特に弥生時代後期については、第13次調査で土坑が検出されている程度で不明瞭であったが、今回の調査の結果、当調査地付近にこの時期の集落が存在した可能性が強くなった。



出土遺物実測図



検出遺構平面図



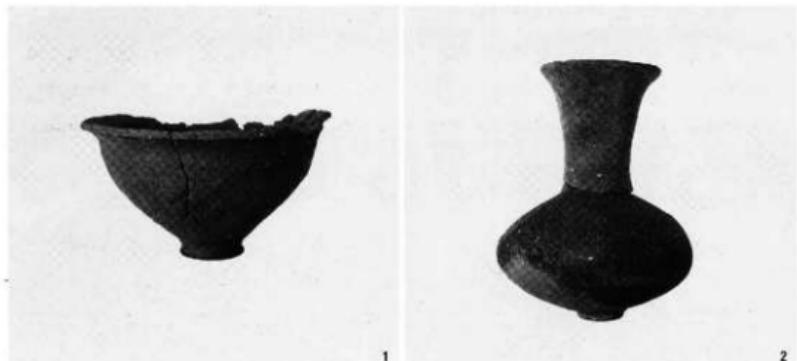
調査区全景（北から）



調査状況（西から）



SD-2 遺物出土状況



1

2

出土遺物

5 成法寺遺跡（第4次調査）

調査地 八尾市南本町1丁目10-1

調査期間 昭和63年11月7日～昭和63年12月5日

調査面積 540m²

はじめに

今回の発掘調査は事務所建設に伴うもので、当調査研究会が成法寺遺跡内で実施した発掘調査の第4次調査にあたる。

当遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地に位置しており、現在の行政区画では光南町・清水町・南本町・明美町一帯にあたる。

当遺跡の発見の契機は、昭和56年度に八尾市教育委員会が光南町1丁目26で実施した発掘調査で、弥生時代後期の土器窯・古墳時代前期の方形周溝墓4基・占墳時代後期の掘立柱建物5棟が検出されたことによる。その後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により、現在（平成元年4月）に至るまでに8次に亘る発掘調査が実施されている。その結果、弥生時代中期から奈良時代に至る遺構・遺物が検出され、各時期の集落が広範囲に広がることが明らかになった。なお、当調査地の北側に近接する府道服部川久宝寺線では、拡張工事に伴う発掘調査が大阪府教育委員会によって昭和61年度から継続して実施されている。その結果、弥生時代中期に比定される方形周溝墓・溝・古墳時代前期の竪穴住居・井戸・溝などが検出されている。

調査概要

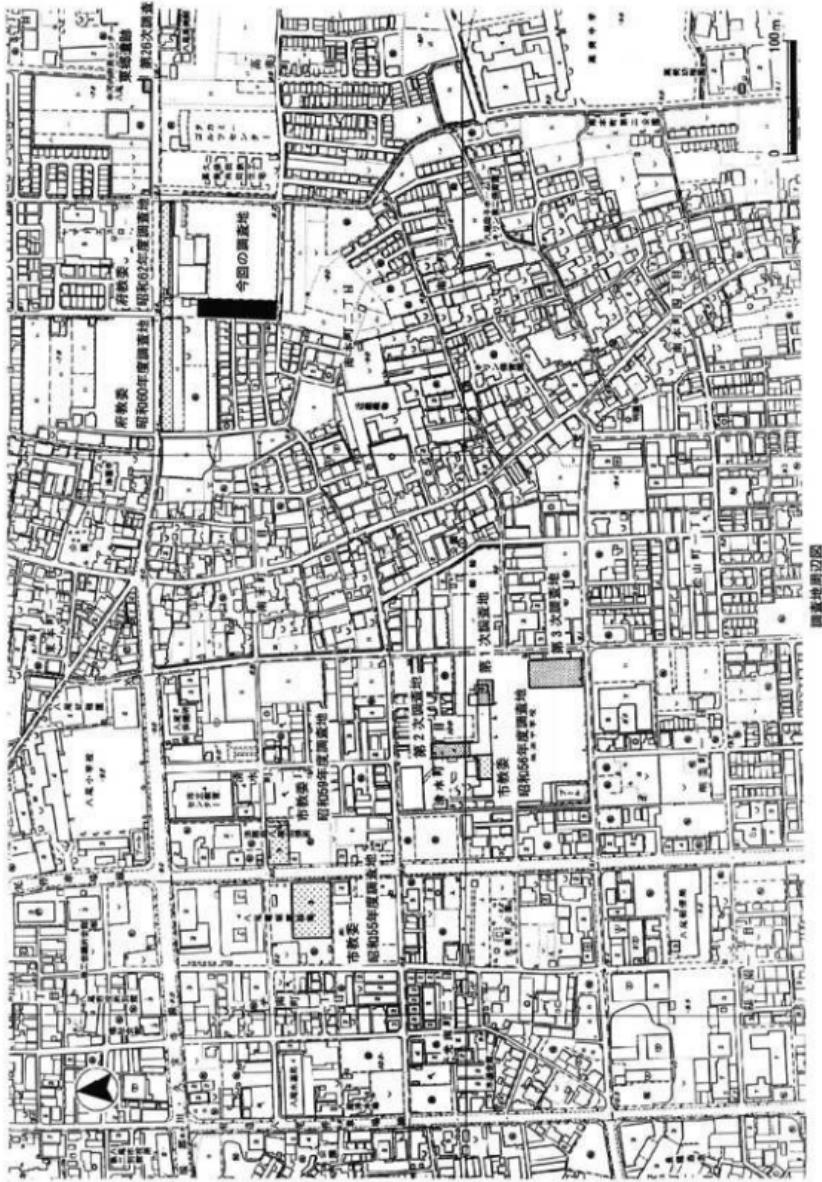
調査では、建物の基礎部分に長さ60m・幅3mの規模のトレント3本（東から第1調査区～第3調査区）を設定した。掘削に際しては、現地表下から1.5mまでは機械で掘削し、以下0.3m前後は人力による掘削を実施した。なお、第1調査区と第2調査区の南部では、遺構の性格を追求するため調査区を一部拡張した。

その結果、現地表下1.5m（標高7.0m）前後に存在する淡灰色～灰青色細砂上面で、古墳時代前期（庄内式古相）に比定される遺構を検出した。検出した遺構は方形周溝墓3基・井戸1基・十坑26基・溝2条である。

まとめ

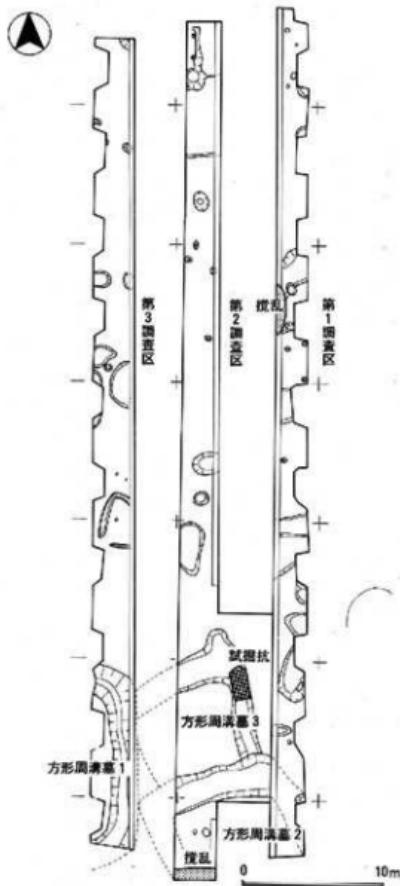
今回の調査では、古墳時代前期（庄内式古相）に比定される遺構・遺物を検出した。これらの調査結果と近隣で実施した調査結果を総合すると、庄内式古相の段階では調査区の南部が墓

5 成法寺遺跡



域で、北部が住居域であったが、庄内式新相～布留式古相になると墓域が北部まで及ぶようになり、居住域が東部に移動していることが窺える。

註1 大阪府教育委員会『成法寺遺跡発掘調査概要』(八尾市南本町所在) 1986



検出遺構平面図

5 成法寺遺跡



第1調査区全景（北から）



第2調査区全景（北から）



第3調査区（北から）



第3調査区 方形周清窯検出状況（南から）

6 久宝寺遺跡（第3次調査）

調査地 八尾市久宝寺4丁目74、76、81-1、81-3の各一部

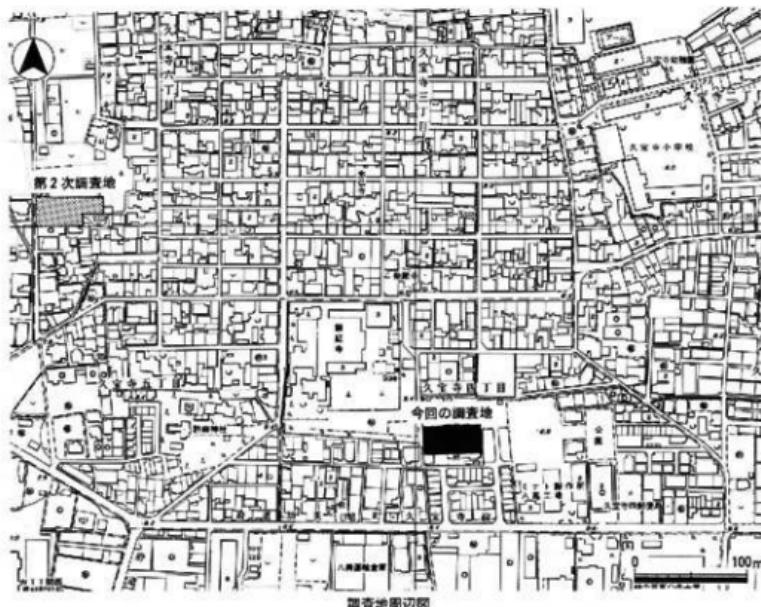
調査期間 昭和63年12月5日～昭和63年12月28日

調査面積 330m²

はじめに

今回の発掘調査は共同住宅建設に伴って実施したもので、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施した第3次調査にあたる。

久宝寺遺跡は、八尾市の北西部に位置し、旧大和川の主流である長瀬川左岸に立地する遺跡で現在の行政区画では北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・亀井・北亀井町および東大阪市大蓮南にあたる。今回調査を行った地点は、当遺跡内の東部にあたる。調査地周辺には、北西に隣接し顕著を中心とした久宝寺寺内町がひろがっており、現在でもこの寺内町の町割りや環境が残っている。



当遺跡内では、当調査研究会が昭和59年度に北亀井3丁目1で調査（第1調査）を行っており、古墳時代前期の上器集積・自然河道を検出している。また、昭和62年度には久宝寺6丁目^{註1}226他2筆で調査（第2次調査）を行っており、弥生時代後期から奈良時代の遺物が出土している。^{註2}

調査概要

調査は調査地の北側（北調査区）と南側（南調査区）に東西方向に長いトレンチ（5×33m）を設定して実施した。調査に当たっては、現地表下2.0mまで機械掘削を行い、以下0.5～0.6m以上については人力掘削を行った。調査の結果、表上下2.2m（標高8.4m）前後に存在する灰色粘土層上面（第2調査面）で平安時代の水田と自然河道1条を検出し、その水田面から0.25m下層の灰色微砂混粘土層上面（第1調査面）で古墳時代前期の方形周溝墓1基と十坑1基を検出した。なお、北調査区で検出した方形周溝墓の主体部および周溝の広がりを確認するため、方形周溝墓の北側と、南調査区の西側をつなぐ形で調査区を新たに設定した。西側に設定した調査区を西調査区と呼称した。

基本層序

第0層：盛土。層厚1.2m。上面の標高は8.6～8.65mを測る。

第1層：暗灰色粘土。層厚0.1～0.2m。旧耕土。

第2層：茶灰色細砂混粘土。層厚0.2～0.45m。

第3層：青灰色シルト混粘土。層厚0.2～0.35m。近世の遺物を含む。

第4層：灰黄色細砂～微砂。層厚0.05～0.55m。平安時代の遺物を含む。

第5層：灰色粘土。層厚0.05～0.45m。上面は平安時代の遺構面である。

第6層：暗灰色シルト混粘土。層厚0.3m。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含む。

第7層：灰色微砂混粘土。層厚0.3m以上。上面は古墳時代前期の遺構面である。

検出遺構と出土遺物

第1調査面

方形周溝墓

調査区の北西で検出した。検出したのは墳丘と南西側の周溝である。墳丘の規模は、墳丘の西側が自然河道によって削り取られているため不明である。墳丘は灰青色粘土（炭含む）が盛り上げられている。墳丘高は約0.33mを測る。埋葬施設は2箇所（木棺・上器棺）を確認した。木棺は墳丘のほぼ中央で検出した。南北方向に長い長方形の木棺を埋設している。埋設している掘形は不明瞭であった。木棺は、蓋板の一部と底板が明瞭に残っていた。底板の長さ2.7m、幅0.45mである。木棺内からは骨片が極少量出土した。上器棺は木棺の東で検出した。この上器棺は口縁部を打ち欠いた壺（4）（遺存高50cm・体部最大幅55.5cm）を傾けて据えられ、そ

6 久宝寺遺跡

の上を体部下半のみが残っている別個体の壺（3）で蓋をしている。上器棺内からの人骨および遺物の出土はなかった。この上器棺も木棺と同様、埋設している掘形は不明瞭であった。周溝は断面U字型を呈し、幅1.1～1.4m、深さ0.3～0.36mを測る。周溝の内部堆積土は上から灰色粘土、灰青色微砂、暗灰色シルト混粘土、青灰色シルト混粘土、暗灰色粘土である。東周溝の暗灰色粘土層内からは古墳時代前期（布留式期）の壺（1）が出土している。また墳丘内からも小型丸底壺（2）が出土している。

SK-1

方形周溝墓の東で検出した。平面の形状は円形である。径1.05m、深さ0.05mを測る。内部堆積土は暗灰色粘土上で、古墳時代前期（庄内式期）の壺（5）・甕（6）が出土している。

第2調査面

水田

水田は調査地のほぼ全域で検出した。畔は南北方向のもの1条と南西・北東方向のもの3条で、下幅0.4～0.8m、上幅0.15～0.4m、高さ0.07～0.2mを測る。水田面には足跡状遺構があり、その内部や水田面上には灰黄色細砂～微砂が堆積している。この砂層内から土師器杯（14）・黒色土器碗（15）が出土している。

自然河道

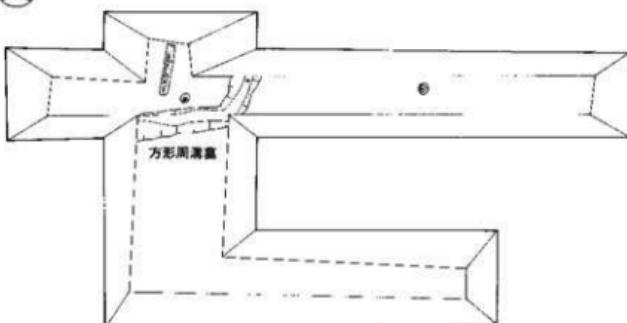
調査区の西側で検出した。幅・深さは河道の西肩が調査区外にあるため不明である。検出した幅は7.6mで、深さは1.7mを測る。内部には淡黄灰色・茶灰色・灰色等の粗砂が堆積している。内部からは土師器の細片が少量出土している。

まとめ

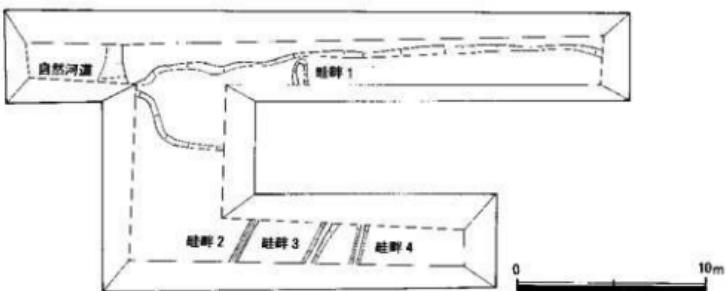
今回の調査地が位置する当遺跡内の東部地域では、小規模な試掘調査は数件行われているものの、発掘調査は行われていなく、遺跡の実態はほとんど明らかにされていなかった。しかし、今回の調査で、古墳時代前期と平安時代の二時期の遺構を検出したことから当調査地周辺に同時期の集落が存在していたことが明らかとなった。

註1 鮎八尾市文化財調査研究会『昭和59年度事業概要報告』（鯰八尾市文化財調査研究会報告7 1985）

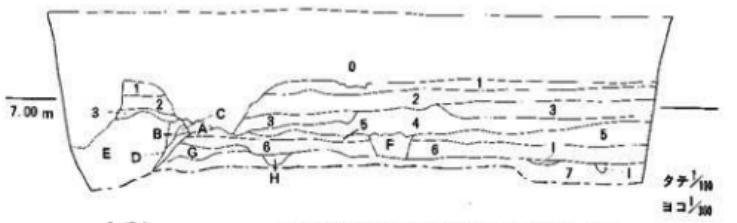
註2 鮎八尾市文化財調査研究会『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』（鯰八尾市文化財調査研究会報告16 1988）



第1調査面

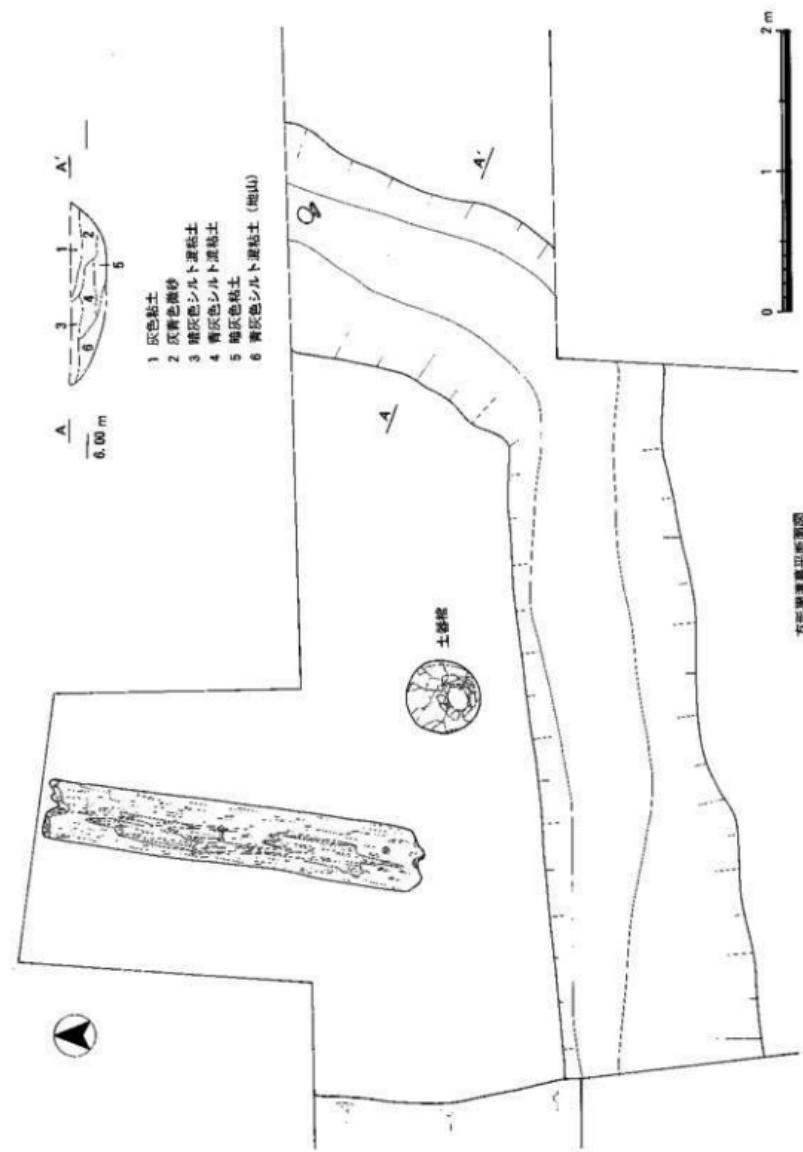


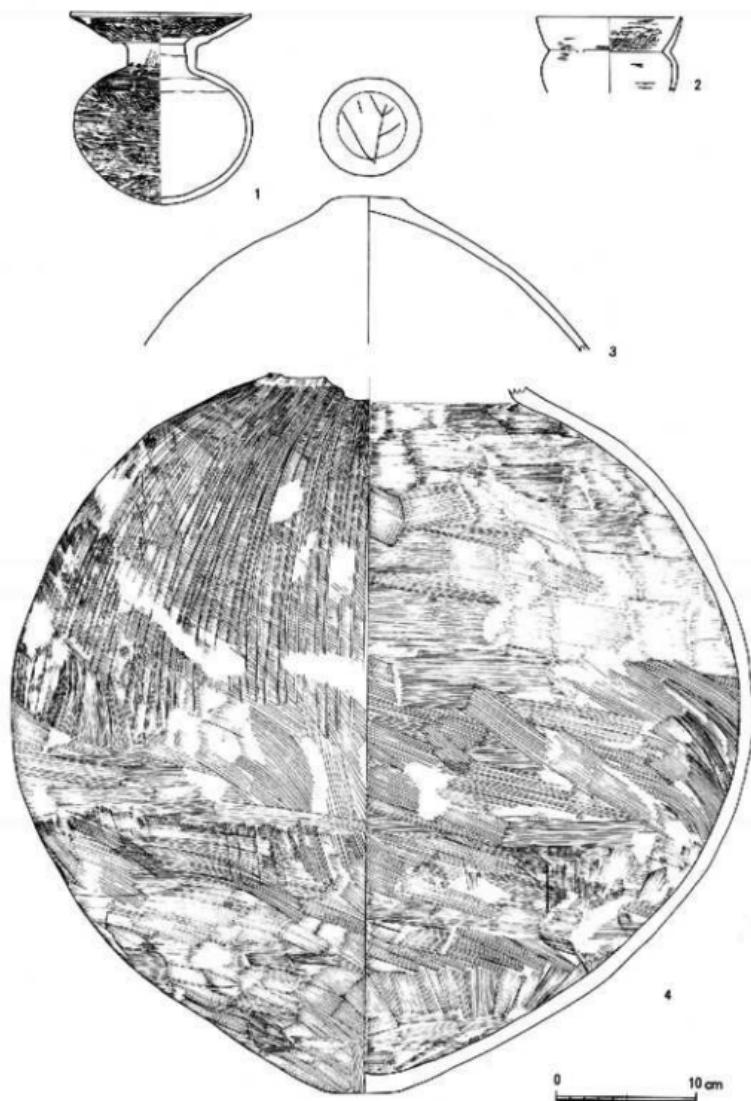
第2調査面



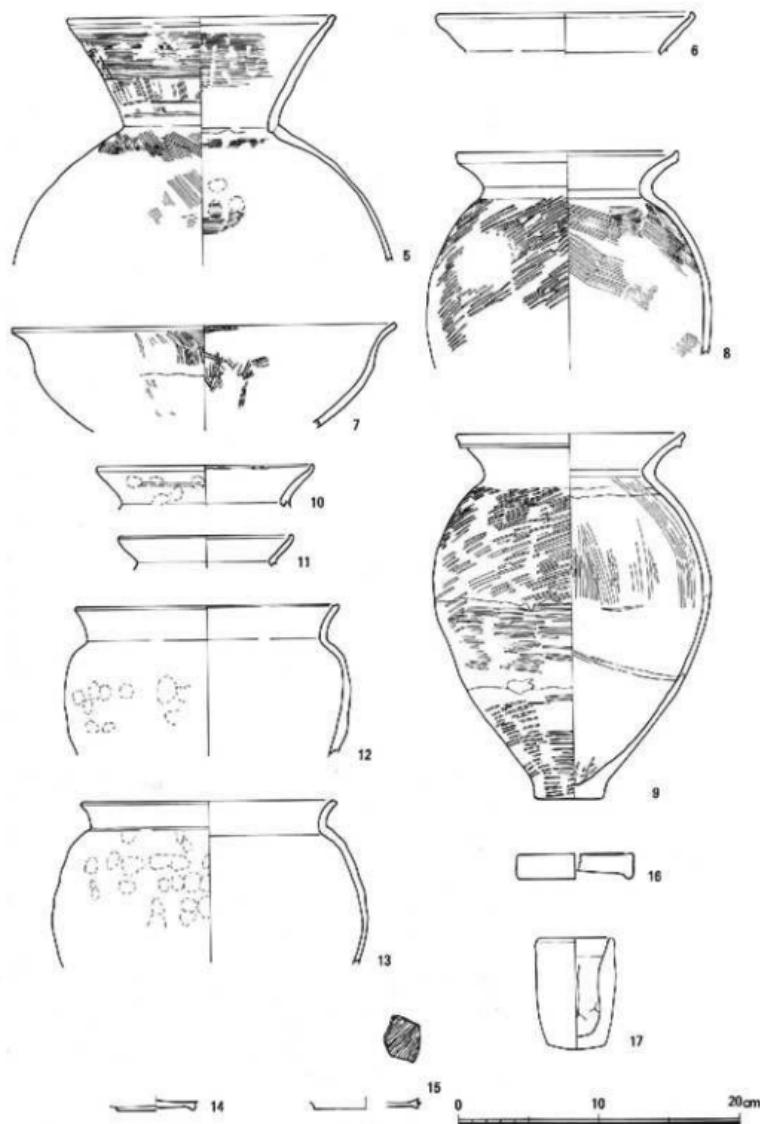
- | | | |
|--------------|-------------|----------------------|
| 0 硬土 | 6 暗灰色シルト混粘土 | E 茶灰色～灰色、粗砂～微砂 |
| 1 暗灰色粘土（旧耕土） | 7 灰色微砂混粘土 | F 灰青色シルト混粘土 |
| 2 茶灰色細砂混粘土 | A 淡黃色細砂 | G 青灰色粘土（炭化心）方形周溝墓の埋土 |
| 3 青灰色シルト混粘土 | B 灰茶色細砂 | H 暗灰色シルト混粘土（周溝堆積土） |
| 4 反灰色細砂～微砂 | C 茶灰色細砂 | I 茶灰色細砂混粘土 |
| 5 灰色粘土 | D 灰色細砂 | |

検出遺構平断面図





出土遺物実測図 1



出土遺物実測図2

山上遺物観察表

方形周溝墓

遺物番号	器種	法量 (cm) 器高	形態・調整技法	色調	胎土	焼成	備考
1	土師器 直口縁壺	13.6 12.8	球形の体部。直立にのびる頸部から水平ぎみにひらき、外上部へひろがる口縁部に至る。 口縁部内外面へラミガキ、頸部内外面ナダ、体部内面ナダ、外面へラミガキ。	淡茶色	精良	良好	
2	土師器 小型丸底壺	10.2	球形の体部。内壁ぎみにのびる口縁部、端部は尖る。口縁部内外面へラミガキ、体部内外面へラミガキのナダ。	乳茶色	精良	良好	
3	土師器 壺	底径 5.9	やや突出する上げ底状の底部。内面ナダ、外面へラミガキ後ナダ。	乳茶色	やや粗	良好	土器棺の蓋
4	土師器 壺	底径 5.1	球形の体部。突出しない平底。体部内面ハケ目。外面ハケ目後部上方は縱方向のヘラミガキ。	淡茶褐色	良	良好	土器棺

SK-1

遺物番号	器種	法量 (cm) 器高	形態・調整技法	色調	胎土	焼成	備考
5	土師器 壺	17.0	球形の体部。やや外反ぎみに上外方へのびる口縁部。端部は丸い。体部内面ハケ目、一部に指頭圧成形の痕跡残る。外腹ハケ目。口縁部内外面ハケ目。	乳黃灰色	精良	良好	
6	土師器 壺	18.0	斜上方へのびる口縁部。端部は上方へつまみ上げる。内外面ヨコナダ。	灰茶色	精良	良好	

包含層

遺物番号	器種	法量 (cm) 器高	形態・調整技法	色調	胎土	焼成	備考
7	土師器 鉢	27.6	内壁ぎみにのびる体部から外反する口縁部に至る。端部は面をもつ。内外面へラミガキ。	淡乳灰色	精良	良好	
8	土師器 壺	15.6	やや丸味のある体部から外反する口縁部に至る。端部は上方へつまむ。口縁部内外面ヨコナダ、体部内面ハケ目。外腹タクタキ目。	茶灰色	良	良好	
9	赤生土器 壺	16.0 26.2 底径 4.7	突出した平底の底部から斜上方へ体部がのびる。口縁部は外反し、端部は外傾する面をもつ。口縁部内外面ヨコナダ、体部内面ハケ目。外腹タクタキ目。成形時の接合部が内外面に残る。	灰茶色	良	良好	
10	土師器 壺	15.4	外反する口縁部。端部は上方へつまむ。内面ヨコナダ、外腹ヨコナダ、指頭圧成形がある。	茶褐色	良	良好	

6 久宝寺遺跡

調査番号	器種	法量 (cm)	口径 器高	形態・調整技法	色調	胎上	焼成	備考
11	土師器 壺		12.0	上外方へ外反きみにのびる口縁部。端部は丸く終る。内外面ヨコナデ。	淡茶褐色	やや粗	良好	
12	土師器 壺		18.7	丸味のある体部から上外方へ稍曲する口縁部に至る。端部はくぼみを持つ。口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ナデ、外面指頭圧成形。	淡茶褐色	精良	良好	
13	土師器 壺		17.6	丸い体部から外反する口縁部へ至る。端部は直をもつ。口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ナデ、外面指頭圧成形。	淡茶褐色	精良	良好	
14	土師器 杯		高台径 5.4 高台高 0.3	「八」の字にひらく高台船。内外面ヨコナデ、高台内外面ヨコナデ。	淡茶色	精良	良好	
15	黒色土器 碗		高台径 7.2 高台高 0.4	「八」の字にひらく高台船。外外面ヘラミガキ。外面ナデ、高台部内外面ナデ。	内面黑色 外表面茶色	精良	良好	
16	土師器 壺		8.0	半らな天井部。下方へ少しのびる口縁部。端部は丸味のある直をもつ。内外面ナデ。	赤褐色	精良	良好	
17	土師器 壺		5.0	やや丸い底部から上方へのびる体部。口縁部は少しだけ外へひらく。端部は尖って終る。内面ナデ。シボリ目残る。外表面ナデ。	赤褐色	精良	良好	



南調査区 第2調査面全景（西から）



同上 第1調査面全景（西から）

6 久宝寺遺跡



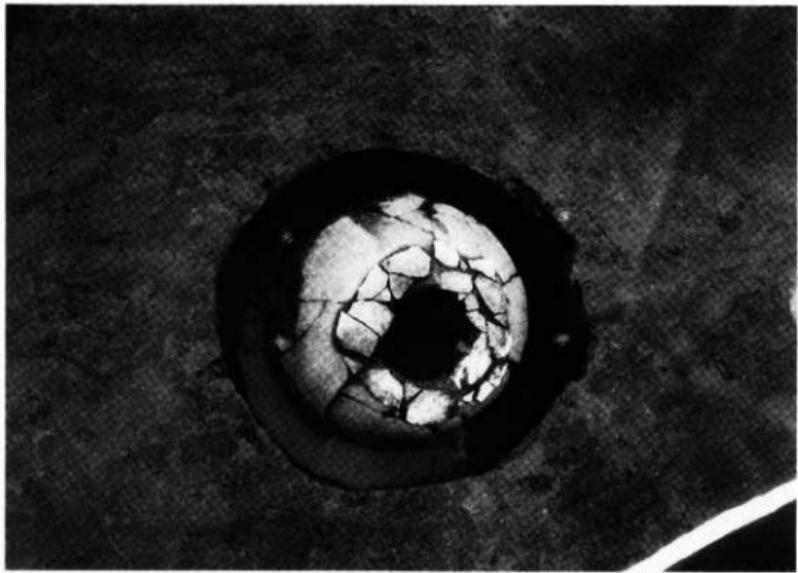
北側査区 第2調査面全景（東から）



同上 第1調査面全景（東から）



方形周溝墓検出状況（北から）



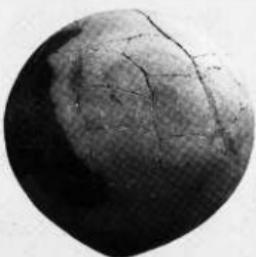
土器検出状況（南から）



1



12



4



13



5



16



17



9

出土遺物

7 小阪合遺跡（第15次調査）

調査地 八尾市小阪合町2丁目52-11

調査期間 昭和63年5月17日～昭和63年10月31日

調査面積 356m²

はじめに

今回の発掘調査は、小阪合ポンプ場放流渠築造工事に伴うもので、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した第15次調査にあたる。

当遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地に位置しており、現在の行政区画では、小阪合町1～2丁目・南小阪合町1・2・4丁目・青山町1～5丁目・若草町・山本町7～8丁目にあたる。

当遺跡内では、昭和57年以降、八尾市都市計画事業南小阪合土地区画整理事業および関連事業に伴う発掘調査が、昭和63年度までに大阪府教育委員会（2次）・八尾市教育委員会（2次）・当調査研究会（17次）によって21次にわたる調査が実施されてきた。これらの調査結果から、小阪合遺跡は、弥生時代後期から近世に至るまで連續と営まれ続けてきた遺跡であることが判明している。

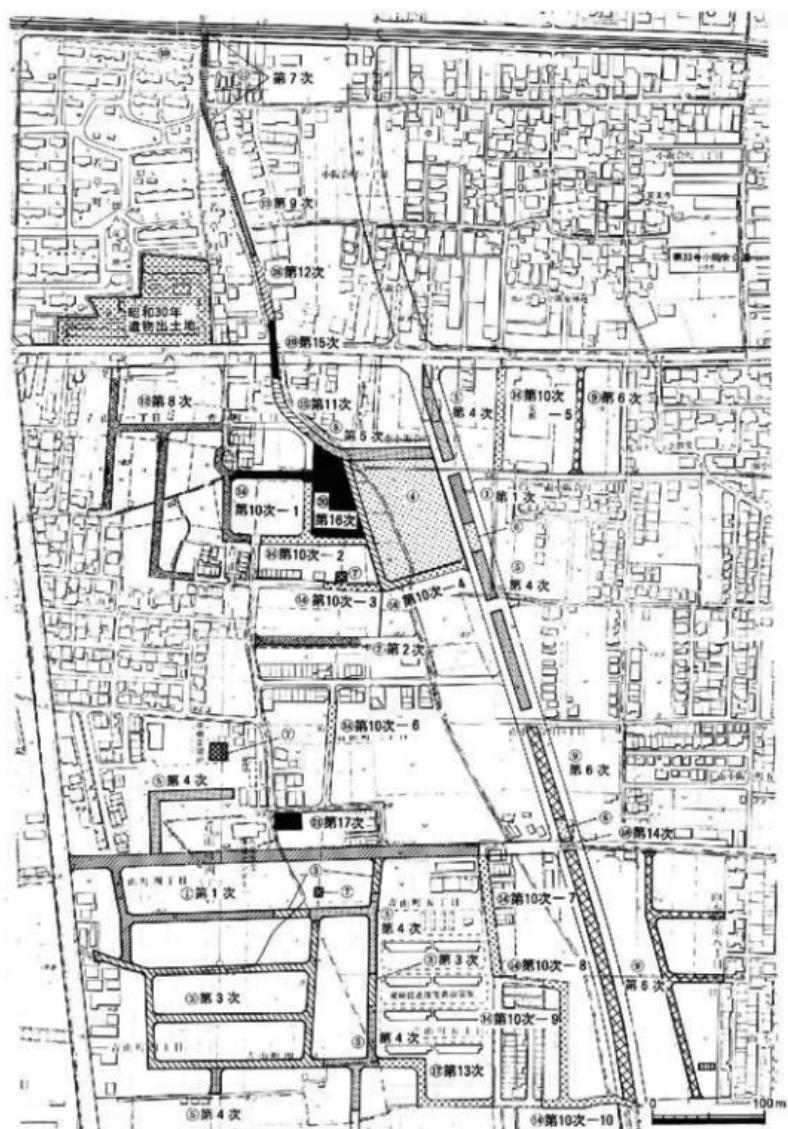
今回の調査地は、現楠根川の流路部分に位置し、第11次調査地と第12次調査地の間にあたる。

調査概要

調査地は現楠根川の流路部分にあたり、さらに府道が横断している為、調査地を4区分（第1調査区～第4調査区）して調査を実施した。掘削に際しては、第11次調査の結果を参考にし、現地表下1.8m前後までを機械により掘削し、以下0.4mは人力で掘削した。その結果、現地表下2.2m（標高7.0m）前後で厚く堆積する砂層を検出した。この砂層は旧楠根川の堆積土と考えられるが、限定された調査区内の調査であるため河川の規模・深度等は不明である。砂層内からは弥生時代～室町時代に至る土器の破片がごく少量出土している。

まとめ

今回の調査では、第11次調査と同様、現楠根川の旧流路と考えられる河川を検出した。この河川は出土した遺物からみて、室町時代に埋没したと推定されるもので、砂層の堆積状況から大規模な河川であったことが考えられる。また、南方約700mに位置する第6次調査地でも同様の規模を持つ河川が検出されていることから、旧楠根川は現楠根川の流路と多少の違いがあるものの、ほぼ同位置を北北西へ流下していたことが窺える。



調査地周辺図

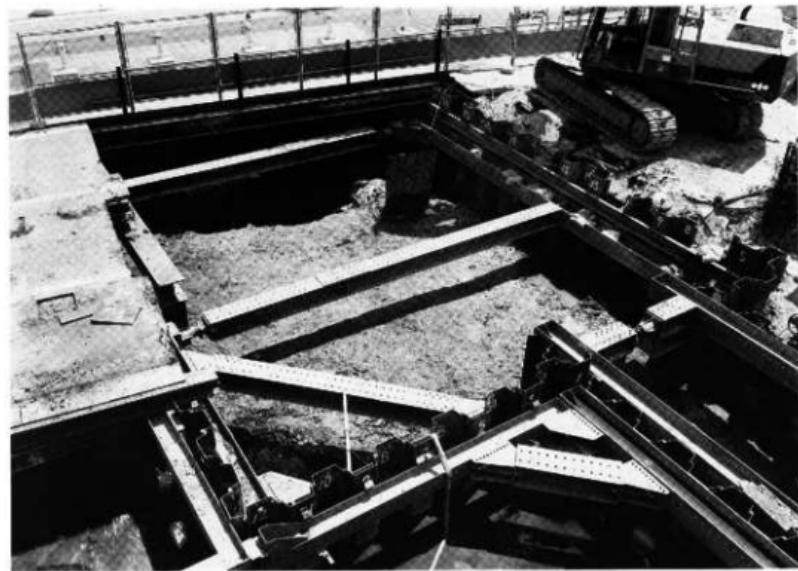
周辺の発掘調査一覧表

番号	調査主体	調査期間	文献	発行
①	当調査研究会(第1次)	57年1月～58年3月	小阪合遺跡：(財)八尾市文化財調査研究会報告10	1967.3
②	同 上(第2次)	58年6月～58年7月	小阪合遺跡：(財)八尾市文化財調査研究会報告11	1967.7
③	同 上(第3次)	58年10月～59年3月	同上	同上
④	大阪府教育委員会	58年9月～59年3月	—	—
⑤	当調査研究会(第4次)	59年6月～59年11月	小阪合遺跡：(財)八尾市文化財調査研究会報告15	1968.3
⑥	大阪府教育委員会	59年9月～59年11月	—	—
⑦	八尾市教育委員会	59年11月	八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書 八尾市文化財調査報告11	1985.3
⑧	当調査研究会(第5次)	60年1月～60年3月	小阪合遺跡発掘調査概要： (財)八尾市文化財調査研究会報告8	1966.3
⑨	同 上(第6次)	60年7月～60年12月	小阪合遺跡：(財)八尾市文化財調査研究会報告18	1969.3
⑩	八尾市教育委員会	61年2月	八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書 八尾市文化財調査報告12	1966.3
⑪	当調査研究会(第7次)	61年4月～61年8月	昭和61年度事業概要報告： (財)八尾市文化財調査研究会報告14	1967.12
⑫	同 上(第8次)	61年8月～61年12月	同上	—
⑬	同 上(第9次)	62年4月～62年7月	八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度 (財)八尾市文化財調査研究会報告16	1968.12
⑭	同 上(第10次)	62年8月～62年12月	同上	—
⑮	同 上(第11次)	62年8月～62年9月	同上	—
⑯	同 上(第12次)	62年10月～63年1月	同上	—
⑰	同 上(第13次)	62年11月～63年12月	同上	—
⑱	同 上(第14次)	63年1月	同上	—
⑲	同 上(第15次)	63年5月～63年10月	今回報告	—
⑳	同 上(第16次)	63年7月～63年8月	同上	—
㉑	同 上(第17次)	63年10月	同上	—

7 小板合遺跡



第1調査区北部全景（北から）



第1調査区北西部全景（北から）

8 小阪合遺跡（第16次調査）

調査地 八尾市青山町1・2・3・5丁目、山本町南8丁目の一部

調査期間 昭和63年7月5日～昭和63年8月26日

調査面積 500m²

はじめに

今回の発掘調査は八尾都市整備事業南小阪合土地区画整理事業に伴うもので、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した発掘調査の第16次調査にあたる。

調査地は区画街路予定地と公園予定地で、7ヶ所（第1調査区～第7調査区）に分散している。

調査概要

掘削に際しては、既往調査の結果を参考にし、現地表下0.3～1.6mまでを機械で掘削し、以下0.4～0.5mは人力で掘削した。

調査の結果、弥生時代後期・古墳時代前期（庄内式新相～古留式古相）・鎌倉時代～室町時代・江戸時代の概ね4時期の遺構を検出した。以下、各調査区ごとに概説する。

第1調査区

東西方向に設定したトレンチで、長さ14m・幅2.5mを測る。現地表下0.7m（標高7.2m）付近に存在する青灰色細砂混粘土上面を調査面とした。その結果、古墳時代中期に比定される自然河川1条（NR-1）を検出した。

第2調査区

第1調査区の東端から約5m離れて設定したトレンチで、長さ38m・幅2.5mを測る。現地表下2m前後（標高7.2m）付近に存在する茶褐色粘質土上面を調査面とした。その結果、古墳時代前期（庄内式新相～布留式古相）に比定される自然河川1条（NR-2）と、鎌倉時代に比定される溝1条（SD-1）を検出した。

第3調査区

第2調査区の南東から約40m地点に設定した。東西方向に伸びるトレンチで、長さ35m・幅2.5mを測る。現地表下7.5m付近に存在する茶褐色粘質土上面を調査対象面とした。その結果、古墳時代前期（庄内式新相～布留式古相）に比定される自然河川1条（NR-3）と、上層から切り込む鎌倉時代に比定される自然河川1条（NR-4）、江戸時代に比定される上坑1基（SK-1）を検出した。

第4調査区

8 小阪合遺跡

第3調査区から南10m地点に設定した。東西方向に伸びるトレーニングで、長さ38m・幅2.5mを測る。現地表下0.6m（標高7.3m）付近に存在する茶褐色粘質土上面を調査対象面とした。その結果、古墳時代前期に比定される自然河川4条（NR-3・NR-5～NR-7）と、鎌倉時代に比定される溝2条（SD-2・SD-3）を検出した。

第5調査区

第3調査区から北へ約40m地点に設定した。方形を呈する調査区で一辺4mを測る。現地表下2.3m（標高6.8m）まで掘削を実施した結果、全面に砂層の広がりが確認されたが、湧水が著しく作業を行うには危険と判断したため、以下の掘削は中止した。なお、これらの砂層の広がりは第3調査区で検出した自然河川（NR-4）に対応するものと推定される。

第6調査区

第4調査区から南東約430m地点に設定した。東西方向に長い調査区で、長さ14m・幅3.5mを測る。現地表下0.8m（標高8.3m）付近に存在する茶灰～淡灰黄色シルト上面を調査対象面とした。その結果、弥生時代後期に比定される溝3条（SD-4～SD-6）、鎌倉時代に比定される溝11条（SD-7～SD-17）と上層から切り込む溝1条（SD-8）を検出した。

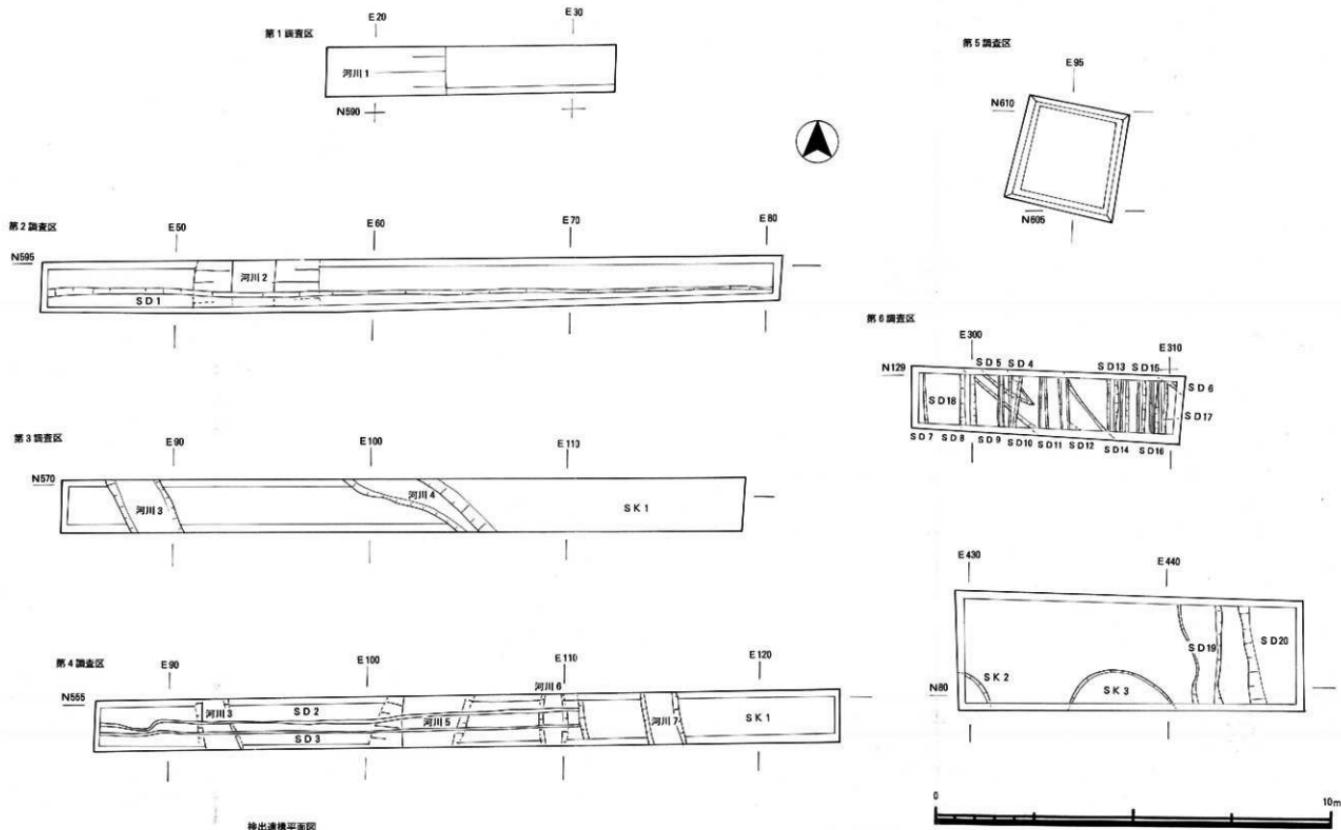
第7調査区

第6調査区の南東約250m地点に設定した。東西方向に長い調査区で、長さ18m・幅6mを測る。現地表下1.7m（標高8.3m）付近に存在する青灰色粘質シルト上層を調査対象面とした。その結果、弥生時代後期に比定される土坑2基（SK-2・SK-3）と、鎌倉時代に比定される溝2条（SD-19・SD-20）を検出した。

まとめ

調査の結果、北部に位置する調査区（第1調査区～第5調査区）では、古墳時代前期の自然河川5条、古墳時代中期の自然河川1条、鎌倉時代後期の自然河川1条を検出した。隣接する既往調査（昭和61年度～第8次調査の第3調査区、昭和62年度～第10次調査の第2・3調査区）でも同様に自然河川が検出されており、古墳時代前期～鎌倉時代後期に至るまで、この地域一帯は居住域とし利用された痕跡は残していない。

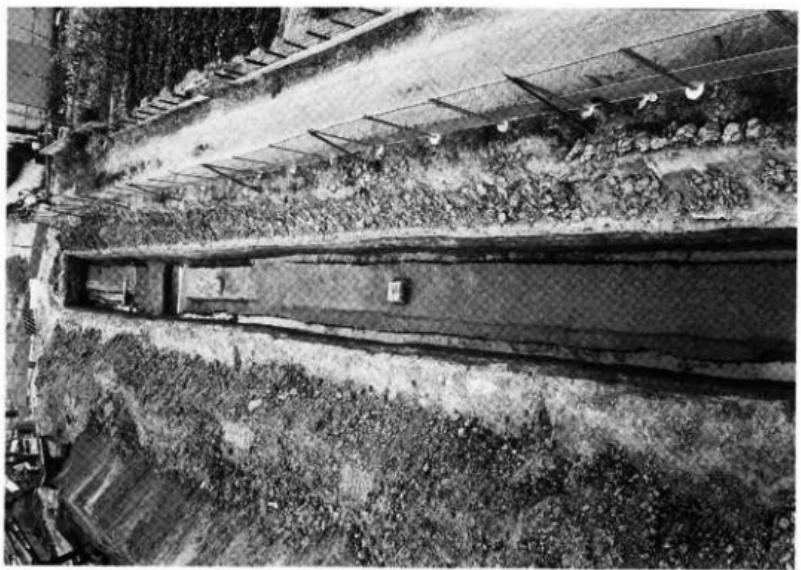
一方、南部に位置する第6調査区では、調査地の東で実施した調査（昭和62年度～第10次調査の第9調査区）で検出した弥生時代後期の溝状遺構の北西部を検出した。第7調査区では調査地の西で実施した調査（昭和60年度～第6次調査の第4調査区）で検出した弥生時代後期～古墳時代前期に比定される遺構と関連する上坑を検出しており、この時期の遺構の広がりが確認された。以上、今回の調査で区域整理事業区域内での調査が終了し、区域内での各時期の遺構の存在が明らかになった。今後、これらの資料をもとに当遺跡内の各時期の様相を推定する必要があろう。



被出遺構平面図



第1調査区全景（東から）



第2調査区全景（東から）

8 小坂合遺跡



第3調査区全景（東から）



第4調査区全景（東から）

9 小阪合遺跡（第17次調査）

調査地 八尾市青山町3丁目47番地

調査期間 昭和63年10月3日～昭和63年10月4日

調査面積 32m²

はじめに

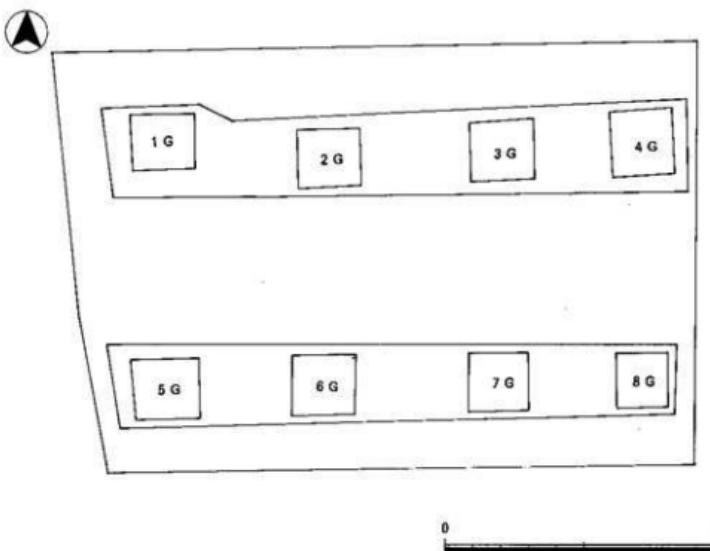
今回の発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した発掘調査の第17次調査にあたる。

調査地点は、昭和57年度に実施した第1次調査のA-IV地区から北へ約30m地点に位置する。

調査概要

調査区は、遺物の基礎杭部分に対し、2m×2mの規模のグリッドを8ヶ所（北部4ヶ所—1G～4G・南部4ヶ所—4G～8G）に設定した。

掘削に際しては、既往調査の結果から掘削深度が深く、しかも湧水が著しいことが推定され



調査区設定図

9 小阪合遺跡

たため、機械掘削については各グリットを東西方向にトレチ状につないで、現地表下1.6mまで掘削した。以下、1G～8Gの部分について、0.5m前後を人力で掘削した。調査の結果、古墳時代中期の遺物を含む上層および奈良時代の自然河川の堆積土を検出した。

まとめ

今回の調査では、遺構は検出されなかったものの、2G～4G・6G～8Gで古墳時代中期に比定される遺物包含層を確認した。さらに、1G・5Gでは奈良時代の自然河川の堆積土を検出した。なお、当調査地の南西に隣接した地点で実施した調査（第1次調査のA-Ⅲ地区）^{註1}では、弥生時代後期・古墳時代前期・古墳時代中期の遺構・遺物が検出されている。

註1 80八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡」－八尾市都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－
<昭和57年度 第1次調査報告書> 80八尾市文化財調査研究会報告10 1987



I G～4 G全景（東から）



5 G～8 G全景（東から）

10 東弓削遺跡（第4次調査）

調査地 八尾市八尾木東1丁目

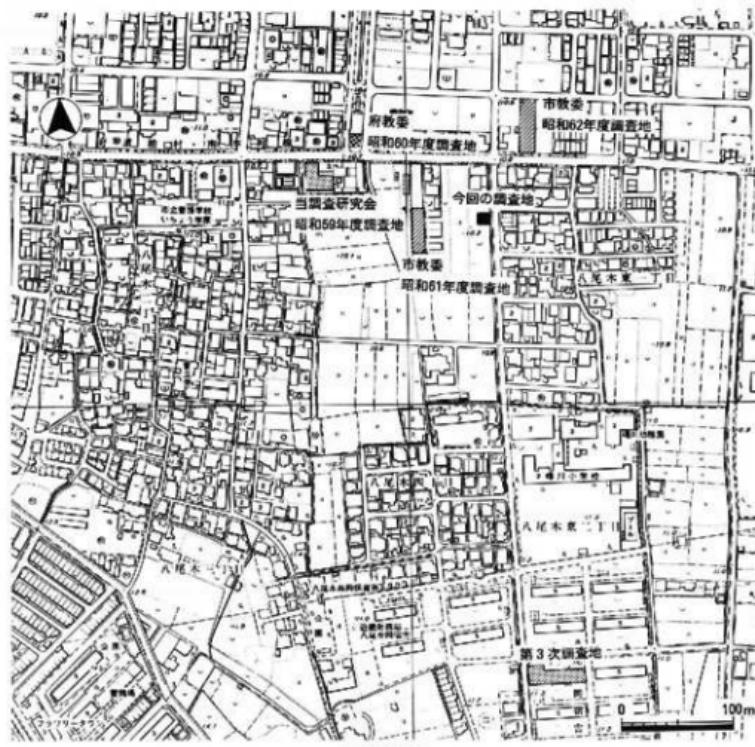
調査期間 昭和64年1月6日～平成元年1月23日

調査面積 72m²

はじめに

今回の発掘調査は公共下水道布設工事に伴うもので、当調査研究会が東弓削遺跡内で実施した発掘調査の第4次調査にあたる。

当遺跡は、長瀬川から玉串川が分岐する「二俣」地区から北西に広がる沖積地上に位置して



調査地周辺図

おり、現在の行政区画では刑部・都塚・東弓削・八尾木・八尾木東一帯にあたる。

当遺跡内では、昭和50年度に八尾市教育委員会が送水管布設工事に伴って発掘調査を実施して以来、6次（八尾市教育委員会3次・当調査研究会3次）にわたる発掘調査が実施されてきた。これらの調査の結果、当遺跡が弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡であることが確認されている。今回の調査地は、遺跡推定範囲の北端に位置し、北側に続く中田遺跡との接点にあたる。なお、昭和62年度に八尾市教育委員会が実施した調査地（中田遺跡一八尾木6丁目166）の南西約50mに位置する。

調査概要

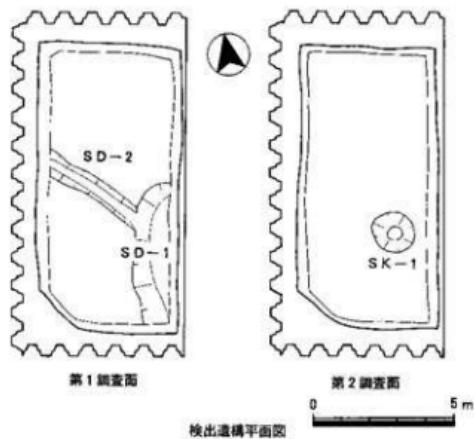
調査予定地は、公共下水道の発進堅坑で、当初は全域が調査対象であったが、東半分が現道路部分にあたり、しかも各種の既設構築物があることから、西側部分の72mを調査対象とした。

調査部分は、調査前に鋼板が打設され、現道路面（標高11.1m）から約2m迄が機械によつて掘削されていた。調査では以下1mについて層型に従つて人力振削を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、現地表下2.25m前後に存在する淡灰緑～暗灰色紗質土層上面（標高8.8m）で古墳時代前期（庄内式古相）に比定される溝2条（SD-1・SD-2）を検出した（第1調査面）。さらに0.4m下部に存在する灰色粘質シルト土層上面（標高8.4m）で、弥生時代中期後半（畿内第IV様式）に比定される上坑1基（SK-1）を検出した（第2調査面）。

まとめ

調査の結果、弥生時代中期後半（畿内第IV様式）と古墳時代前期（庄内式古相）に比定される遺構を検出した。北側に隣接する中田遺跡を含めた調査地周辺では、大阪府教育委員会・註1



八尾市教育委員会・当調査研究会により調査が実施されており、弥生時代中期～古墳時代前期（庄内式新規）^{註2}^{註3}に至る遺構・遺物が検出されている。以上の既往調査および今回の調査結果からすれば、特に弥生時代中期後半と古墳時代前期（庄内式期）において集落が拡大傾向にあったことが推定できよう。

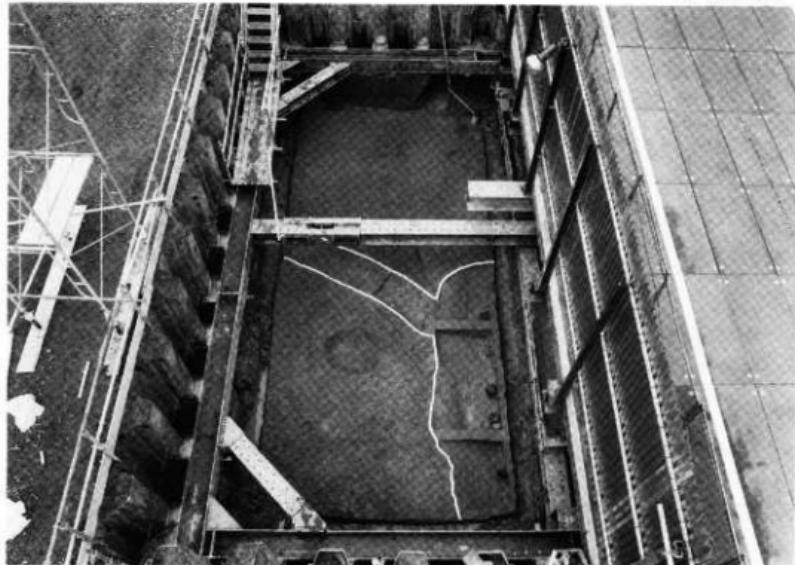
註1 大阪府教育委員会『中田遺跡発掘調査概要』柏原・八尾幹線下水管渠築造工事に伴う調査－ 1986

註2 八尾市教育委員会「中田遺跡別地区関西電力KK地中線埋設工事に伴う埋蔵文化財調査概要」昭和五三・五四年度埋蔵文化財発掘調査年報 1981

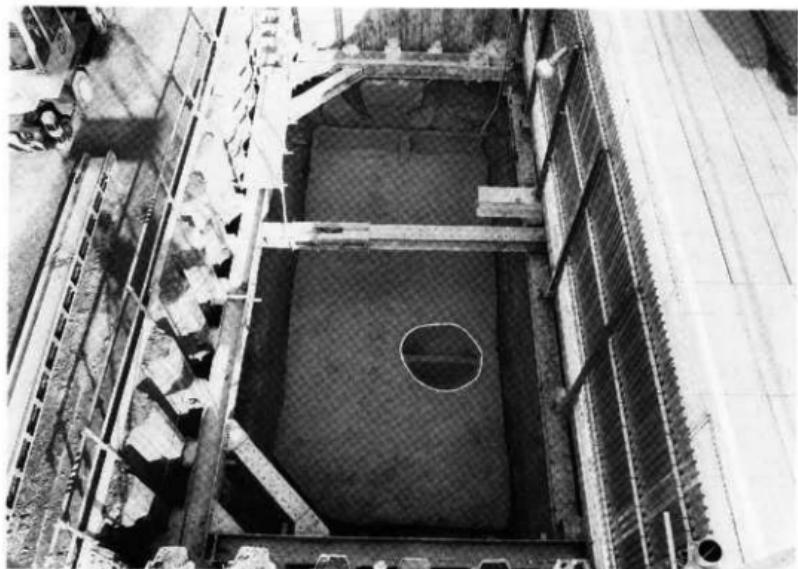
八尾市教育委員会「八尾市内遺跡解説61年度発掘調査報告書Ⅱ」「八尾市文化財調査報告15」 1987

八尾市教育委員会「八尾市内遺跡解説62年度発掘調査報告書Ⅰ」「八尾市文化財調査報告17」 1988

註3 昨八尾市文化財調査研究会「昭和58年度季末概要報告－9 中田遺跡」八尾市文化財調査研究会報告5 1984



第1調査面全景（南から）



第2調査面全景（南から）

11・12 高安古墳群内芝塚古墳（第1次調査・第2次調査）

調査地 八尾市神立2丁目地内

調査期間 第1次調査 昭和63年5月23日～昭和63年6月11日

第2次調査 平成元年2月25日～平成元年4月15日

調査面積 100m²

はじめに

今回の発掘調査は道路建設工事に伴うもので、当調査研究会が高安古墳群内で実施した第1次調査・第2次調査にあたる。

調査地点は、八尾市神立地区の東方にある式内社玉祖神社から南西へ約300mの地点に位置



調査地周辺図

する。昭和63年5月に予備調査（第1次調査）として、地形測量およびトレンチ調査を実施した結果、横穴式石室を内部主体とする古墳（円墳）であることが判明した。古墳の名称は、小字名が「芝塚」であることから芝塚古墳と名付けた。第2次調査では、主体部および墳丘築成状況を確認する目的で調査を実施した。

地理・歴史的環境

芝塚古墳の位置する八尾市北東部の生駒山西麓一帯は、小規模な谷口扇状地が複雑に融合した地形を呈しており、芝塚古墳もこうした谷口扇状地の扇端部の標高100m付近に立地している。八尾山域の生駒西麓部の標高50~450m一帯には、古墳時代中期末~終末期にかけての小規模な古墳（円墳）が数多く点在しており、それらを総称して高安古墳群と呼ばれている。そのなかで、芝塚古墳は高安古墳群内の北部に位置し、古墳の規模は高安古墳群の中では比較的大きい部類に属する。なお、芝塚古墳の北西1.2km一帯には、西の山古墳（前期末葉）・花岡山古墳（中期初頭）・心合寺山古墳（中期前葉）・鏡塚古墳（中期後葉）および後期前葉の愛宕塚古墳を含めて累積的な形成を示す東音寺・人竹古墳群がある他、南1km一帯は高安古墳のなかでも最も古墳の密集が顕著な山畠地区・服部川地区がある。

調査概要

①調査前および第1次調査

調査前の状況は、卑道が墳丘を縦断する形で伸びており、墳頂部には柿の木の大木が存在していた。墳丘は東部を除いて著しい削平を受けており、墳丘北部・西部および墳頂部で石材の一部が露頭していた。第1次調査の結果、墳頂部で一部露頭していた石材は2石あることが確認され、玄室部の天井石と判明したが、2石とも原位置から西側へずれていた。北部および西部で露頭していた石材も、北部が奥壁、西部が西側壁を石材であることが確認された。さらに、狭道の天井石および西側壁上部の隣石は抜き取られていた。

②第2次調査

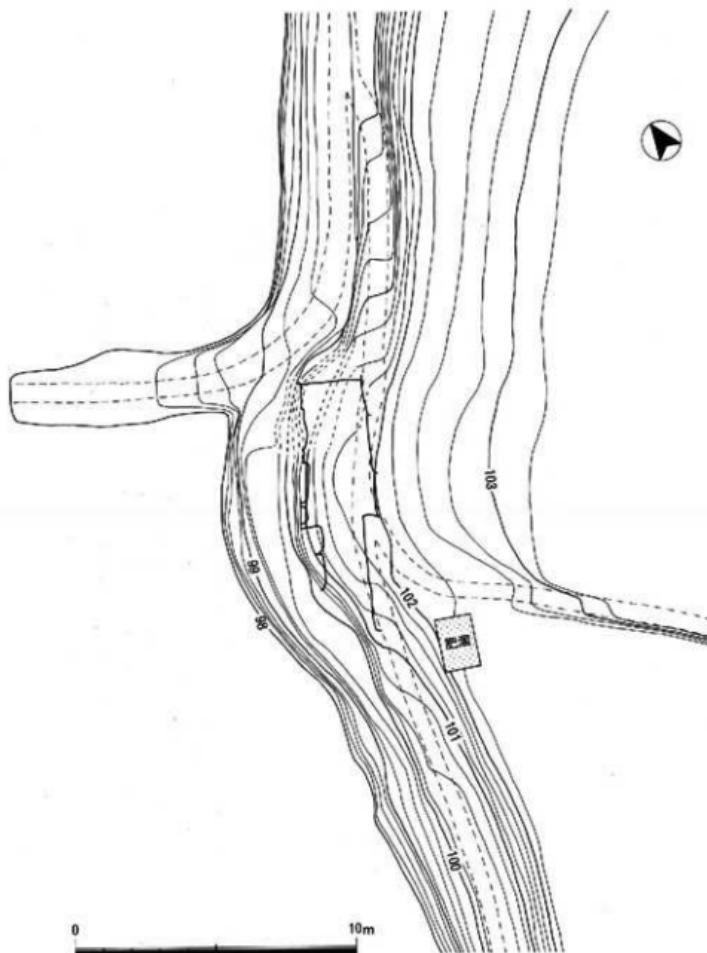
1) 石室内部の状況

石室は両袖式の横穴式石室で、南西に開口している。石室内には上砂が全体に堆積していた。これらの上砂を約1m掘り下ろしたところ、平安時代後期~鎌倉時代前期に比定される土器類が多量に出土した。さらに、20cm前後掘り下ろした時点で石棺の蓋石の一部がみつかり、周囲を掘り進めた結果、玄室の奥で1棺（石棺I）、さらに石棺Iの南で2棺（石棺II・石棺III）が並列に並んで置かれていた。

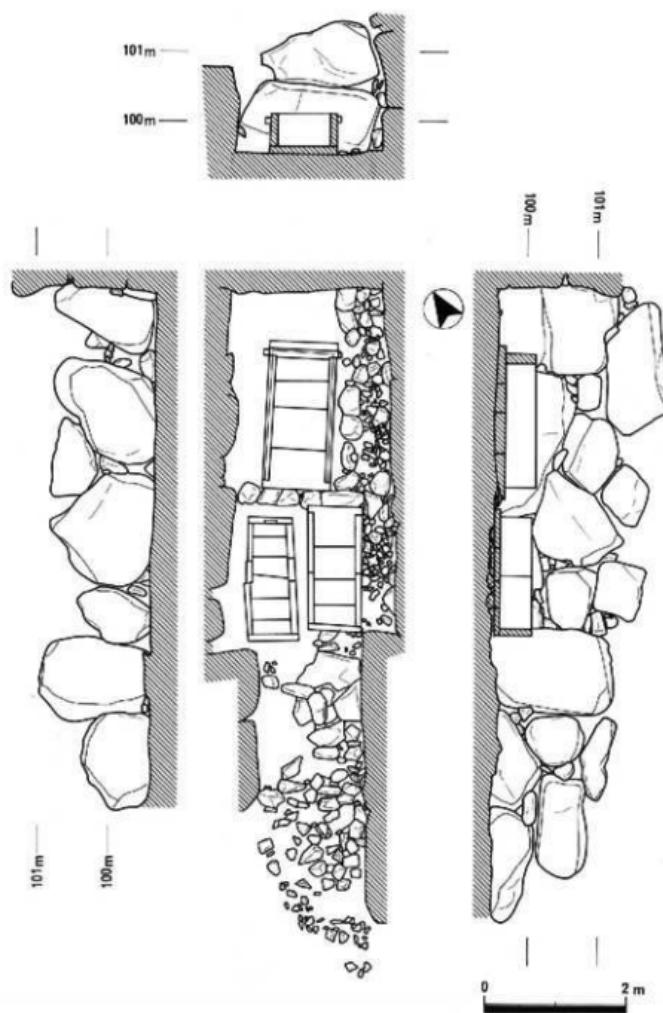
2) 石室の規模と石棺

石室は全長9.1mを測る。各部の数値は、玄室長5m・奥壁幅2.1m・玄門幅2.2m・奥壁高2.4m・狭道長4.1m・狭門幅1.4mを測る。

石室に使用している石材は、芝塚古墳の東方で産出する花崗岩が使用されている。玄室と羨道の石材の積み方は、基底部にやや大形の石材を横位に用い、上部にはそれよりはやや小振の石材を3段に積み上げている。奥壁は大形の石材を横位に2段積んでいる。玄門部の左右の袖石には、大形の石材を縦位に用いている。玄門部から羨道へ1.5m地点一帯には、人頭大の石



墳丘及び周辺地形図



石室内実測図

材が散乱しており、閉塞石に使用された石材と推定される。なお、石棺Ⅰの東部・南部および石棺Ⅲの東部の床面には、人頭大の石材が石棺の輪郭に沿って置かれている。その部分から、東壁の間および談道には拳大的な石材が置かれていた。

石棺は、玄室奥の西側壁付近に石棺Ⅰ（長さ2m・幅1～1.1m・高さ0.75m、底石4枚・側石2枚・小口石2枚・蓋石3枚・繩掛突起7個・封石2個）、石棺Ⅰの南西部に石棺Ⅱ（長さ1.8m・幅0.8m・高さ0.4m、底石6枚・側石6枚・小口石2枚・蓋石5枚）、さらに石棺Ⅱの東に並んで石棺Ⅲ（長さ1.8m・幅0.8m・高さ0.6m、底石4枚・側石4枚・小口石2枚・蓋石4枚）が納められていた。3棺ともに組合式家形石棺で、盜掘を受けており、蓋石は外され、一部は割られていた。調査時点では上砂や蓋石の一部が内部に落ち込んで石棺内部全体に堆積していた。なお、石棺Ⅰ・石棺Ⅱには赤色顔料が塗布されていた。

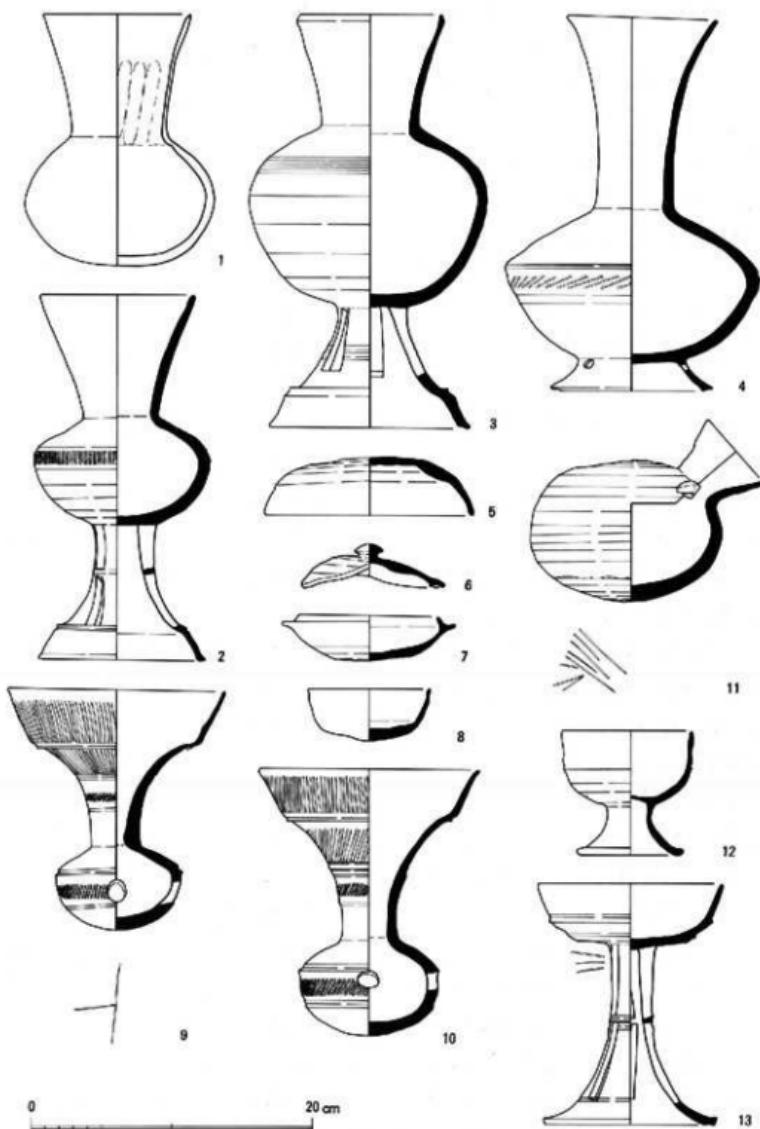
3) 出土遺物

遺物は、石棺内からは極少量の骨片が出土した他、石棺Ⅰ・石棺Ⅲで鉄製品が各2点、石棺Ⅱで鏡環1点、須恵器器台の破片が2点出土した。棺外遺物は、石棺Ⅰと奥壁との間で19点（うち須恵器18点）のほか馬具（鉄具）2点、石棺Ⅰの東側で直刀2点と須恵器蓋1点が出土した。さらに、石棺Ⅱの南側（玄門の西隅）で須恵器杯蓋1点と鉄製品1点、石棺Ⅲの南側（談道）で須恵器杯身1点、玄門の東隅付近で須恵器の台付壺2点と土師器高杯1点、石棺Ⅱと石棺Ⅲの間で須恵器杯身1点・鉄製品1点が出土した。なお、石棺Ⅰの東側で検出した直刀の柄頭・锷にはX線撮影の結果、亀甲繋花文・鳳凰文・心葉文が銀象嵌されていることが判明した。また、これら古墳時代後期に比定される遺物以外に、石室の上部付近からは、平安時代後期から鎌倉時代前期の瓦器楕・瓦器小皿、土師器小皿・土釜・灰釉四耳壺の土器類ほか、貝や歯骨等が出土している。

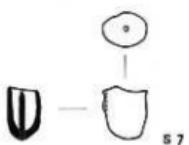
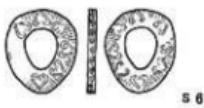
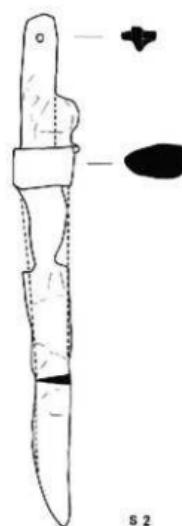
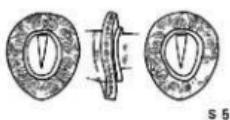
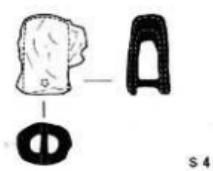
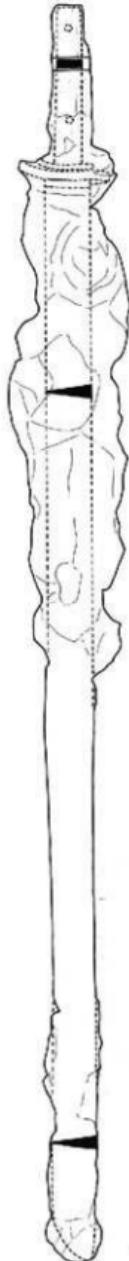
まとめ

今回の芝塚古墳の調査で判明したことは以下の通りである。

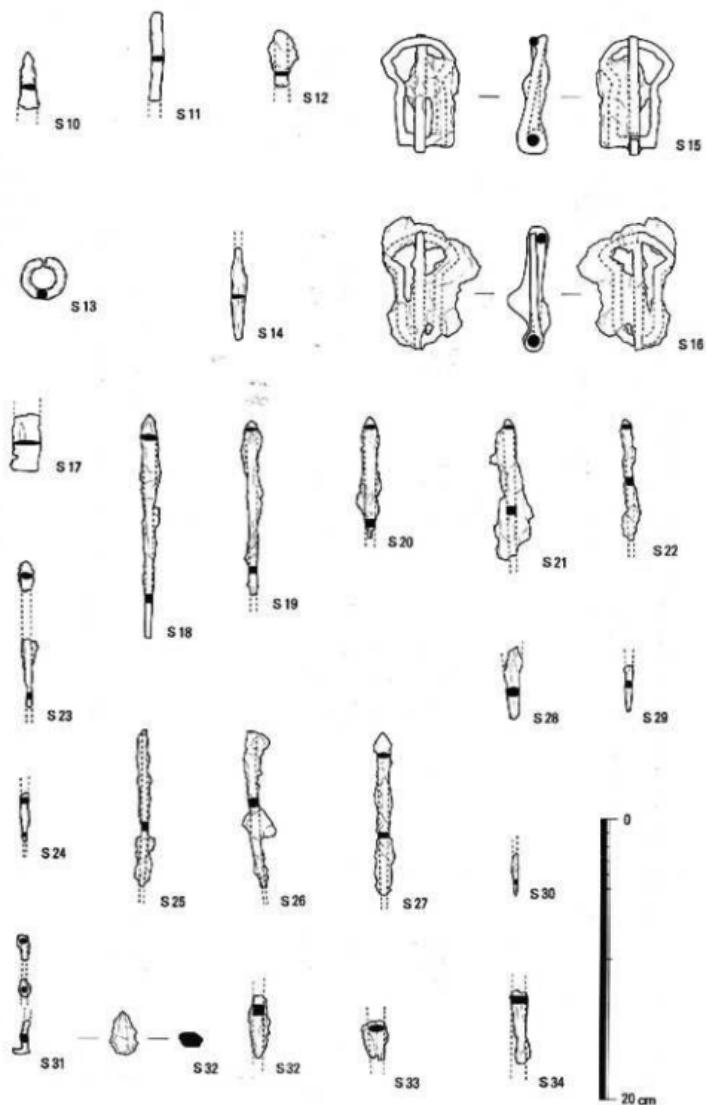
- 1、芝塚古墳は6世紀の後半に造営され、7世紀中葉までに3人を葬った古墳であること。
- 2、石棺の置かれた順は、石棺Ⅰ→石棺Ⅱ→石棺Ⅲの順であること。
- 3、石室内に3つの石棺が納められている事例は、大阪府下ではこの時期のものとしては初めてで、近隣の府県では奈良県桜井市の狐塚古墳について2例目であること。
- 4、石棺に使用された石材の産出地は、石棺Ⅰが竈山石（兵庫県高砂市）、石棺Ⅱ・石棺Ⅲが凝灰岩（大阪府太子町の二上山・社川洞および付近）であること。
- 5、石室内の上部（床面から1m程埋まつた）から平安時代後期から鎌倉時代前期に比定される土器類が多量に出土しており、この時期、石室内の出入りが自由にされていたようであること。



石室内出土土器実測図



刀装具実測図



全銅製品実測図



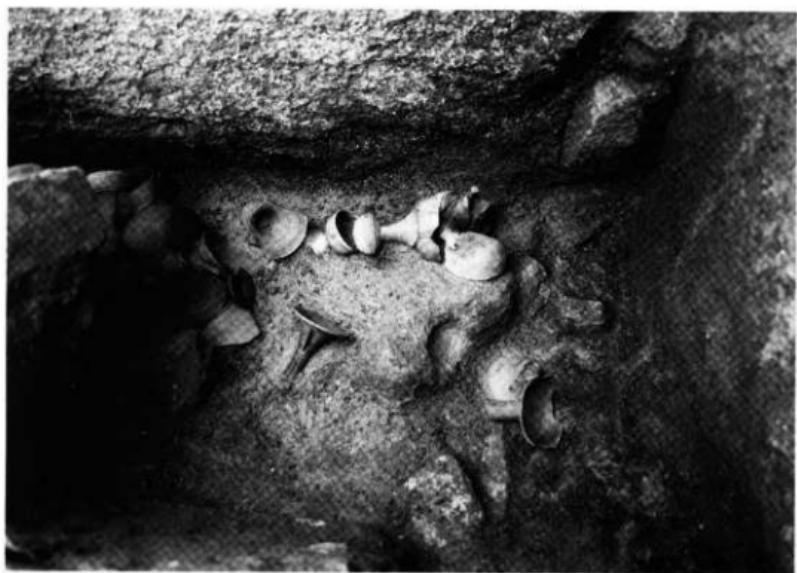
石室内石棺検出状況（南から）



石棺内完蔵状況（南から）



石棺除去後（南から）



玄室北東隅遺物出土状況（東から）

13 恩智遺跡（第2次調査）

調査地 八尾市恩智北町1丁目59-60

調査期間 昭和63年8月29日～昭和63年9月1日

調査面積 100m²

はじめに

今回の発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、当調査研究会が恩智遺跡内で実施した発掘調査の第2次調査にあたる。

当遺跡は、生駒山地西麓に形成された扇状地末端から河内低平地にかけて広がる縄文時代前期から鎌倉時代に至る複合遺跡で、現在の行政区画では八尾市恩智北町・恩智中町・恩智南町一帯に所在している。

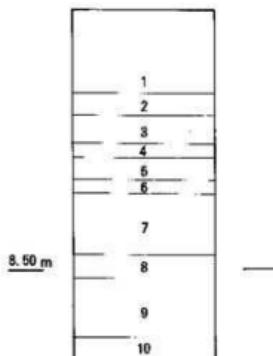
当遺跡は、大正6年(1917)7月に京都帝國大学考古学研究室により実施された発掘調査で確認された遺跡で、以後、数次にわたる調査が実施され、恩智遺跡が旧石器時代～古墳時代中期に至る複合遺跡であること

が判明している。

今回の調査地は、昭和60年に当調査研究会が実施した第1次調査地の東に隣接している。

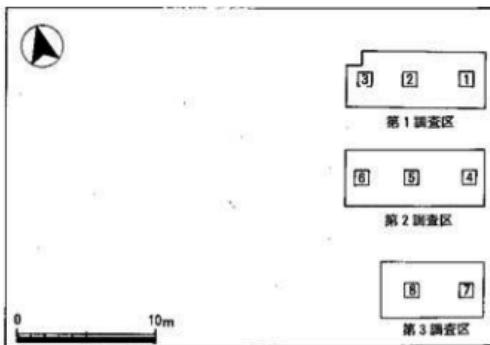
調査概要

調査に際しては、八尾市教育委員会の指示書に基づき、第1調査区～第3調査区は現地表下1.5mまで機械により掘削した後、以下基礎杭部8

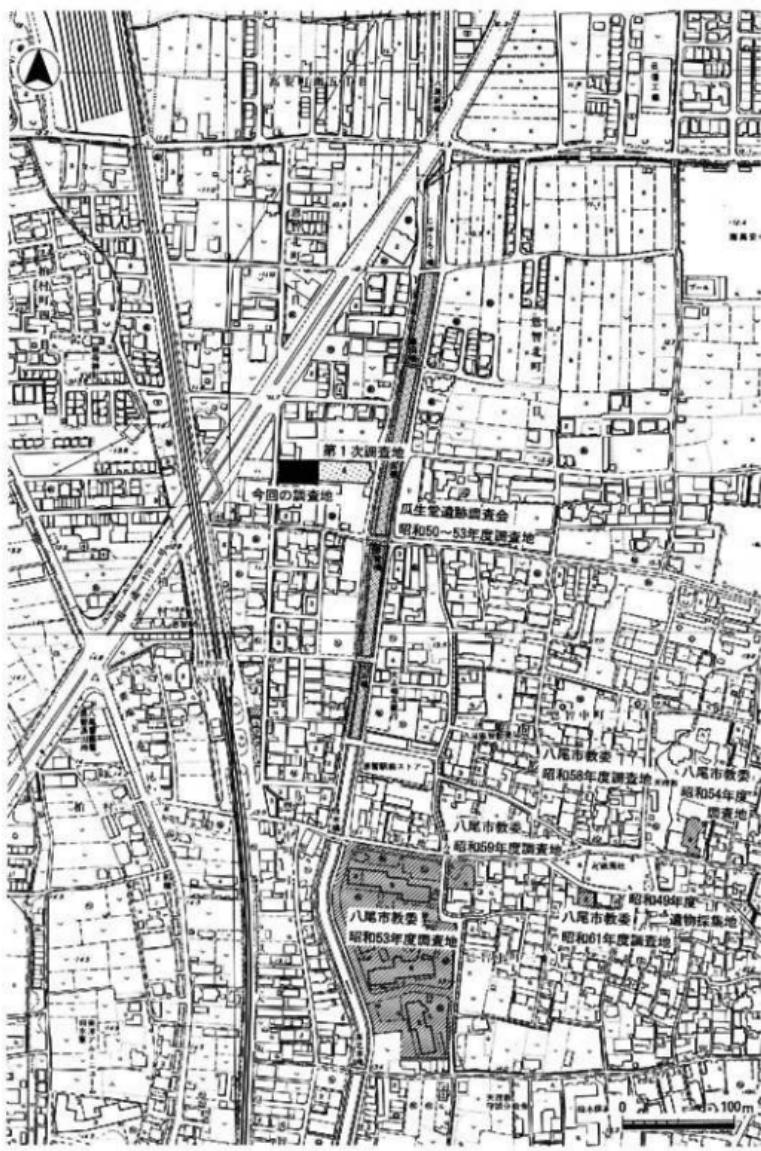


第1層	盛土
第2層	茶色細砂混粘土
第3層	暗茶褐色細砂混粘土
第4層	茶灰色細砂
第5層	灰色粘土
第6層	茶褐色粗砂
第7層	灰青色粘質シルト
第8層	灰青色細砂混粘土
第9層	暗灰色細砂混粘土
第10層	暗灰色粗砂混粘土

基本層序模式図



調査区設定図



調査地周辺図

箇所（第1グリッド～第8グリッド）について人力掘削を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、各グリッドの現地表下1.94～2.38m（標高8.44～8.0m）付近に存在する第9層暗灰色細砂凝粘土層から弥生時代中期から古墳時代中期に至る遺物が出土したが、その直下の第10層暗灰色粗砂凝粘土層上面においては遺構が検出されなかった。

まとめ

今回の調査では明確な遺構は検出されなかったものの、弥生時代中期から古墳時代中期に至る遺物を含む土層が調査地全域に広がっていることが確認された。この時代の遺構は当調査地の東側で恩智川改修工事に伴って実施された調査および当調査地の東に隣接した地点で実施した調査（第1次調査）^{註1}で検出されていることから、これらの地点と有機的な関係を持つものと推定できよう。^{註2}

註1 弥生堂遺跡調査会 「恩智遺跡Ⅰ・Ⅱ」 1980

　　「恩智遺跡Ⅲ」 1981

註2 姫八尾市文化財調査研究会 「昭和60年度事業概要報告－1 恩智遺跡（第1次調査）」『姫八尾市文化財調査研究会報告9』 1986



第1グリッド（西から）



第2グリッド（南から）



第3グリッド（南から）



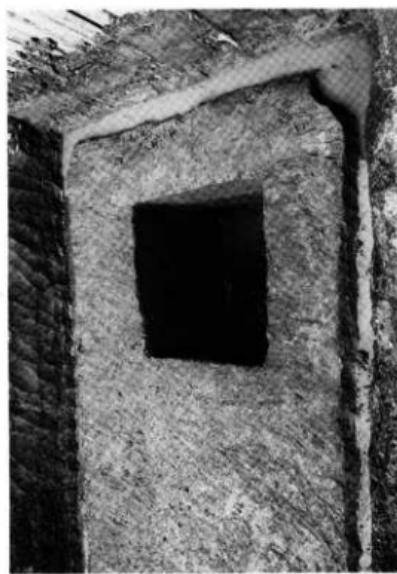
第4グリッド（南から）



第5グリッド（南から）



第6グリッド（南から）



第7グリッド（南から）



第8グリッド（南から）

14 恩智遺跡（第3次調査）

調査地 八尾市恩智1045番地外 6筆

調査期間 昭和63年11月7日～昭和63年11月17日

調査面積 48m²

はじめに

今回の発掘調査は浄化槽建設工事に伴うもので、当調査研究会が恩智遺跡内で実施した発掘調査の第3次調査にあたる。

今回の調査地点は、恩智遺跡推定範囲の東端に位置し、地形的には生駒山地西麓裾部の標高50m前後の丘陵地帯にあたる。また、調査地点一帯は高安古墳群の南部地域にあたり、昭和60年度には当調査地の北側約400mの地点で、八尾市教育委員会によって古墳時代終末期に比定される3基の古墳の調査が実施されている。



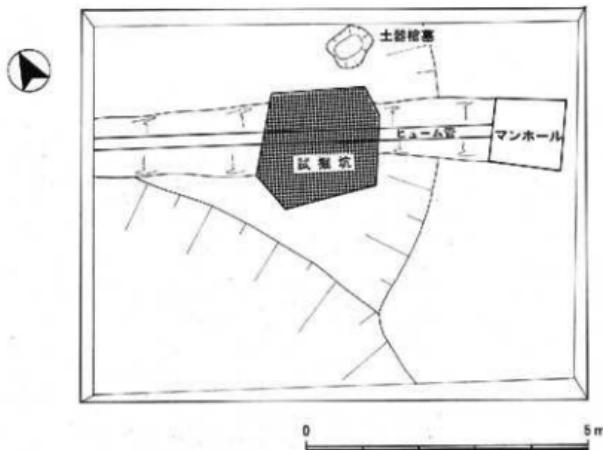
調査地周辺図

調査概要

調査に際しては、八尾市教育委員会の指示書に基づき、現地下0.7mまで人力で掘削を行った。その結果、現地表下0.7m前後に存在する黄褐色砂礫土層上面で古墳時代後期に比定される土器棺墓1基を検出した。土器棺墓は、上面の形状が梢円形を呈する掘方（東西0.8m・南北0.65m・深さ0.1m）に土師器羽釜の口縁部を西に向かせた状態で埋葬されていた。内部からは遺物は出土しなかった。また、遺構に伴わないので、上層からは弥生時代後期の高杯・古墳時代後期の埴輪片が出土している。

まとめ

今回の調査では、黄褐色砂礫土層（地山）上面で古墳時代後期の土器棺墓が検出された。調査地点一帯に前述したように高安古墳群の一角にあたり、調査においても埴輪片が多数検出されていることから、今回検出した土器棺墓も古墳に近接して存在していた可能性が高い。また、上層からは弥生時代後期の遺物が出土しており、調査地周辺に集落が存在していたことが示唆できよう。



検出遺構平面図



調査区全景（東から）



土器棺墓検出状況（北から）

15 老原遺跡（第3次調査）

調査地 八尾市東老原1丁目42-1

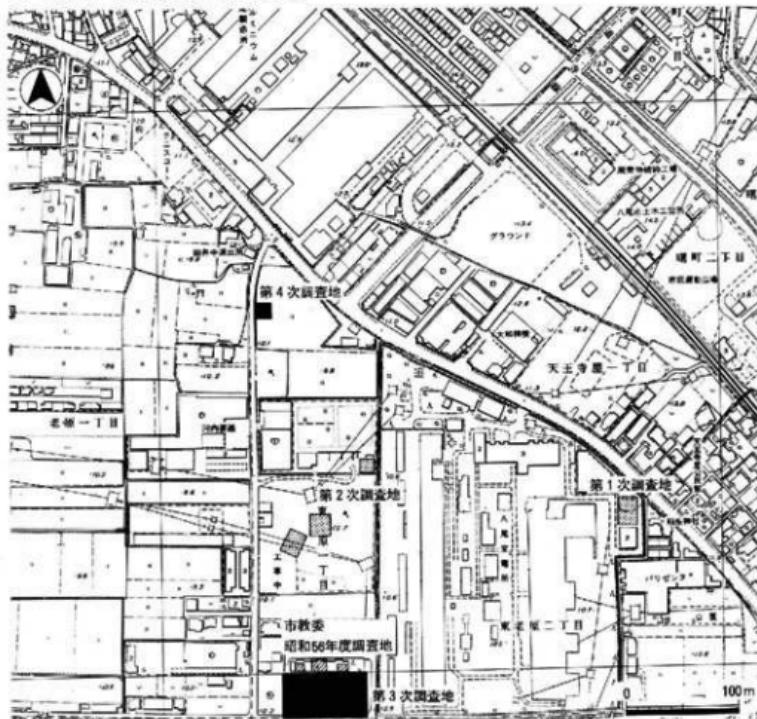
調査期間 昭和63年10月27日～昭和63年11月16日

調査面積 320m²

はじめに

今回の発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、当調査研究会が老原遺跡内で実施した発掘調査の第3次調査にあたる。

当遺跡は旧大和川の主流である長瀬川の左岸に位置しており、現在の行政区画では老原1丁目・2丁目・東老原1丁目にあたる。



調査地周辺図

当遺跡内では、昭和56年度に八尾市教育委員会が東老原1丁目で発掘調査を実施しており、古墳時代後期と鎌倉時代の遺構・遺物を検出している。さらに、昭和60年には当調査研究会が東老原2丁目46（第1次調査）、東老原1丁目11（第2次調査）で発掘調査を実施している。その結果、古墳時代後期と鎌倉時代の水田・鎌倉時代前期～後期の集落跡を検出している。

今回の調査地は、八尾市教育委員会が昭和56年度に実施した調査地の南側に隣接している。

調査概要

調査は、共同住宅および浄化槽の建設予定地の2ヶ所で、前者を南調査区（300m²）後者を北調査区（20m²）と呼称した。掘削方法については、現地表下1.2m前後迄は機械で掘削を行い、以下0.3～0.4mについては人力による掘削を実施した。その結果、南調査区では現地表下1.5～1.7m前後に存在する第5層上面で鎌倉時代前期に比定される溝4条（SD-1～SD-4）を検出した。北調査区では南調査区と同様第5層上面を調査対象としたが遺構は検出されなかった。遺物は第3層および第4層から古墳時代後期から鎌倉時代前期に比定される土器の小破片が南調査区・北調査区を含めてコンテナ箱1箱程度出土した。

基本層序

調査区で普遍的にみられた6層を基本層序とした。

第0層 盛土。層厚60～70cm。

第1層 IH耕土。暗灰色砂質土。層厚10～20cm。

第2層 淡灰茶色。微砂・細砂。層厚20～30cm。酸化鉄の斑点が顕著。

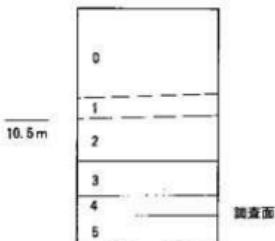
第3層 淡灰色～淡灰茶色。粘質・シルト。層厚15

～30cm。酸化鉄・マンガンが斑点状に付着し

ている。古墳時代後期～鎌倉時代前期に比定
される土器の小破片を少量含む。

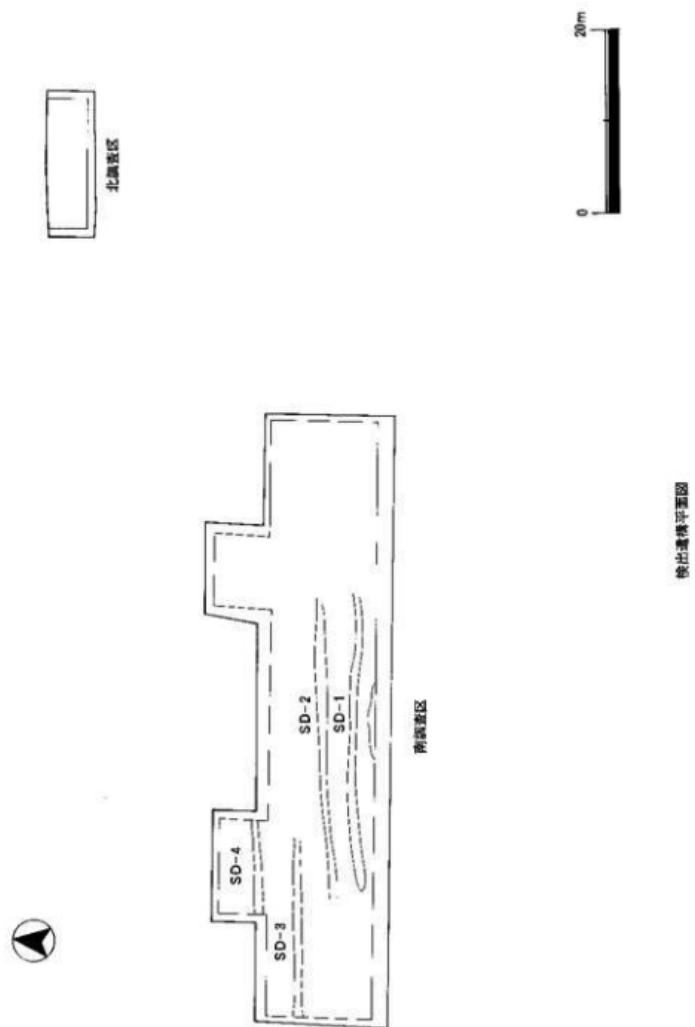
第4層 灰色。シルト・粘質土。層厚10～30cm。酸
化鉄・マンガンが斑点状に付着している。古墳
時代後期～鎌倉時代前期に比定される土器の
小破片を少量含む。

第5層 灰色～暗青灰色。シルト・粘土。層厚40～
50cm。酸化鉄が斑点状に付着している。この
土層上面を調査面とした。



- 0 盛 土
- 1 暗灰色 砂質
- 2 淡灰茶色 微砂・細砂
- 3 淡灰～淡灰茶色 粘質土・シルト
- 4 灰 色 シルト・粘質土
- 5 灰色～暗青灰色 シルト・粘土

基本層序模式図



検出遺構

溝（SD）

4条（SD-1～SD-4）を検出した。すべて、東西方向に伸びるもので4条ともに幅・深さの数値が近似していることや、内部堆積土層が一様に淡灰色茶色微砂と淡灰色微砂の互層であることから、溝の性格としては鎌溝が考えられる。なお、SD-2・3・4からは鎌倉時代前期に比定される瓦器塙の小破片が極少量出土している。

SD-1

東西方向に直線的に伸びるもので、検出長16.2mを測る。幅0.2～0.4m・深さ0.04m前後を測る。

SD-2

SD-1の北へ約0.8～1.0m離てほぼ平行に伸びるもので検出長18.1mを測る。幅0.35～0.7m・深さ0.04m前後を測る。

SD-3

SD-2の北側約1.0mで検出したもので、検出長9.8mを測る。幅0.35～0.5m・深さ0.05m前後を測る。

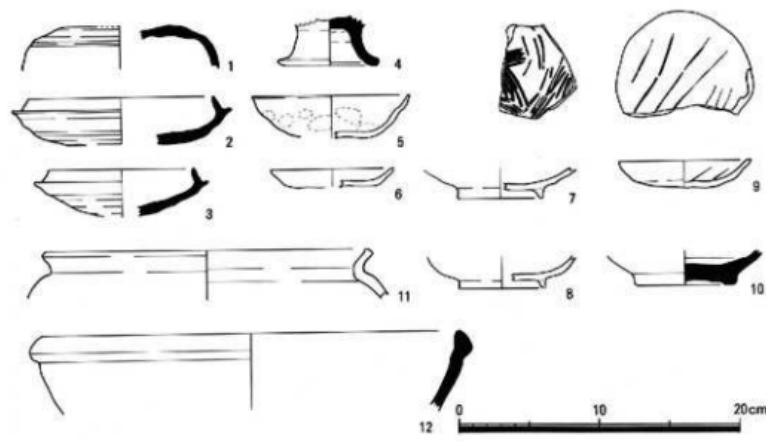
SD-4

SD-3の北側約1.8mを離てほぼ平行に伸びるもので、検出長5.4mを測る。幅0.4m・深さ0.03m前後を測る。

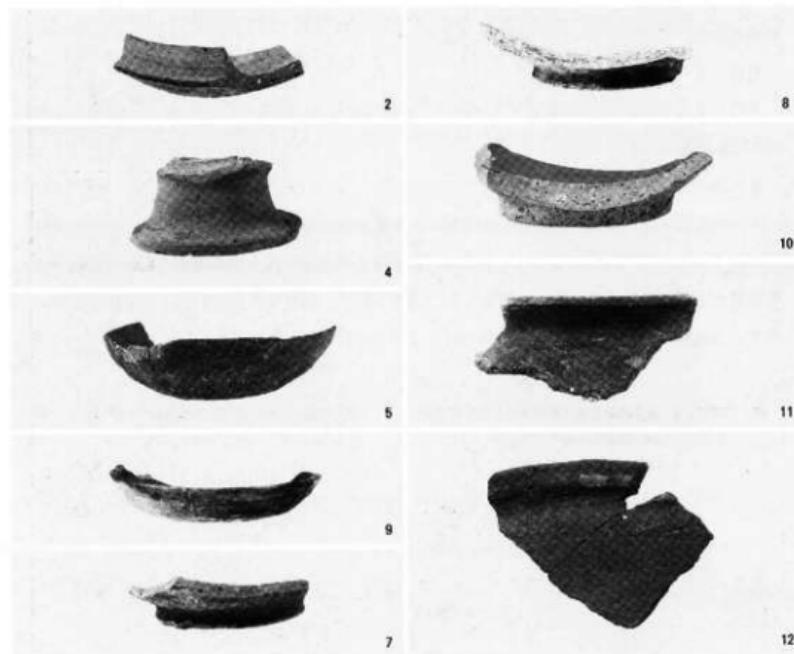
まとめ

今回の調査では、当調査地が昭和56年度に八尾市教育委員会が実施した調査地の南側に隣接しているため、既往調査で検出した鎌倉時代初頭および古墳時代後期の遺構の南側への広がりを追求することを主目的に調査を実施した。調査の結果、鎌倉時代前期の溝4条を検出したのみで、古墳時代後期に比定される遺構の存在は認められなかった。
註1

註1 姉八尾文化財調査研究会「老原遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度」、姉八尾市文化財調査研究会報告、1983



出土遺物実測図



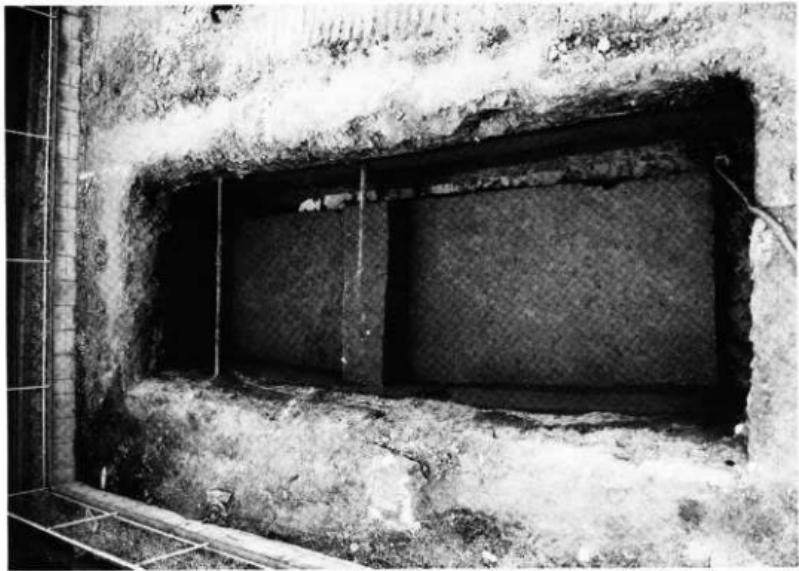
出土遺物

出土遺物観察表

包含層

遺物番号	器種	寸法 (cm)	口径 高さ	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考
1	須恵器 杯蓋	13.8 3.1 径 12.6	マキアゲ、ミズビキ成形。体部外面受端部 から 0.5 cm 以上は回転ヘラケズリ。他の回転 ナデ。ロクロ回転左方向。	淡灰色	やや粗 長石 (0.1 ~0.5mm) を 多量に含む。	堅密	%	
2	須恵器 杯身	13.2 3.4 受部径 15.6 たわみ 0.9	マキアゲ、ミズビキ成形。体部外面受端部 から 1.7 cm 以下は回転ヘラケズリ。他の回転 ナデ。ロクロ回転左方向。	淡灰色	やや粗	堅密	%	
3	須恵器 杯身	10.2 3.5 受部径 12.4 たわみ 0.9	マキアゲ、ミズビキ成形。体部外面受端部 から 0.8 cm 以下は回転ヘラケズリ。他の回転 ナデ。ロクロ回転左方向。	淡灰色 淡灰青色	やや粗	堅密	%	
4	須恵器 高杯	— 径 7.2	マキアゲ、ミズビキ成形。脚部内外面回転 ナデ。脚部内外面の一部に粘土接合痕遺存。	淡灰色	密	堅密	脚部のみ	
5	土師器 杯	11.4 3.0	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体 部内外面に指腹圧痕遺存。体部内面は弱いナ デ。底面付近に長径 0.7 cm の円孔を焼成前に 穿つ。	灰茶褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm) を含む。	良好	%	
6	土師器 小皿	8.8 1.3	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体 部内外面ナデ。	淡灰茶色	密	良好	%	
7	瓦器 楕	— 高台径 6.2 高台高 0.8	高台部ヨコナデ。他のナデ。体部外面に指 腹圧痕遺存。体部内面および見込み部は常な ヘラミガキ。	灰黑色 淡灰色	やや粗	良好	底部分	
8	瓦器 楕	— 高台径 6.3 高台高 0.6	底面内外面ナデ。高台部ヨコナデ。体部内 外面の一部に密なヘラミガキが認められる。	黒灰色 灰白色	精良	良好	底部分	
9	瓦器 小皿	9.5 1.9	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。 底面外面の一部にヘラケズリが認められる。 見込み部に平行線状ヘラミガキ。	灰黑色 淡灰色	精良	良好	%以上	
10	器器 楕	— 高台径 7.2 高台高 0.9	マキアゲ、ミズビキ成形。高台部は削り出 しによる成形。体部外面回転ナデ。底部内 面に茶褐色の凹窪が現る。高台部は落合。	褐色 白灰色	堅密	景德鎮系 白磁 底部分		
11	土師器 楕	22.7	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体 部内外面ヨコナデ。	淡茶褐色	やや粗	良好	口縁部分	
12	須恵器 鉢	30.0	マキアゲ、ミズビキ成形。口縁部内外面ヨ コナデ。体部外面回転ナデ。	暗灰色 灰白色	密	堅密	東晉系 %	

15 老原遺跡



北調査区全景（西から）



南調査区全景（東から）

16 老原遺跡（第4次調査）

調査地 八尾市東老原1丁目

調査期間 平成元年2月14日～平成元年3月1日

調査面積 40m²

はじめに

今回の発掘調査は下水道布設工事に伴うもので、当調査研究会が老原遺跡内で実施した発掘調査の第4次調査にあたる。今回の調査地は、昭和60年度に当調査研究会が実施した第2調査地の第3調査区の北西約160mに所在している。なお、調査地点の西側50mの地点は通称「五条の宮」と呼ばれており、その付近から奈良時代後期の軒丸瓦や上師器・瓦器焼片が出土したことが報告されている。

調査概要

調査地は、下水道の発進整坑部分にある。掘削方法は、現地表下0.4mまでは機械で行い、以下1.0mについては人力掘削を行った。

その結果、現地表下0.7m前後に存在する第6層上面（標高10m）で、鎌倉時代の土坑2基（SK-201・202）、溝1条（SD-201）、小穴（SP-201）を検出した（第2調査面）。さらに0.2～0.3m下部に存在する第7層上面（標高9.7～9.8m）で、平安時代末期の溝2条（SD-101・102）を検出した（第1調査面）。



基本層序模式図

基本層序

比較的安定した土層の堆積状況であった。ここでは、普遍的に存在した11層を基本層序とした。なお、第1調査面の調査終了後、下層を確認する目的で約1.5mまで掘削を行った結果、第8層～第10層の砂層内から古墳時代前期～奈良時代に比定される遺物が出土している。

検出遺構

第1調査面

溝（SD）

SD-101

調査地のはば中央を南北方向に伸びる。検出長6.6m・幅1.3～2.1m・深さ0.25mを測る。内部堆積土は淡灰茶色粘土層の單一層である。内部からは平安時代末期の瓦器椀・小皿、土師器小皿・中皿・土釜、木製品（板塔婆）が出土している。

SD-102

調査地内の南東部で検出した。検出長1.9m・幅0.8～0.9m・深さ0.1mを測る。内部堆積土は灰色粘土の單一層である。溝内からは瓦器、土師器の細片が少量出土している。

第2調査面

土坑（SK）

SK-201

調査地の東側で検出した。上面の形状は南北方向に長い隅丸の長方形を呈する。東西幅1.45m・南北幅2.3m・深さ0.1mを測る。内部堆積土は灰茶色粗砂混粘土の單一層である。内部から土師器、瓦器の小破片が少量出土している。

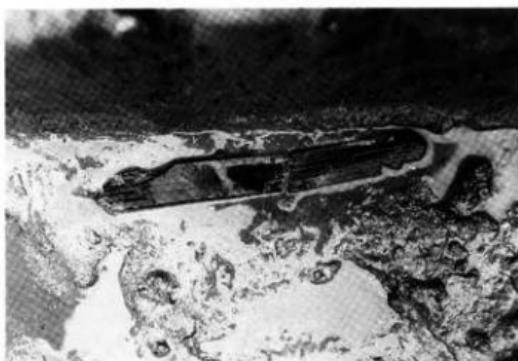
SK-202

調査地の北東側で検出した。北部が調査区外のため全容は不明である。内部堆積土は暗茶褐色疊混粘土の單一層である。内部からは土師器、瓦器の小破片が少量出土している。

溝（SD）

SD-201

調査区の西部を南東～北西方向に伸びるもので、検



板塔婆出土状況

出長6.2m・幅1.6m以上・深さ0.25mを測る。内部堆積上層は、上層から灰茶色粗砂混粘土・灰色細砂混粘土・茶灰色微砂混粘土である。内部から土師器、瓦器の小破片が少量出土している。

小穴 (SP)

SP-201

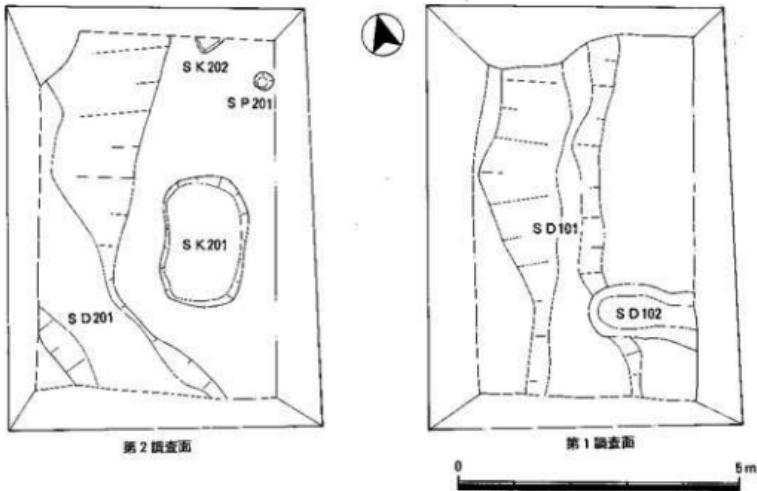
調査地の北東部で検出した。上面の形状は円形を呈する。径0.3m・深さ0.12mを測る。内部堆積土は灰色細砂混粘土の單一層である。内部から半瓦片が1点出土している。

まとめ

今回の調査では、平安時代末期と鎌倉時代後期の遺構を検出した。同時期の遺構は第2次調査地で検出されている他、第2次調査地の南側で昭和56年度に市教委が実施された調査地でも^{註2}鎌倉時代前期の遺構が検出されており、この時期の集落がさらに北側へ広がっていることが明らかとなった。

註1 神奈川県文化財調査研究会 「Ⅱ老原遺跡(第2次調査)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度] 総合
八尾市文化財調査研究会報告13 1987

註2 神奈川県文化財調査研究会 「老原遺跡発掘調査概要報告」[八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度]
神奈川県文化財調査研究会報告2 1983



検出遺構平面図



第1調査面全景（北から）



第2調査面全景（北から）

17 たいなか
17 田井中遺跡（第7次調査）

調査地 八尾市空港1丁目81

調査期間 昭和63年5月30日～昭和63年6月16日

調査面積 25m²

はじめに

今回の発掘調査は通信鉄塔建設に伴うもので、当調査研究会が田井中遺跡内で実施した発掘調査の第7次調査にある。

当遺跡は、沢人和川の主流であった長瀬川左岸一帯に広がる低平地に位置しており、現在の行政区画では田井中1～2・4丁目、志紀町西2・3丁目、空港1丁目一帯にある。

当遺跡および北側に隣接する志紀遺跡内では、昭和57年度以降当調査研究会および大阪府教育委員会により昭和62年度末までに、8次（府教委2次、当調査研究会6次）にわたる発掘調査が実施してきた。これらの調査地点は遺跡推定範囲内の北東部と南西部に集中しており、北東部では特に弥生時代中期から平安時代に至る時期の水田遺構が重層的に検出されている。一方、南西部ではこれまでに当調査研究会が3次（第1次・第2次・第3次）にわたる発掘調査^{註1}^{註2}^{註3}を陸上自衛隊八尾駐屯地内で実施している。その結果、弥生時代前期～後期・古墳時代中期の遺構・遺物が検出されている。今回の調査地点は当調査研究会が昭和62年度に実施した第5次調査の第1調査区から南東約80mに位置する。

調査概要

通信鉄塔建設予定地に東西9m×南北11mの調査区を設定した。調査に際しては、現地表下2.1m前後までを機械で掘削し、以下の各層は人力による掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。その結果、現地表下2.5m（標高8.7m）前後に存在する灰青色シルト土層上面で弥生時代前期の溝2条と古墳時代前期（布留式期）の上坑1基を検出した。

まとめ

今回の調査では、弥生時代前期と古墳時代前期（布留式期）の遺構を検出した。当調査地の周辺ではこれまでに3次（第1次・第2次・第5次）にわたる調査を実施しており、弥生時代前期（第5次）・弥生時代中期（第2次・第5次）・弥生時代後期（第5次）、古墳時代中期（第2次）の遺構が検出されている。今回の調査で新たに古墳時代前期（布留式期）の遺構が検出されたことから、当調査地周辺では弥生時代前期から古墳時代中期に至るまで継続して集落が営まれていたことが明らかになった。

註1 姫八尾市文化財調査研究会「田井中遺跡：陸上自衛隊八尾駐屯地内浴場塗装に伴う発掘調査概要」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査』 1983

註2 姫八尾市文化財調査研究会「田井中遺跡（第2次調査）」『昭和57年度事業概要報告』 姫八尾市文化財調査研究会報告7 1985

註3 姫八尾市文化財調査研究会「田井中遺跡（第5次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』 姫八尾市文化財調査研究会報告16 1988



調査区全景（北から）



SK-1 掘出状況（東から）

18 田井中遺跡（第8次調査）

調査地 八尾市志紀町西3丁目

調査期間 昭和63年10月1日～平成元年2月20日

調査面積 996m²

はじめに

今回の発掘調査は、近畿財務局の宿舎建設に伴うもので、当調査研究会が田井中遺跡内で実施した発掘調査の第8次調査にあたる。

今回の調査地点である田井中遺跡の北東部一帯では、近畿財務局の宿舎建設に伴って昭和60年度以降当調査研究会が3次（第3次・第4次・第6次）にわたる調査を実施してきた。その結果、古墳時代後期・鎌倉時代に比定される水田遺構を検出している。

今回の調査地点は第3次調査の第1・第2調査区の北側に隣接している。

調査概要

宿舎建設予定地にあわせて、東西83m・南北12mのトレンチを設定した。なお、当調査地一帯では、昭和60年度から継続的に発掘調査を実施しており、昭和60年度（第3次調査—第1調査区～第3調査区）、昭和61年度（第4次調査—第4調査区・第5調査区）、昭和62年度（第6次調査—第6調査区）との関係から、今回の調査地を第7調査区と呼称した。

掘削に際しては、現地表下約1.5～2.0mまで機械で掘削し、以下2.0～2.5mを人力で掘削した。なお、調査はオープンカットT法で壁面の勾配を充分にとったため、最終調査面は東西約60m、南北1～1.5m程度となった。調査の結果、水田遺構（4時期）・集落遺構（1時期）を検出した。

第1調査面

現地表下1.7～2.1m（標高10.1～10.3m）付近に堆積する青灰色粘土上面で、水田3筆・畦畔2条を検出した。2条の畦畔はほぼ南北に伸びており、それらで区画されている水田は東西幅約10mの規模を有する。水田直上に堆積する砂層からは、土師器・須恵器・瓦器・白磁碗等の摩耗をうけた細片が少量出土している。内でも所属時期が明確で最も新しいものは13世紀代の白磁碗である。

第2調査面

現地表下2.3～2.8m（標高9.3～9.8m）付近に堆積する暗赤褐色粘土上面で、水田13筆大畦畔6条、小畦畔8条を検出した（水田II）。畦畔の方向は、概ね南西—北東・北西—南東方向

である。大畦畔は水田の床土と同質の砂を主とする土を何層にも重ねて構築されており、水田上面との比高差は20~30cm程度を測る。小畦畔は床上を削り出してつくられている。水口（水尻）は3箇所で確認した。なお、大畦畔は幅5m以上もある大規模なもので、内部から須恵器壺・甌・土師器杯・壺が出土しており、その出土状況から構築の際の祭祀に伴う遺物の可能性が高い。遺物の所属時期は概ね6世紀後半に比定できよう。水田上面に堆積するシルト～砂層からは、所属時期を決定づける出土遺物はなかった。

第3調査面

現地表下2.8~3.4m（標高8.8~9.3m）付近に堆積する紫褐色粘土上面で水田13筆・大畦畔3条・小畦畔9条・溝1条を検出した（水田Ⅲ）。畦畔の方向は、第2調査面で検出した水田Ⅱと同様、南西-北東・北西-南西方向に構築されている。構築方法は、大畦畔は盛り上げて、小畦畔は削り出している。所属時期を決定づける出土遺物はなかった。

第4調査面

現地表下3.2~3.4m（標高8.2~8.8m）付近に堆積する黄褐色粗砂上面で、小穴8個・溝1条を検出した。小穴は、主に中央部に点在しており、径0.2~0.8m・深さ0.05~0.1m程度のものである。内部堆積土は茶褐色粘土で、遺物は出土しなかった。溝は東端で検出した。南東-北東に伸びるもので、幅6~7m・深さ0.1~0.2mを測る。内部堆積土は灰色粘土で遺物は出土しなかった。この遺構面の上層には、5世紀代までの土器の細片が堆積している。

第5調査面

現地表下3.6~3.8m（標高8.2~8.5m）付近に堆積する灰緑色粘土上面で、水田7筆・畦畔6条を検出した（水田Ⅳ）。水田Ⅱ・水田Ⅲとほぼ同一の方向に構築されており、畦畔は水田Ⅱ・水田Ⅲに比して規模は大きい。上面に堆積する粗砂からは、弥生時代中期～古墳時代初期（庄内式期）にかけての土器・石器などが出土している。

まとめ

今回の調査では4時期の水田（水田Ⅰ～水田Ⅳ）および集落跡を検出した。当調査地一帯では昭和60年度以降、大阪府教育委員会、当調査研究会により数次にわたる調査が実施され、当調査と同様水田遺構が重層的に検出されている。ここでは、これらの調査結果をもとにして今回の調査で検出した各水田の構築・廃絶時期を整理する。

水田Ⅳは構築時期は明確でないものの、廃絶時期は庄内式期の中の一時期と推定される。その後、古墳時代前期～中期初頭には集落として開発され中期まで存続したものと考えられる。古墳時代中期以降は、再び大畦畔を伴う水田（水田Ⅲ）となっていたようである。水田Ⅲは、その後洪水等により埋没するが、古墳時代後期には水田Ⅳを踏襲する形で水田Ⅱが構築されている。水田Ⅱの廃絶時期は明確でないが、その後平安時代後期に水田Ⅰが構築される間に、シ

18 田井中遺跡

ルト～微砂が0.3～0.6m堆積しており、この間は未耕地であったようである。

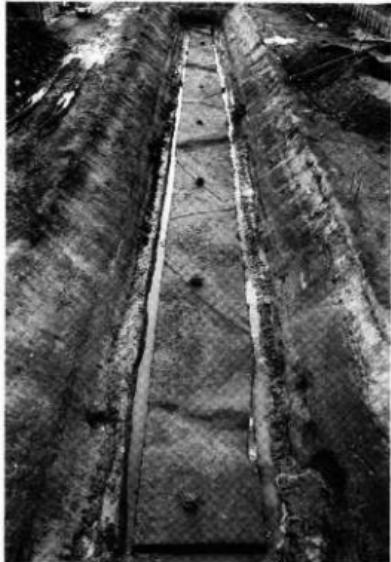
注1 鳥取市文化財調査研究会「田井中遺跡（第3次調査）」「昭和60年度事業概要報告」鳥取市文化財調査研究会報告7 1985

注2 鳥取市文化財調査研究会「田井中遺跡（第4次調査）」「昭和61年度事業概要報告」鳥取市文化財調査研究会報告4 1987

注3 鳥取市文化財調査研究会「田井中遺跡（第6次調査）」「八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度」鳥取市文化財調査研究会報告16 1988



第1面 掘出状況（東から）



第2面 検出状況（東から）



第3面 検出状況（東から）



第4面 検出状況（東から）

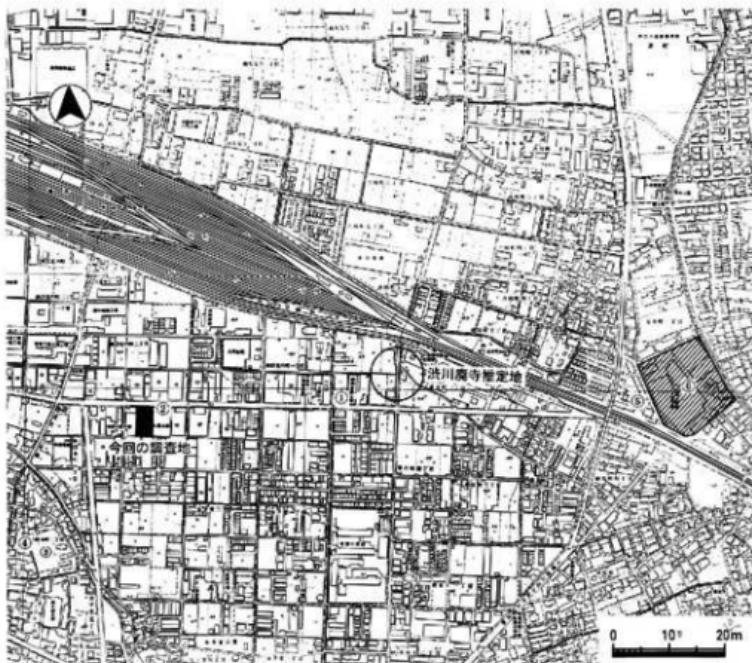


第5面 検出状況（東から）

19 あそべ
19 跡部遺跡（第4次調査）

調査地 八尾市跡部木町1丁目4-1・4-2

調査期間 昭和63年10月1日～昭和63年10月22日

調査面積 300m²

調査地周辺図

周辺の発掘調査一覧表

番号	調査主体	調査地	調査期間	文献	発行
1	八尾市教育委員会	春日町1-57	56年11/9～11/19	八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度：(財)報告2	1983. 3
2	当調査研究会(第1次)	跡部木町1-3	57年10/1～10/5	昭和57年度における埋蔵文化財発掘 調査 その結果と概要	1983. 3
3	同 上(第2次)	跡部木町2-45	59年3/1～3/31	昭和58年度事業概要報告：(財)報 告5	1984. 3
4	八尾市教育委員会	跡部木町2-44	59年5/10～5/22	八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報 告書：市教委報告11	1985. 3
5	同 上	安中町3-52	59年6/18～7/2	同 上	1985. 3
6	当調査研究会(第3次)	安中町3-26他	62年4/6～5/18	八尾市文化財調査研究会年報昭和62 年度：(財)報告16	1988. 12

はじめに

今回の発掘調査は、共同住宅建設に伴うもので、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した発掘調査の第4次調査にある。

当遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川から旧平野川が分流する地点以西の両河川に挟まれた扇状地性低地に位置する。現在の行政区画では跡部本町・太子堂・春日町・渋川町にあたる。なお、遺跡推定範囲の東部には渋川廃寺（飛鳥時代）の推定地が含まれている。

当遺跡内では、昭和57年度以降5次（八尾市教育委員会2次、当調査研究会3次）にわたる発掘調査が実施されており、弥生時代前期～後期・古墳時代前期・平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。今回の調査地は、当調査研究会が昭和57年度に実施した第1次調査地の西側に隣接している。

調査概要

調査に際しては、八尾市教育委員会の指示に基づき、現地表下2.1mまでの上層を機械で掘削し、以下の各層は人力により掘削を実施した。調査の結果、現地表下2.25m（標高6.9m）付近に存在する第9層青灰色シルト層上面で古墳時代前期の土坑9基（SK-1～SK-9）・溝2条（SD-1・SD-2）を検出した。

検出遺構

土坑（SK）

SK-1

調査区の東部で検出した。上面の形状は東西方向に長い長方形を呈し、東西幅1.65m・南北1.1m・深さ0.15mを測る。内部堆積土は暗灰色シルト混粘土である。内部から土師器の小破片が少量出土している。

SK-2

8.00m

SK-1の南側で検出した。上面の形状は東西方向に長い楕円形を呈し、東西幅1.45m・南北1.2m・深さ0.25mを測る。内部堆積土は暗灰色シルト混粘土である。内部から古墳時代前期の壺・甕等が出土している。

SK-3

SK-1の西側で検出した。上面の形状は東西幅2.05m・南北1.6m・深さ0.24mを測る。内部堆積土は暗



基本層序模式図

灰色シルト混粘土である。遺物は出土しなかった。

SK-4

SK-2の西側で検出した。上面の形状は南北方向に長い楕円形を呈し、東西幅1.2m・南北1.4m・深さ0.3mを測る。内部堆積土は上層から暗灰青色シルト混粘土・灰色シルト混粘土、暗灰色シルトである。遺物は出土しなかった。

SK-5

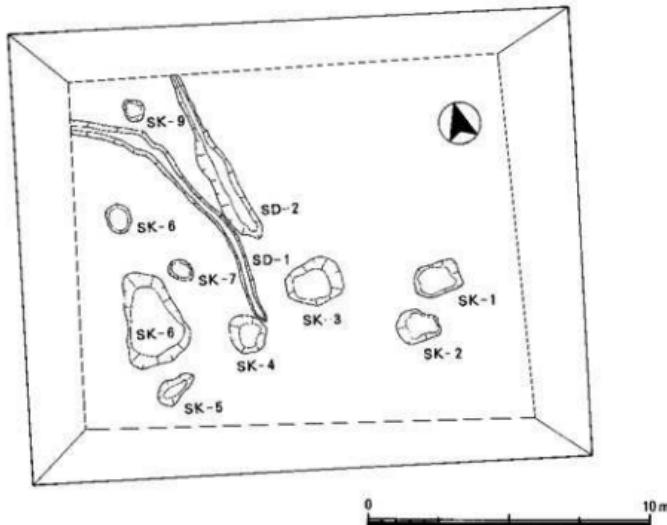
SK-4の西側で検出した。上面の形状は不定形を呈し、東西幅0.9m・南北1.3m・深さ0.3mを測る。内部堆積土は上層から暗灰青色シルト混粘土である。内部から土師器の細片が少量出土している。

SK-6

SK-5の北側で検出した。上面の形状は不定形を呈し、東西幅2.25m・南北3.3m・深さ0.2mを測る。内部堆積土は上層から暗灰色シルト混粘土、灰青色シルト混粘土である。内部からは古墳時代前期の壺の小破片が少量出土している。

SK-7

SK-6の東側で検出した。上面の形状は南北方向に長い楕円形を呈し、東西幅0.75・南北



検出遺構平面図

0.8m・深さ0.32mを測る。内部堆積土は上層から暗灰青色シルト混粘土である。遺物は出土しなかった。

SK-8

SK-6の北側で検出した。上面の形状は南北方向に長い楕円形を呈し、東西幅0.88m・南北1.05m・深さ0.28mを測る。内部堆積土は暗灰青色シルト混粘土である。遺物は出土しなかった。

SK-9

SD-1の北側で検出した。上面の形状は南北方向に長い楕円形を呈し、東西幅0.7m・南北0.8m・深さ0.15mを測る。内部堆積土は上層から暗灰青色シルト混粘土である。内部から古墳時代前期の甕の小破片が少量出土している。

溝(SD)

SD-1

SK-9の南側で検出した。南東-北西方向に伸びるもので、検出長10m・幅0.4m・深さ0.18mを測る。内部堆積土は灰色シルト混粘土である。内部から土師器の細片が少量出土している。

SD-2

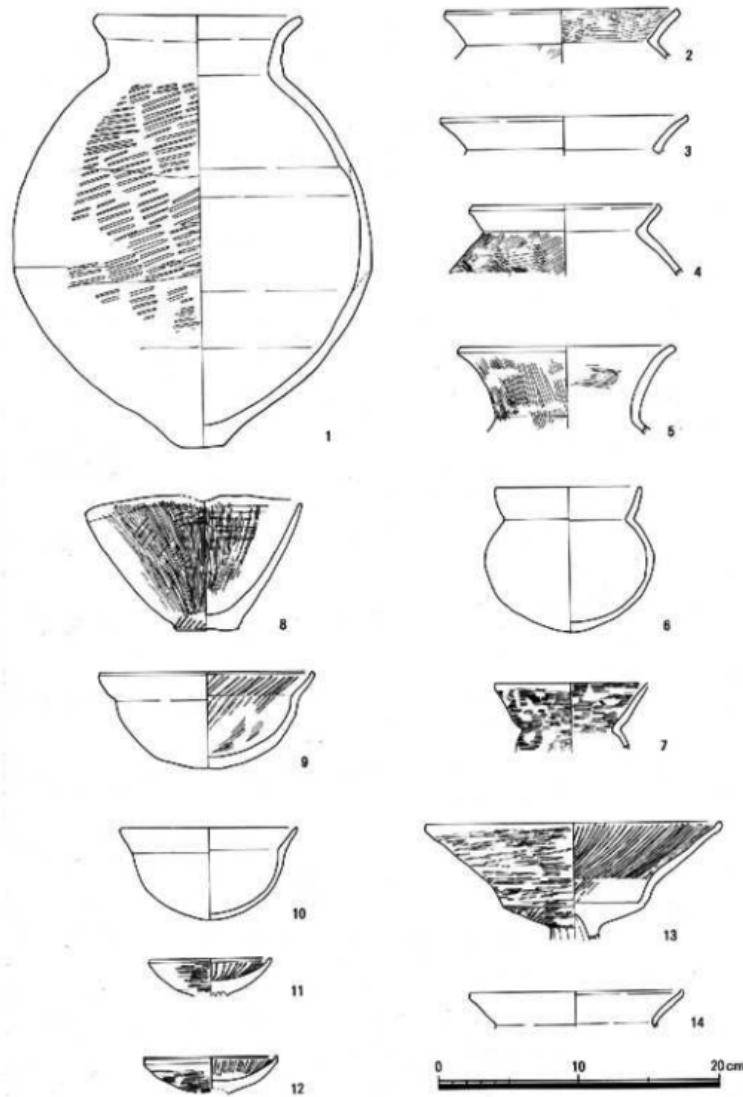
SD-1の東側で検出した。南北方向に伸びる溝で、検出長6m・幅0.35m・深さ0.16mを測る。内部堆積土は灰色シルト混粘土である。内部から古墳時代前期の甕の小破片が少量出土している。

まとめ

今回の調査では、古墳時代前期の土坑9基と溝2条を検出した。当調査地周辺で当該期と同時期に比定される方形周溝墓1基が当調査地の東400mで実施された調査で検出されており、^{註1}当遺跡内における集落の動向を考えるうえで重要な資料と言えよう。一方、調査地の東で昭和57年度に実施した第1次調査（跡部本町1丁目3）では、弥生時代後期と古墳時代前期の遺物が検出されており、今後の調査例の増加を待ってこの時期の集落の拡がりを追求する必要がある。なお、第1次調査で出土した出土遺物（包含層出土）については未報告であったため、本書に合わせて掲載した。

註1 兵庫八尾市文化財調査研究会『第6章 跡跡遺跡発掘調査概要報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書1980・1981年度』、兵庫八尾市文化財調査研究会報告2 1983.8

註2 兵庫八尾市文化財調査研究会『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査—その成果と概要—』 1988

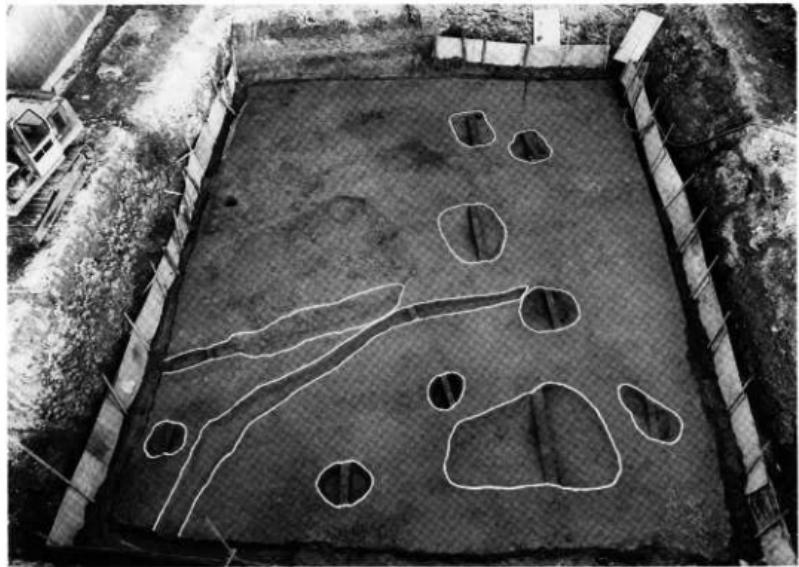


出土遺物実測図 SK-2 (1・2)、SK-6 (3)、SK-9 (4)、包含層 (5~14)

出土遺物観察表

遺物番号	器種	法華 口径 底径 (cm)	形態・調整技法	色調	胎土	焼成	備考
1	甕	14.3 31.2 底径 3.1	やや突出ぎみの平底から体部は丸味をもつ。底灰茶色 口縁部は上方へ立ち上ったのも外反する。端部は丸い。口縁部内外面ナデ、体部内面ナデ、 外面タキ目、底部内外面ナデ。	やや粗	良好	SK-2	
2	甕	16.5	「く」の字に外反する口縁部。端部はくぼむ。底灰茶色 口縁部内面ハケ目、外面ナデ。体部内面ヘラ ケズリ、内面ハケ目。	良	良好	SK-2	
3	甕	17.4	「く」の字に外反する口縁部。端部はつまみ上 げる。端部はくぼむ。口縁部内外面ヨコナデ、 体部内面ヘラケズリ。	底灰茶色	良	良好	SK-5
4	甕	13.2	やや丸味のある体部から「く」の字に折れ、外 上方へのびる口縁部に至る。端部は上方へつ まみ上げる。口縁部内外面ヨコナデ。体部内 面ナデ、外面ハケ目。	暗灰色	良	良好	SK-9
5	甕	15.0	ゆるやかに外反する口縁部。端部は丸味の ある面をもつ。内外面ともにハケ目。	底灰茶色	良	良好	包含層
6	小型丸底甕	10.2 10.5	丸味のある体部。口縁部は内寄する。端部 は丸い。口縁部内外面、体部内外面ともにナ デ。	底灰茶色	良	良好	包含層
7	小型丸底甕	10.8	丸い体部。斜上方へひらく口縁部。口縁部 内外面ヘラミガキ。体部内面ナデ。外面上 ミガキ。	底灰茶色	精良	良好	包含層
8	鉢	15.4 9.8	突出する上げ底状の底部。上外方へのびる 体部。口縁部はとがり気味におわる。体部内 面ヘラミガキ。外面上タキ後ヘラミガキ。底 部外面上タキ。内面ナデ。	底灰茶色	良	良好	包含層
9	鉢	15.2 6.9	内寄ぎみの体部から斜上方へ伸びる口縁部 へ至る。口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面 ナデ。	底灰茶色	精良	良好	包含層
10	鉢	12.6 6.5	内寄ぎみの体部から斜上方へ伸びる口縁部 へ至る。口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面 ナデ。	底灰茶色	良	良好	包含層
11	小型器台	8.6	ゆるやかに上外方にのびる。内面放射状の ヘラミガキ。外面上ミガキ。	底灰茶色	良	良好	包含層
12	小型器台	9.4	ゆるやかに上外方にのびる。口縁部つま みあげる。内面放射状のヘラミガキ。外面上 ミガキ。	底灰茶色	精良	良好	包含層
13	高杯	21.0	平底な杯底部からやや斜上方へのびたのち 外上方へのびる。端部はつまみ上げぎみに丸 く終る。杯部内面放射状シボリ目、外面上ミガキ。	底灰茶色	精良	良好	包含層
14	甕	15.2	外反する口縁部。端部はつまみ上げる。内 外面ともヨコナデ。	暗茶褐色	良	良好	包含層

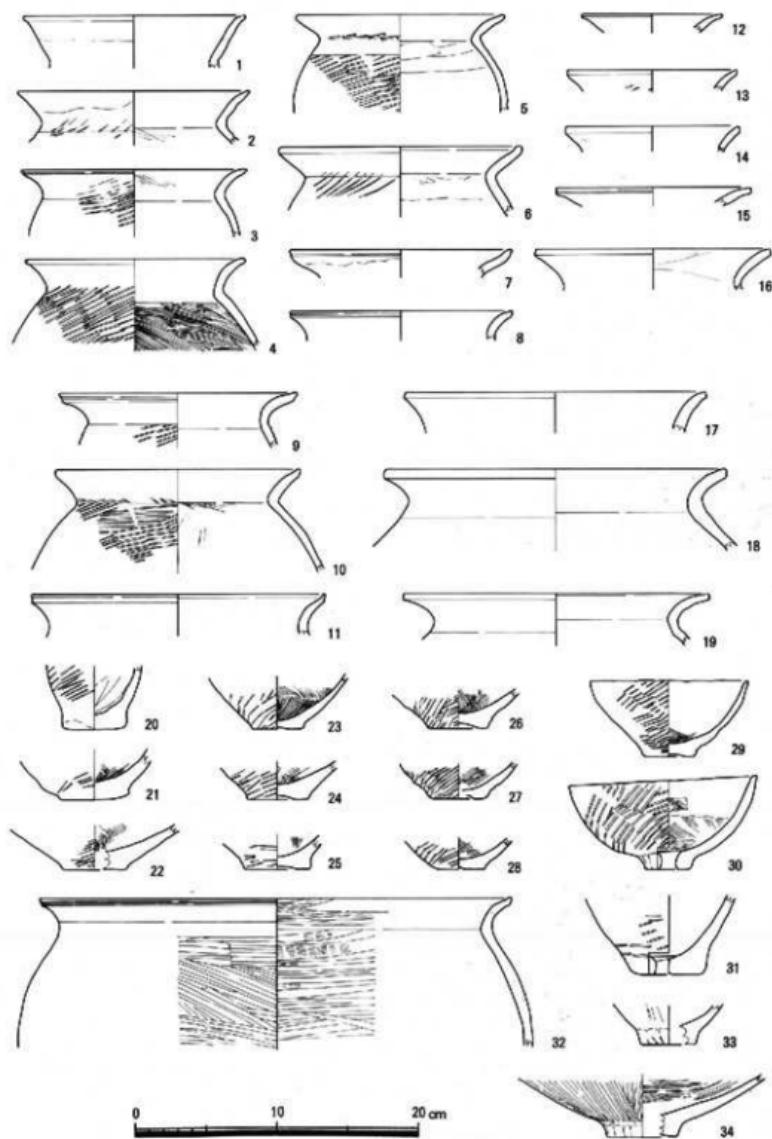
19 跡部遺跡



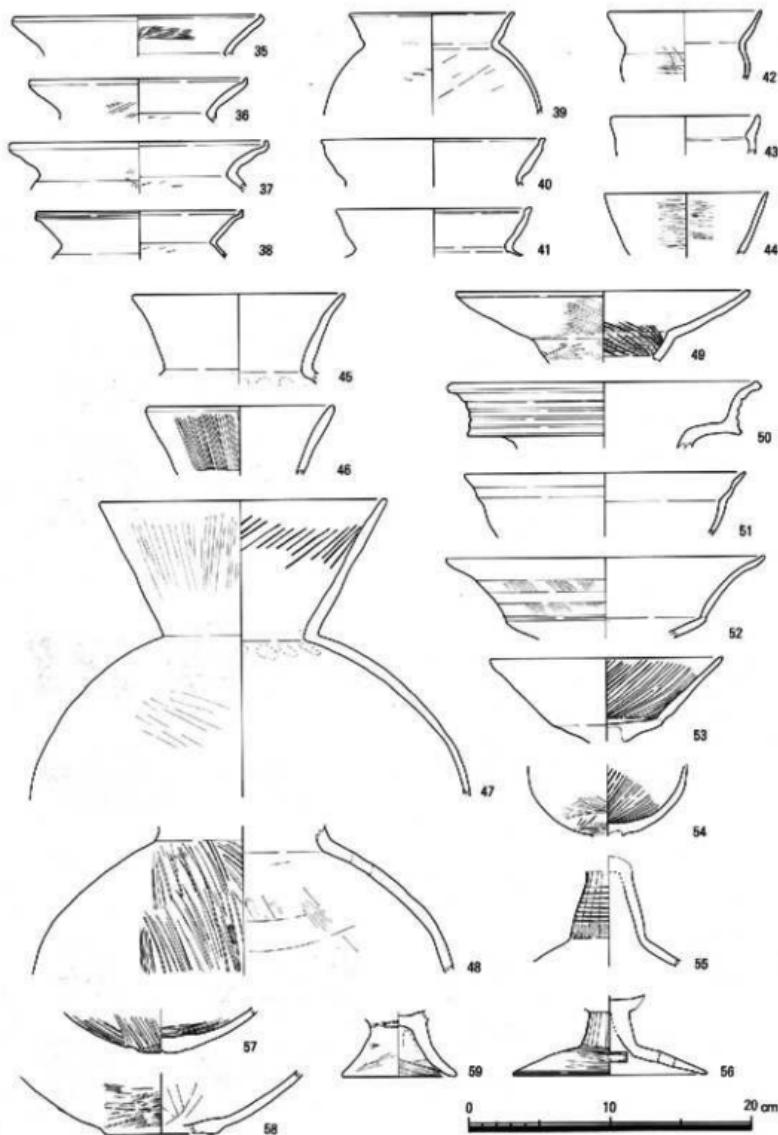
調査区全景（西から）



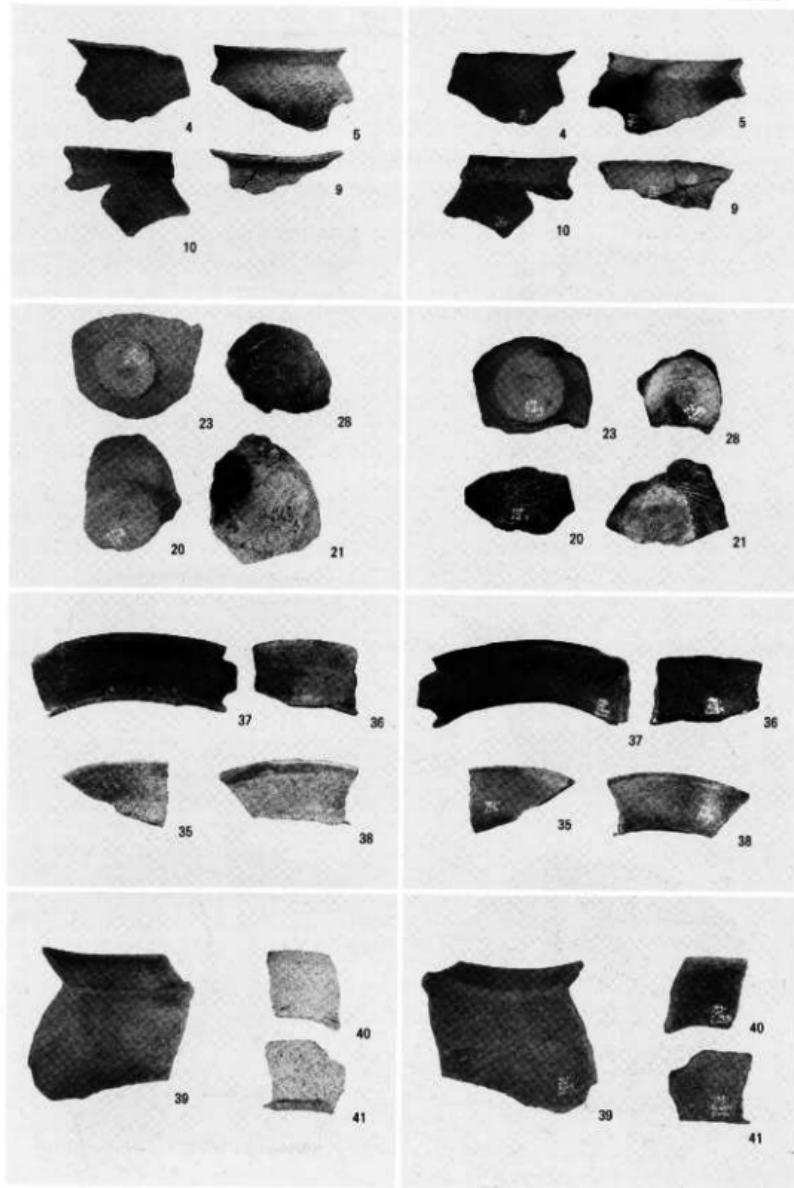
SK-2 検出状況（南から）



昭和57年度・第1次調査出土遺物実測図1



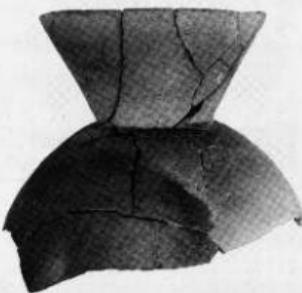
昭和57年度・第1次調査出土遺物実測図 2



昭和57年度・第1次調査出土遺物



30



47



53



54



31



58



59

20 亀井遺跡（第1次調査）

調査地 八尾市南亀井町1丁目4

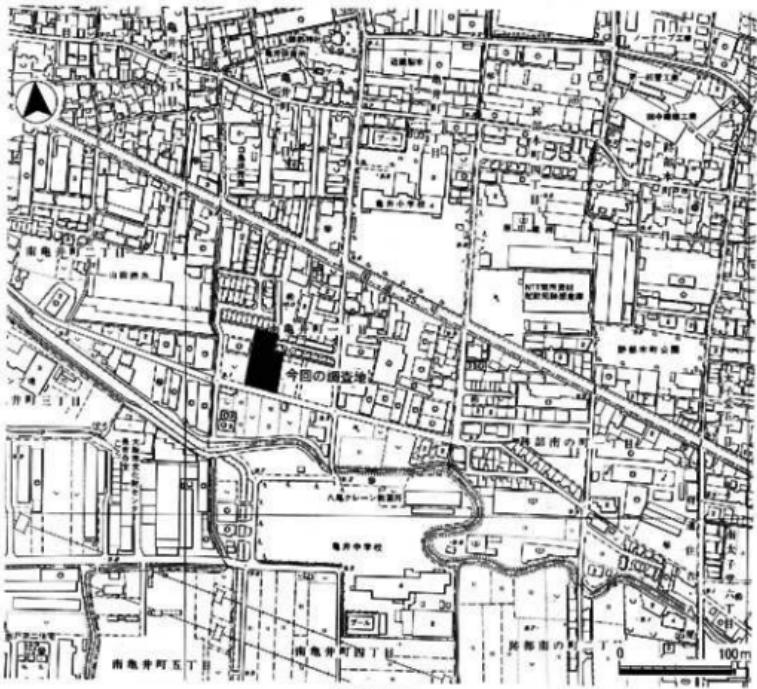
調査期間 昭和63年11月7日～昭和63年11月24日

調査面積 200m²

はじめに

今回の発掘調査は工場建設に伴うもので、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した発掘調査の第1次調査にあたる。

当遺跡は、旧大和川の支流であった平野川流域に広がるもので、関大阪文化財センターによる、近畿自動車道天理－吹田線建設に伴う発掘調査で、弥生時代を中心とする集落が検出されている。



調査概要

調査は、工場建設予定地に10m×20mの調査区を設定した。掘削に際しては、現地表面から2.5mまでは機械で掘削し、以下1.0mまでは人力で掘削した。なお、当初の調査予定では、弥生時代後期の生活面を調査対象にする予定であったが、調査途中で下層に弥生時代中期の包含層を確認した為、弥生時代後期面の調査終了後、調査区内にグリット（2m×3m）を6ヶ所に設定し、下層部分の調査を実施した。調査の結果、現地表下2.8m前後（標高6.2m）付近に存在する淡緑灰色シルト上面で、弥生時代後期の土坑4基（SK-1～SK-4）・溝1条（SD-1）・落込み状遺構1箇所・不明遺構1箇所（SX-1）を検出した（第1調査面）。さらに1m前後下部（標高5.0m）に存在する暗灰色礫混砂質土上面で、弥生時代中期の上器棺墓1基・溝1条（SD-2）を検出した（第2調査面）。

まとめ

今回の調査では、弥生時代中期前葉～後期の遺構を検出することができた。弥生時代中期前葉の遺構は、土器棺と溝で、その形状からみて方形周溝墓である可能性が高く、この時期この地域が墓域であったことが確認された。また、弥生時代後期の生活面を検出した調査面は、近畿自動車道に伴う調査で検出されている調査面より、2m程度高い微高地に位置していることが確認された。



SK-1 検出状況（西から）

20 烈井遺跡



第1調査面全景（南から）



第2調査面 SD-2 棟出状況（南から）

21 やおみなみ 八尾南遺跡（第11次調査）

調査地 八尾市西木の本1丁目48・49

調査期間 昭和63年7月19日～昭和63年7月26日

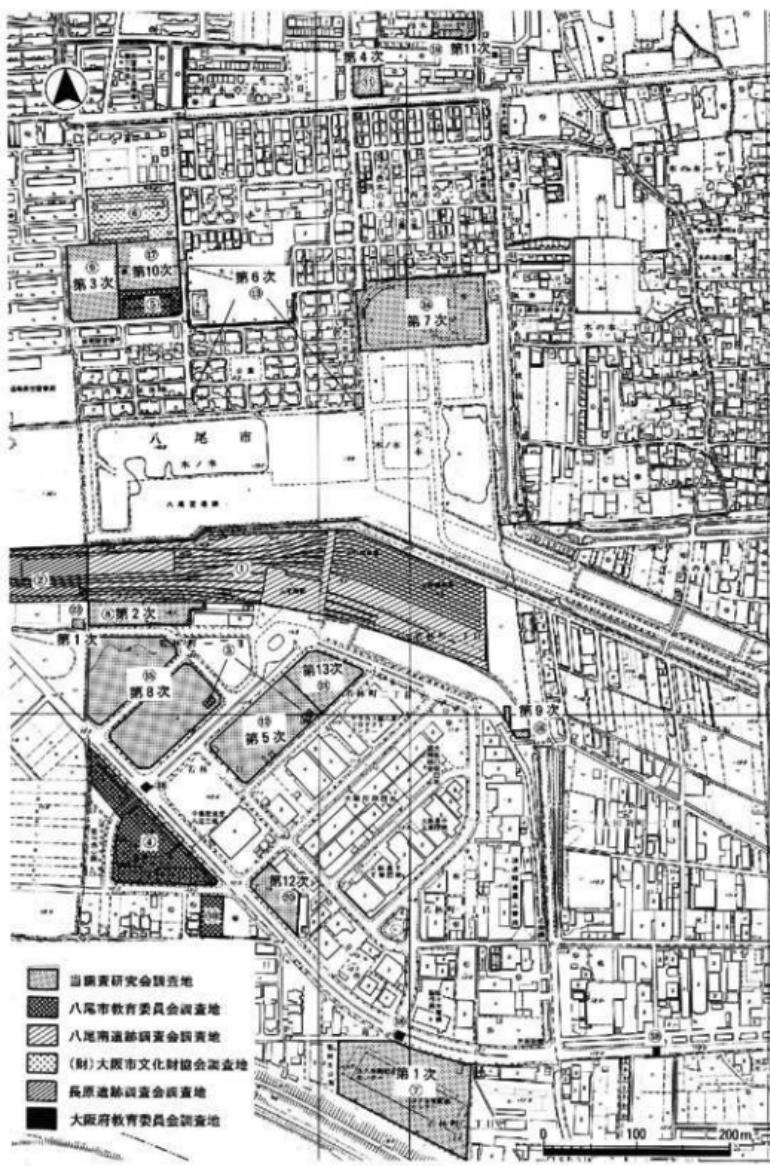
調査面積 100m²

はじめに

八尾南遺跡は、八尾市木の本・西木の本・若林町に所在する、旧石器時代から中世に至る複合遺跡であり、昭和53年～54年に実施された地下鉄谷町線建設に伴う事前調査をはじめとする数次に亘る調査により、その実態が明らかになりつつある。

八尾市西木の本1丁目48・49番地内において、下村清之祐氏より、共同住宅建築を計画している旨の届出が八尾市教育委員会文化財室に提出された。文化財室では当地が八尾南遺跡の北周辺の発掘調査一覧表

番号	調査主体	調査期間	文 献	発行
①	八尾南遺跡調査会	53年4月～55年3月	八尾南遺跡	1981.3
②	長原遺跡調査会	53年7月～54年8月	大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ	1982
③	八尾市教育委員会	55年6月	八尾市南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要 八尾市文化財調査報告6	1981.3
④	同 上	55年12月～56年1月	—	—
⑤	同 上	56年6月～56年7月	八尾市埋蔵文化財発掘調査報告1980・1981年度 (附)八尾市文化財調査研究会報告2	1983.3
⑥	(附)大阪市文化財協会	57年12月～58年3月	—	—
⑦	当調査研究会(第1次)	58年2月～58年6月	昭和58年度事業概要報告 (附)八尾市文化財調査研究会報告5	1984.4
⑧	同 上(第2次)	59年1月～59年7月	昭和59年度事業概要報告 (附)八尾市文化財調査研究会報告7	1985.4
⑨	同 上(第3次)	59年7月～60年9月	八尾市埋蔵文化財発掘調査報告明治と昭和年度 (附)八尾市文化財調査研究会報告6	1985.3
⑩	八尾市教育委員会	50年7月	八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書 八尾市文化財調査報告11	1985.3
⑪	当調査研究会(第4次)	59年10月～59年11月	昭和59年度事業概要報告 (附)八尾市文化財調査研究会報告7	1985.4
⑫	同 上(第5次)	61年9月～62年7月	八尾市文化財調査研究会報告10 (附)八尾市文化財調査研究会報告16	1988.12
⑬	同 上(第6次)	62年1月	昭和61年度事業概要報告 (附)八尾市文化財調査研究会報告14	1987.12
⑭	同 上(第7次)	62年2月～62年7月	八尾市文化財調査研究会報告9和62年度 (附)八尾市文化財調査研究会報告15	1988.12
⑮	同 上(第8次)	62年5月～63年1月	同上	—
⑯	同 上(第9次)	62年7月～62年8月	同上	—
⑰	同 上(第10次)	62年7月～62年10月	同上	—
⑱	大阪府教育委員会	62年4月～62年6月	八尾南遺跡・旧石器出土第3地点	1989.3
⑲	当調査研究会(第11次)	63年7月	今回報告	—
⑳	同 上(第12次)	63年8月～63年10月	同上	—
㉑	同 上(第13次)	63年9月～元年2月	同上	—
㉒	同 上(第1次)	63年8月	同上	—



調査地周辺図

辺に位置し、また西接する4次調査地では、古墳時代の溝などの遺構が検出されている事から、試掘調査を実施し、遺構及び遺物包含層の有無の確認を行った。その結果、G L -2.5m前後に弥生時代から古墳時代の遺物包含層を確認したため、予想される地下遺構の保存について、事業主側と再三協議を行った。しかし、建物の構造上、地下遺構の破壊はまぬがれず、共同住宅建設に先立って記録保存を行うことを決定し、さらに協議の間、事業主側と行政側の間に相当の意見の食い違いがあり、調査は建物面積600m²に対し、東側の100m²のみに留まらざるを得なかった。また期間も1週間と限定され、さらに、作業員や、調査機材などについても大幅に制限された。

調査方法

発掘調査は、申請建物の東側100m²のみを対象として行った。調査地は先述の通り4次調査に西接する場所で、文化財室が実施した試掘調査の成果からも、4次調査地とはほぼ同様の土層堆積が考えられた事から、包含層である黒灰色粘土上面までを重機にて掘削し、以下4次調査での遺構検出面である緑灰色シルト上面で精査を行うこととした。また、当該地周辺は、砂層の堆積が厚く、湧水により調査区壁面の崩壊が予想されたため、調査区内に板をめぐらすこととした。その為、土層図の作成に支障をきたす結果となり、本書における上層図は、模式図と一部の断面図のみに留まらざるを得なかった。

また、包含層下の調査については、調査期間が非常に短く、さらに1次調査の遺構検出面について何の検証もせず信用したため、結果として遺構面を認認し、削平することとなってしまった。これについては後章で詳しく述べ、お詫びしたいと思う。

調査の概要

1) 基本層序

当調査区では、最終確認グリット最下部まで、18層の堆積を認める事が出来た。

地表下1mまでは造成時の盛土で、2層は造成以前の耕作土であり、厚さ約20cmを測る。



調査区平面図

第3層は灰褐色粘質土で厚さ約20cm。4層は褐色粗砂で、層厚は30cmで湧水層である。

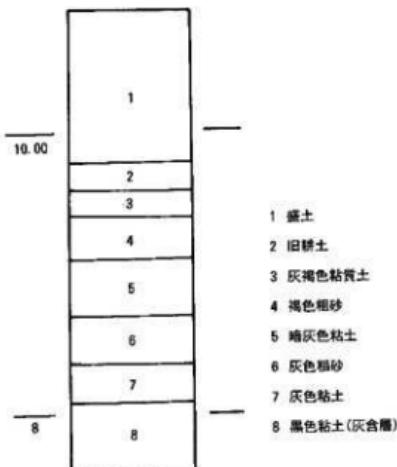
以下、5層暗灰色粘土、層厚40cm、6層灰色粗砂、層厚約30cm、7層灰色粘土、層厚約25cmで堆積しており、遺物はいずれの層でも確認できなかった。8層の黒灰色粘土、9層の灰黑色粘質シルトは、いずれも層厚30cm程度で、弥生時代後期～庄内式期の遺物を包含する。10～12層は、長原遺跡における上層区分でN G 8層に相当する土層で、緑灰色シルト層を基調とし、層厚最大60cmを測る。13層の青灰色微砂混粘土以下は、14層灰褐色粘質土、15層黒灰色粘土、16層明灰褐色粘土、17層青灰色粘質微砂の順で堆積し、これらは植物遺体を多量に含む上層で最終確認上層は植物遺体を含まない18層青灰色微砂混じりシルトである。遺物は、15層からは時期こそ不明であるが、胎土に粗い砂粒を多量に含む土器片1片が出土したのみである。

また、これらの層は、先に挙げた長原遺跡における土層区分によると、15層=NG 9 C層、17層=NG 10層、18層=NG 11層に相当するという御教示を得た。
註1

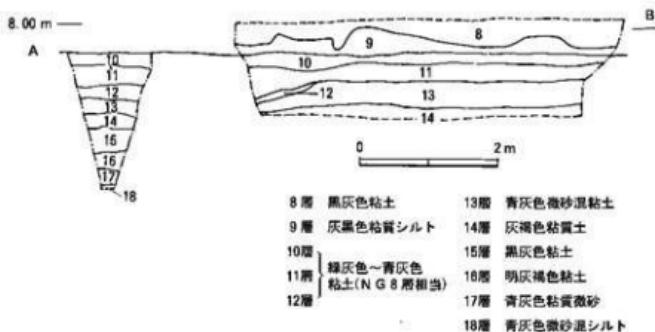
2) 包含層内における遺物出土状況について

今回の調査については先述の通り、遺構面を削平するという大失態を起こしてしまったため、出土した遺物についても明確に評価を与える事が出来ず、発掘調査にたずさわる一員として、ただただ恥じるばかりである。筆者がここで出来るのは調査中に知り得た見知りを出来るだけ詳細に報告する事だけであり、以下の文章を報告にかえたいと思う次第である。

今回確認した包含層は、調査開始の段階において一層であると認識していたが、調査中に2層に分層される事が明らかになり、両者は色調は似通っているものの、上質においては異なるもので、多少検討さえすれば、違いが認識できるものである。また、遺物の密度は、包含層の



基本層序模式図

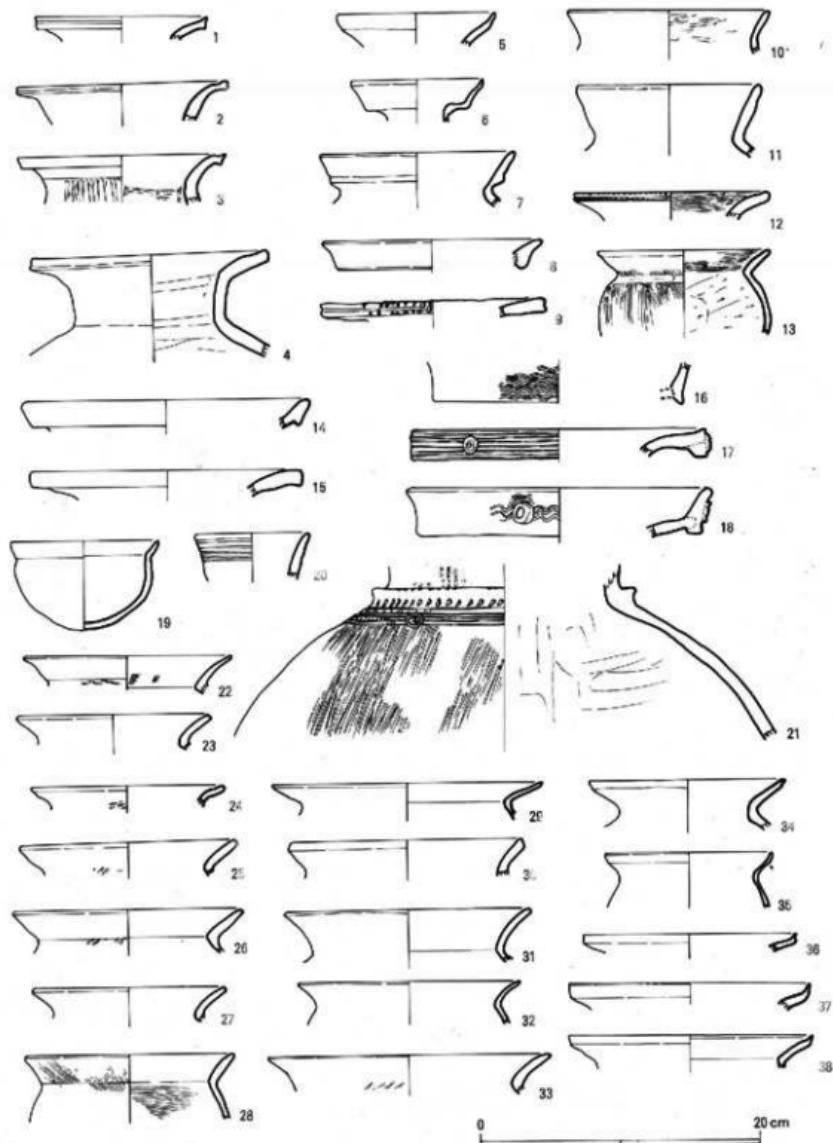


上部、つまり8層の黒灰色粘土ほど高く、さらに遺物が集中して出土する傾向を示し、その遺物の集中部が断面図上で9層の落ち込んだ部分にあたる事が、調査終了直前に判明した。しかし、断面に表れている落ち込みは、溝などの遺構になる可能性は極めて薄く、自然地形の落ち込んだ部分に上器が堆積したものと考えられる。

次に出土遺物に見られる時期幅と層位の問題についてであるが、遺物は大まかに弥生時代後期前半・後半・庄内に分けられるが、後期後半の土器と庄内期の土器は、同じ8層から出土しており、この事は筆者自身が掘削した際に両者が同一層位内のはば同じレベルから出土しているのを確認している為、まず間違いあるまい。しかし、後期前半の土器については、8層に伴うものが、9層に伴うものは判定しかねる。

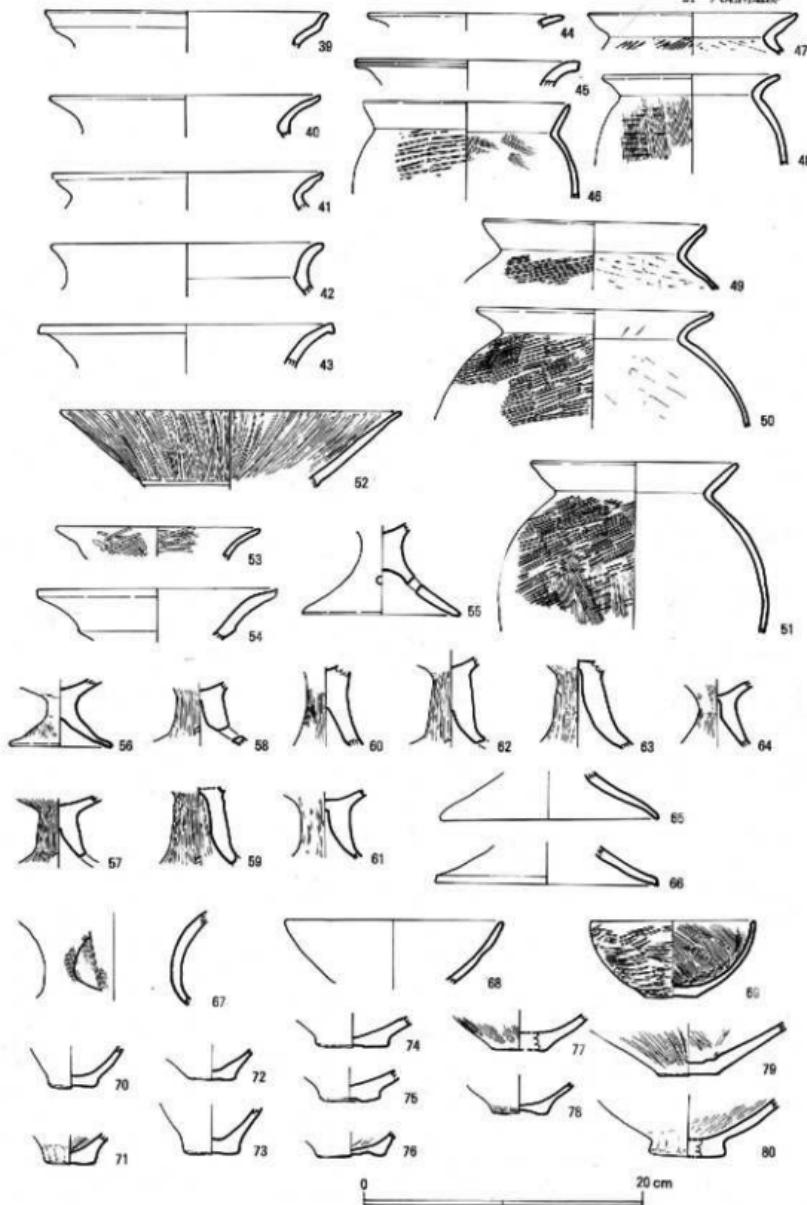
最後に調査地内に遺構が存在したかについての問題と包含層の性格についてであるが、遺構の有無については、遺構面である9層が層厚最大40cmとさほど厚くないため、溝や住居跡などの遺構が存在したとすれば、10層上面でも何らかの痕跡は残る筈であり、それが確認されなかつたという事は、たとえ遺構が存在したとしても、比較的浅い遺構が、散在していたにすぎないであろう。また、包含層の形成については、含まれる土器の量が極めて多く、また、ほとんど摩耗していない事から、当調査地の極めて近い場所に立地する集落からの流入であると考えられ、その場所は、10層上面が若干南から北へ傾斜する事や、IH石器時代から現代に至るまで安定した土地である羽曳野丘陵が存在する事から、本調査地の南側であった可能性が高い。

註1 神戸市文化財協会 高橋工、清水利明氏の御教示による。

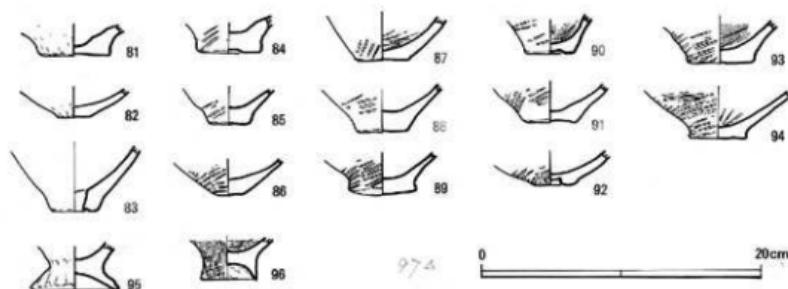


包含層出土遺物実測図 1

21 八尾陶遺跡



包含層出土遺物實測圖 2



包含帶出土遺物実測図 3

出土遺物観察表

遺物番号	器種	法縦 (cm) 器高	成形・調整柱法	色調	胎土	構成	保存状況
1	広口壺	12.2	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面縁部を肥厚させ、口縁部外面に浅い沈線状の凹みが残る。	乳白色	密	良好	口縁部% 底
2	広口壺	14.8	口縁部内外面ヨコナデと思われる。口縁部は面を成し、沈線状の凹みが残る。	乳褐色 ↓ 乳赤褐色	やや粗 長石(0.1 ~1.5mm)石 英(1~3 mm)を含む。	良好	口縁部% 底
3	広口壺	10.8	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面ハケナデが認められる。頸部外面ヘラミガキ。口縁部外面情報を重下させ、面を成す。	淡茶灰色 ↓ 淡灰褐色	やや粗	良好	口縁部% 底
4	広口壺	16.8	口縁部内外面ヨコナデ。頸部および体部外面の一帯にヘラミガキが認められるが不明瞭。頸部および体部外面に弱いヘラケズが認められる。口縁部外面に粘土接着痕道存。	淡灰茶色 ↓ 淡灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~1 mm)を含む。	良好	口縁部のう 道存。
5	広口壺	11.2	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面に粘土接着痕道存。口縁部外面に浅い沈線状の凹みが2箇所ある。	淡灰茶色	やや粗 長石・石英・ チャート(0. 1~0.5mm) を含む。	良好	口縁部% 底
6	二重口縁壺	9.3	口縁部および頸部内外面ヨコナデ。口縁部と頸部の境に低い段差成す。口縁部外面縁部付近には、浅い沈線状の凹みが残る。	明赤茶色 ↓ 明褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~2 mm)を含む。	良好	口縁部% 底
7	壺	13.8	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面ヘラケズりが認められる。口縁部と頸部の境にヨコナデによる低い凸部が残る。	内面暗灰色 ~淡乳褐色 外表面灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~2 mm)を含む。	良好	口縁部% 底
8	二重口縁壺	15.2	口縁部内外面ヨコナデ。口縁端部は下方へ垂下し、外面に面を持つ。壺下部の外面には薄く接着痕がみられる。	淡茶灰色	やや粗 長石・石英・ チャート(0. 1~1mm) をわずかに 含む。	良好	口縁部% 底

文物番号	器種	法量 (cm)	口径 (cm)	成形・調整技術	色調	胎土	焼成	備考 遺存状況
9	広口壺?		16.2	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外端部にキザミ目を施した後、中央にへうき沈線を施す。	乳灰茶色	やや粗 瓦石・石英 (0.1~1 mm) を含む。	良好	口縁部%
10	直口壺		14.2	口縁部内面の一部にヘラミガキが認められるが、他は調整不明显。	淡赤褐色 ↓ 乳茶褐色	やや粗 瓦石・石英 (0.1~2 mm) を含む。	良好好	口縁部%
11	直口壺		13.0	口縁部内外面ヨコナデ。体底内面ヒラケズリの後ナデ。体部外端ナデ。	乳赤茶色 ↓ 暗褐色	やや粗 石英・長石 (0.1~2 mm) を含む。	良好	口縁部%
12	広口壺		13.6	口縁部外面ヨコナデ。口縁部内面堅なヘラミガキ。口縁端部は面を持ち、へうき工具による射文文を施した後、沈線状の浅い凹みが認める。	暗褐色 ↓ 淡茶褐色	やや粗 石英・長石 (0.1~1 mm) をわずかに含む。	良好	口縁部に攝 付着 口縁部%
13	壺		12.2	口縁部外面ヨコナデ。口縁部内面ハケナデ。(9本/cm) 体部内面ヘラケズリ。体部外端にハケナデ(9本/cm)を施す。底部はハケナデの後にリコナデを施す。	乳灰茶色 ↓ 乳灰褐色	やや粗 石英・長石 (0.1~1 mm) を含む。	良好	%
14	広口壺?		19.8	口縁部内外面ヨコナデ。口縁端部は下方に垂下し、面を成す。	乳赤茶色 ↓ 淡灰茶色	やや粗	良好	口縁部%
15	広口壺		19.4	口縁部外面板状工具によるヨコナデ。口縁部内面の一部にヘラミガキが遺存。口縁部外面に杭上縁接合痕遺存。口縁端部は画を成し弱いハケナデの痕跡が認められる。	淡茶褐色 ↓ 乳灰白色	やや粗	良好	口縁部%
16	二重口縁壺			口縁部内外面ヨコナデ。口縁端部は上下方へ拡張し、外端に8本/1.0cmを一単位とする複数の横状文を施す。口縁端部は欠損。	内面 乳茶色 外面 乳褐色	滑	良好	口縁部%
17	広口壺		21.0	口縁部内外面ヨコナデ。口縁端部は下方へ垂下し、面を成し、複数の波状文を弱く施した後、円形浮文を施す。	内面 乳灰褐色 外面 乳茶褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~2 mm) をやや多く含む。	良好	口縁部%
18	二重口縁壺		21.0	口縁部内外面ヨコナデ。口縁端部は下方へ垂下し、外端に橢円窓の波状文を施した後に円形浮文を施す。窓部外端の一部にヘラミガキが認められる。	淡茶褐色	やや粗 角閃石・チート・石英・長石・雲母 (0.1~4 mm) を含む。	良好	口縁部%
19	鉢		10.5 6.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ともに調整不明显。	乳茶色	やや粗 長石・石英・雲母(0.1~3mm) を含む。	良好	%以上
20	鉢?		7.9	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外端に深い沈線が6条認れる。	乳白色	やや粗 石英・チート(0.1~0.5 mm) をわざかに含む。	良好	口縁部%
21	二重口縁壺	網 落 最大径 39.0		体部外表面は密なヘラミガキ。体部内面は板状工具によるナデ。体部外端上部に5条のへうき直線文を施した後に円形浮文を配す。窓部は段を有し、下位には逆C字形の剥文突起。	淡茶色	やや粗 長石・石英・雲母(0.1~5mm) を含む。	良好	体部外面に赤色顔料塗布 体部%
22	壺		14.6	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部内面の一部にヘラミが遺存。強部内面ヘラケズリ。窓部外端の一部にタキ目が遺存。	暗褐色 ↓ 淡茶褐色	やや粗 長石・角閃石 (1~0.5 mm) を含む。	良好	口縁部%

遺物番号	器種	法量 (cm)	口径 高さ	成形・調整技術	色調	胎土	焼成	備考 遺存状況
23	壺	13.4		口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面の一部にヘラケズリが認められる。口縁端部は面を持つ。	淡灰褐色 ↓ 灰褐色	やや粗 長石・石英 チャート・角閃石(0.1~0.5mm)を含む。	良好	口縁部% 口縁部%
24	壺	13.6		口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面の一部にタタキ目が認められる。口縁端部はわずかにつまみ上げ。ゆるやかに面を持つ。	淡灰灰色	やや粗 長石・石英・ チャート(0.1~2 mm)を含む。	良好	口縁部%
25	壺	15.2		口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面の一部にタタキ目が遺存。	乳灰褐色	やや粗 チャート・石英(0.1~2 mm)を含む。	良好	口縁部外面 に焼付% 口縁部%
26	壺	16.1		口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面へラケズリ。頸部外面の一部にタタキ目が遺存。口縁部外面の一部に粘土接合部が認められる。	淡赤茶色 ↓ 淡乳褐色	やや粗 石英・長石 (0.1~2 mm)を含む。	良好	口縁部%
27	壺	13.6		口縁部内外面ヨコナデ。他は調整不明顯。	淡赤茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~2 mm)を含む。	良好	口縁部%
28	壺	14.8		口縁部内面ヨコナデ。口縁部外面ハケナデ。(8本/cm)。体部内面ハケナデ(12本/cm)。体部外面の一部に平行状のタタキ目が遺存するが、ナデによって削されている。	淡赤茶色	やや粗 石英・長石 (0.1~1 mm)を含む。	良好	口縁部から 体部%
29	壺	19.2		口縁部内外面および頸部外面ヨコナデ。頸部内面はヘラケズリ。	淡赤茶色 ↓ 淡灰茶色	密 長石(0.1 mm)をわずかに含む。	良好	口縁部%
30	壺	16.3		口縁部内外面ヨコナデ。他は調整不明顯。口縁端部はわずかにつまみ上げられる。	乳灰褐色 ↓ 淡黄灰色	密 長石・石英 (0.1mm) をわずかに含む。	良好	口縁部%
31	壺	17.3		口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面は板状工具によるナデ。	淡灰褐色	密 長石(0.5 mm)をわずかに含む。	良好	口縁部内外面 に焼付% 口縁部%
32	壺	15.8		口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面はナデ。頸部内外面の一部に粘土接合部が遺存。	内面 淡赤茶色 外面 暗褐色 → 淡灰色	やや粗 長石・石英 (0.1~2 mm)をやや多量に含む。	良好	口縁部%
33	壺	20.2		口縁部内外面の上位はヨコナデ。口縁部内面ハケナデ以下の一帯にハケナデ(10本/cm)が遺存する。口縁部外面中位以下の一帯にタタキ目が認められる。	淡赤茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~1 mm)を含む。	良好	口縁部%
34	壺	13.7		口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面の一部にハケナデが認められる。頸部外面はナデ。頸部外面の一部に粘土接合部が遺存。口縁端部をわずかに上方へつまみ上げる。	内面 乳灰褐色 ↓ 乳茶灰色 外面 淡灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~2 mm)をやや多量に含む。	良好	口縁部%
35	壺	12.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面は板状工具によるナデ。体部外面はナデ。口縁部は上方へつまみ上げられ、外面は面を成し、複合口縁状を呈する。	淡褐色 ↓ 淡茶灰色	密 長石(0.1 mm)をわずかに含む。	良好	口縁部外面 に焼付% 口縁部%
36	壺?	15.2		口縁部内外面ヨコナデ。口縁端部は上方へつまみ上げられ、外端面を波す。	内面 淡灰褐色 外面 乳灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~1 mm)を含む。	良好	口縁部%

遺物番号	器種	底盤 口径 (cm) 器高	成形・調整技術	色調	胎土	焼成	備考 焼成状況
37	甕?	15.2	口縁部内外面ヨコナデ。口縁端部は上方へ つまみ上げられ、外端面は面を成す。	淡褐色 ↓ 淡赤褐色	やや粗 長石・石英 雲母(0.1 ~1mm)を 含む。	良好	口縁部% 内面% 外端面%
38	甕	17.5	口縁部内外面ヨコナデ。他は調査不明瞭。	淡灰褐色 ↓ 乳灰褐色	古 長石・赤色 酸化鉄(0. 1mm)をわ ずかに含む。	良好	口縁部外面 に焼付着 口縁部%
39	甕	20.0	口縁部内外面ヨコナデ。他は調査不明瞭。	乳灰茶色	やや粗 長石・チャ ート・石英 (0.1~2 mm)を含む。	良好	口縁部%
40	甕	19.2	口縁部内外面ヨコナデ。他はナデ。	暗灰褐色 ↓ 淡茶褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好	口縁部%
41	甕	19.2	口縁部内外面および腹部内外面ヨコナデ。 口縁端部はわずかに上方へつまみ上げられ。 外端面は面を成す。	内面 淡茶灰色 外面 淡灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~1 mm)を含む。	良好	口縁部%
42	甕	19.1	口縁部内外面ヨコナデ。腹部内面へラケズ リ。腹部外面はナデ。	淡灰褐色 ↓ 灰赤茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~2 mm)を含む。	良好	口縁部%
43	甕	20.8	口縁部内外面ヨコナデ。口縁端部は外傾する 面を持つ。	乳灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~1 mm)を含む。	良好	口縁部%
44	甕	14.0	口縁部内外面ヨコナデ。	淡灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~2 mm)を含む。	良好	口縁部%
45	甕	15.8	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部と腹部の縁 に粘土被覆合壁が遺存する。口縁端部外面は 面を成し、ヘラ書き沈線文が刻む。	乳灰茶色 ↓ 淡灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~2 mm)を含む。	良好	口縁部外面 に焼付着 口縁部%
46	甕	14.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面はハケナ デ(15本/cm)。体部外面はタキキ(3条/ cm)。体部内面の一部に指頭圧痕が遺存。 口縁端部は面を持つ。	内面 淡茶褐色 外面 淡灰褐色 淡茶褐色	古 長石・赤色 酸化鉄(0. 1mm)をわ ずかに含む。	良好	%
47	甕	14.8	口縁部内外面ヨコナデ。体部上位内面へラ ケズリ。体部上位外面はタキキ(5条/cm)。 口縁端部はわずかにつまみ上げる。	淡茶灰色	古 長石・赤色 酸化鉄(0. 1mm)をわ ずかに含む。	良好	口縁部%
48	甕	12.7	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面弱いナデ。 体部外面タキキ(3条/cm)を施した後にハ ケナデ(9本/cm)を体部上位より施す。口 縁端部は面を持つ。	内面 淡灰褐色 外面 淡茶褐色 淡茶褐色 ↓ 灰赤茶色	やや粗 長石・チャ ート・石英 (0.1~1 mm)を含む。	良好	%
49	甕	15.8	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面へラケズ リ。体部外面タキキ(4条/cm)。	淡灰茶色 ↓ 乳灰褐色	古 長石(0.1 mm)をわ ずかに含む。	良好	口縁部外面 に焼付着 %
50	甕	15.8	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部内面の一部 に板状工具の仕痕が遺存。体部外面はタキキ。 (4条/1cm)一部にハケナデが遺存。体部内面 の一部に指ナカ跡が認められるが、他はヘラケズリ。	淡茶褐色 ↓ 淡赤茶色	古 長石(0.1 mm)をわ ずかに含む。	良好	%

遺物番号	器種	法量 (cm)	口径 器高	成形・調整技術	色調	胎土	焼成	備考 遺存状況
51	甕		14.6	口縁部外面ヨコナデ。体部内部ヘラケズリと思われるが調整不順歟。体部外面タタキ(4箇/cm)の後ハケナデ(9本/cm)を、体部側付近に施す。	淡灰褐色 1 淡灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好	1/4
52	高杯		24.2	口縁部内外面ヨコナデ。杯部内外ともにヨコナデの後に放射状のラミガキを施す。柄部と柱状部の境にはヨコナデを施し段を成す。	内面 淡灰褐色 外面 暗灰褐色 淡灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~2 mm)をわずかに含む。	良好	杯部%
53	高杯		14.8	口縁部内外面は横方向の密なヘラミガキ。口縁端部はヨコナデを施す。	淡灰褐色 1 淡灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好	口縁部%
54	高杯		17.2	口縁部および杯部内外面はヨコナデ。口縁端部上方へつまみ上げる。口縁部と杯部の境に粘土接合痕が遺存し、裏半段を成す。	内面 淡灰褐色 淡灰茶色 外面 淡灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好	杯部%
55	高杯	径 11.4		表面外側の一部にハケメが認められるが、内外面とともに調整不順歟。柄部上位に透し孔が4孔穿つ。標部は丸く納める。	淡灰褐色 1 乳灰茶色	粗 長石・石英 チャート(0. 1~2 mm) を含む。 多量に含む。	良好	標部%
56	高杯	径 7.4		柱状部内外面および底面内面、柱状部外面にナデを施す。標部はハケナデ(1本/cm)。	乳灰褐色 1 乳灰白色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好	対部以上
57	高杯			ほぼ円錐の柱状部である。柱部および柱状部、標部上位の外表面はいずれも滑らかヘラミガキ。柱状部内面にぼり目が遺存。底面内面および標部内面はナデ。透し孔は一孔のみ。	乳灰褐色 1 乳灰白色	やや粗 石英・チャート(0.1~1 mm)を含む。	良好	柱部の一部 および柱状部
58	高杯			中央に近い柱状部である。柱底部はナデ。柱状部一部は密なヘラミガキ。底部の一部にハケナデが認められる。標部上位の四方に円形の透し孔を穿つ。	乳灰褐色 1 淡灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~1 mm)を含む。	良好	柱状部およ び柱部の 一部
59	高杯			中央の柱状部である。柱状部内面は弱いナデ。柱状部外面はハケナデ(1本/cm)。透し孔は観察できない。	淡赤茶色 1 暗灰褐色	粗 長石(0.1 mm)をわずかに含む。	良好	柱状部およ び柱部の 一部
60	高杯			ほぼ中空の柱状部である。柱状部内面は弱いナデ。柱状部外面はハケナデ(9本/cm)。透し孔は観察できない。	淡赤茶色 1 乳灰褐色	粗 長石・チャート(0.1 mm)をわずかに含む。	良好	柱状部のみ
61	高杯			中空の柱状部である。柱状部外面の一部にヘラミガキが認められるが、調整不順歟。底はナデと思われる。標部内面の一帯にラケズリが認められる。透し孔は観察できない。	淡褐色 1 淡灰褐色	やや粗 長石・石英・ 雲母・角閃石 (0.1~0.5 mm)を含む。	良好	柱状部のみ
62	高杯			ほぼ中空の柱状部である。柱状部外面に密なヘラミガキを施す。柱状部および標部内面は弱いナデ。標部上位の四方に透し孔を穿つ。	乳灰褐色 1 淡灰茶色	粗 長石(0.1 mm)をわずかに含む。	良好	柱状部およ び柱部の 一部
63	高杯			中空の柱状部である。柱状部内面はナデ。柱状部外面は密なヘラミガキを施す。透し孔は一孔のみ標部上位にわずかに認められる。	乳灰褐色 1 灰褐色	やや粗 長石・石英・ チャート(0. 1~2 mm) を含む。	良好	柱状部のみ
64	高杯			中央に近い柱状部である。柱状部内面の一部にハケ目が認められるが、他のはナデ。柱状部外面にヘラミガキを施す。杯底部はナデ。透し孔は観察できない。	淡灰茶色	粗	良好	杯底部およ び柱状部の み

遺物番号	器種	法規 (cm)	口徑 底径	成形・調整技法	色調	熱上	焼成	備考 現存状況
65	高杯			下外方へ広がる高杯の部である。底端部は丸く削める。底端部はヨコナデ。他はヘラミガキと思われるが調整不明瞭。透し孔は難窺できない。	乳灰茶色 1 乳灰茶色	やや粗 長石・石英 雲母(0.1~0.5mm)をわずかに含む。	良好	底部のみ
66	高杯		底径 15.6	下外方へ広がる高杯の部である。底端部は面を持つ。底端部はヨコナデ。概部外面の一帯にヘラミガキが認められる。他は内外面ともにナデ。透し孔は一孔のみ観察できる。	淡灰褐色	やや粗 長石・石英・ 雲母(0.1~0.5mm)をわ ずかに含む。	良好	底部のみ
67	器台			瓶内部ナデ。瓶外部の一帯にハケメが認められるが調整不明瞭。瓶外部に底D字形のヘラ状工具による記号文?が認められる。	淡灰褐色	やや粗 長石・石英・ チャート(0.1~3mm)を 多量に含む。	良好	瓶外部のみ
68	鉢	15.3		口縁部内外面ヨコナデと思われる。体部内外面はヘラミガキと思われるが調整不明瞭。	淡灰褐色 1 淡灰茶色	やや粗 石英・長石・ チャート(0.1~0.5mm)を含む。	良好	体部のみ
69	鉢	11.8	5.4	口縁部および体部内面ハケナデ(8本/cm)、外底面ヨコナデ。口縁端部にナデを施す。	内面 乳灰茶色 外面 乳灰茶色	やや粗 長石・石英・ チャート(0.1~2mm)を含む。	良好	%
70	甕		底径 3.4	底部内面は板状工具によるナデ。工具痕が遺存する。底部外面は指頭圧成形後ヘラミガキを施すが、磨耗のため調整不明瞭。外底面はナデ。	乳灰茶色 1 乳灰茶色	やや粗 石英・チャ ート・長石 (0.1~1mm)を含む。	良好	底部のみ
71	甕		底径 3.6	底部内面はハケナデ(9本/cm)。底部外面はナデ。底部外側面に指頭圧成形が遺存。外底面はナデ。	内面 乳灰茶色 外面 淡灰茶色 1 乳茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~1mm)を含む。	良好	底部のみ
72	甕?		底径 3.1	底部内外面および外底面はナデ。底部外側面の一帯にヨコナデが認められる。	暗灰褐色 1 淡灰褐色	面 長石(0.1mm)をわ ずかに含む。	良好	底部のみ
73	甕		底径 3.8	底部内面板状工具によるナデ。工具痕が遺存する。底部外面は指頭圧成形後ナデを施す。外底面ナデ。	内面 淡灰褐色～ 淡灰茶色 外面 乳灰茶色～ 淡灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~1mm)を含む。	良好	底部のみ
74	甕		底径 5.2	底部内面は板状工具によるナデ。一部に工具痕が遺存。底部外面はナデと思われるが、一部にヘラ状工具の仕 hakkが認められる。外底面はナデ。	内面 乳灰茶色 外面 淡灰褐色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5mm)を含む。	良好	底部のみ
75	甕		底径 4.2	底部内面は板状工具によるナデ。一部に工具痕が遺存。底部外面は指頭圧成形後、ナデを施す。外底面はナデ。外底面に粘土接合痕が遺存。	内面 淡灰褐色 外面 淡灰茶色	やや粗 長石・石英・ 雲母・チャー ト(0.1~0.5mm)を含む。	良好	底部のみ
76	甕		底径 5.0	底部外面および外底面ナデ。底部内面は板状工具によるナデ。工具痕が遺存する。	乳灰茶色 1 淡灰茶色	やや粗 石英・長石・ チャート(0.1~0.5mm)を含む。	良好	底部のみ
77	甕?		底径 3.8	底部内面板状工具によるナデ。工具痕が遺存する。底部外面はハケナデ(9本/cm)。外底面はナデ。	淡灰茶色 1 淡灰褐色	やや粗 石英・長石 (0.1~1mm)を含む。	良好	底部のみ
78	甕		底径 3.9	底部内面ナデ。底部外側面の一帯にハケナデが認められるが、他はナデ。底部外底面にヘラ状工具の仕 hakkが、不定方向に遺存する。	内面 淡灰茶色 外面 乳灰茶色 1 淡灰茶色	やや粗 長石・チャ ート・石英 (0.1~1mm)を含む。	良好	底部のみ

21. 八尾南遺跡

遺物番号	器種	法量 (cm)	口径 器高	成形・調整柱法	色調	胎土	焼成	備考 保存状況
79	壺			底部内面の一部に板状工具による深いナデが遺存。底部外面は、側面および底面外底面はナデ。	底深4.5 淡灰茶色 淡灰褐色	1 長石・石英・チート(0.1~2mm)をわずかに含む。	やや粗 良好	底部のみ 部分
80	壺		底径5.4	底部内面は密なヘラミガキ。底部外面は、外側面の一部にハケナデが認められるが、他のナデ。底面外側面に指頭圧痕が遺存。	内面 暗灰褐色 淡灰褐色 外側面 淡灰茶色	1 長石・石英(0.1~1mm)をわずかに含む。	やや粗 良好	底部のみ
81	壺		底径5.0	底部内面に板状工具による圧痕が遺存。底部外面は指頭圧痕の後に、上位はハケナデ。下位にヨコナデを施す。底部外側面に指頭圧痕。粘土接着合板遺存。外底面はナデ。	内面 淡灰褐色 外側面 淡灰茶色	1 長石・石英(0.1~1mm)を含む。	やや粗 良好	底部のみ
82	壺		底径2.4	底部内底面に板状工具による圧痕が遺存するが、他はナデ。底部外面は一部にヘラミガキが認められるが調査不明瞭。外底面はナデ。	内面 淡灰褐色 外側面 淡灰茶色	1 石英・長石(0.1~1mm)をわずかに含む。	良好	底部のみ
83	壺	底部有孔 上器	底径3.6	底部内面の一部に板状工具による圧痕が遺存するが、他は調査不明瞭。底面に径1.8cmの円孔を施前省内から外へ穿つ。外底面に粘土接着合板遺存。	内面 乳灰茶色 外側面 淡灰茶色	1 石英・チート(0.1~1mm)を含む。	やや粗 良好	底部のみ
84	壺		底径4.7	底部内面の一部に板状工具による圧痕が遺存するが、他はナデと認われる。底部外側面および外底面の一部はタキ(3条/cm)。底部外側面の一部はヨコナデによりすり削されている。	内面 淡灰茶色 外側面 淡灰茶色	1 長石・石英(0.1~3mm)をやや多量に含む。	やや粗 良好	底部のみ
85	壺		底径2.8	底部内面ナデ。底部外側タキ(3条/cm)。一部のタキをすり削している。外底面ナデ。	内面 乳灰茶色 外側面 淡灰茶色	1 石英・チート(0.1~2mm)をわずかに含む。	良好	底部のみ
86	壺		底径2.3	底部内面は板状工具によるナデ。T.工具が遺存。底部外側はタキ(4条/cm)。外底面にタキ印が遺存。	内面 乳灰茶色 外側面 暗褐色	1 長石・石英・チート(0.1~0.5mm)を含む。	やや粗 良好	底部のみ
87	壺		底径3.8	底部内面は板状工具による深いナデ。T.工具が遺存する。底部外側の一部にタキ印が遺存するが、他のナデ。	内面 乳灰茶色 外側面 淡灰茶色	1 長石・石英・チート(0.1~1mm)を含む。	やや粗 良好	底部のみ
88	壺		底径3.8	底部内面は板状工具によるナデ。工具痕が遺存する。底部外側は一部にタキ(3条/cm)が認められるが、すり削されている。外底面はナデ。	内面 淡灰褐色 外側面 暗褐色	1 長石・石英(0.1~2mm)を含む。	やや粗 良好	底部のみ
89	壺		底径4.7	底部内面および外底面はナデ。底部外側はタキ(5条/cm)。経部外側面に底部の粘土が押しつぶされて巻き上がりしている。	内面 淡灰茶色 外側面 暗褐色 底面 淡灰茶色	1 長石(0.1mm)をわずかに含む。	良好	底部のみ
90	壺		底径3.8	底部内面は板状工具によるナデ。一部にヒカノ(12本/cm)が認められる。底部外側はタキ(2条/cm)を施すが外側面の一部をすり削す。外底面はナデであるが、中央に木型痕が遺存。	内面 乳灰茶色 外側面 淡灰褐色	1 長石(0.1mm)を含む。	良好	底部のみ
91	壺		底径3.8	底部内面はナデ。底部外側はタキ(4条/cm)。外側面は近づく部ですり削されている。外底面に板状工具による圧痕が強く遺存している。	内面 淡灰茶色 外側面 灰褐色 底面 淡灰茶色	1 石英(0.1mm)をわずかに含む。	良好	底部のみ
92	壺		底径3.6	底部内面ナデ。底部外側はタキ(4条/cm)。外底面はナデ。外底面中央は薄み、輪台状を呈する。	内面 淡灰茶色 外側面 乳灰茶色	1 長石・石英(0.1mm)をわずかに含む。	良好	底部のみ

遺物番号	器種	法算 口径 (cm)	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考 焼成状況
93	甕	底 径 4.6	底部内面は板状工具によるナデ。ハケ目は(10本/cm)認められる。底部外表面はタタキ(4条/cm)。外底面はナデであるが、粘土組接合が一部に遺存する。	灰茶色 ↓ 灰赤茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~1mm) をやや 多量に含む。	良好	底部のみ
94	甕	底 径 4.1	底部内面は板状工具によるナデ。工具痕が遺存する。底部外表面はタタキ(4条/cm)。外底面はナデ。	内面 板状 灰 色 外表面 茶灰褐色 灰赤茶色	密	良好	底部のみ
95	台付鉢?	基 部 6.4	脚台部内外面とともにナデ。脚台部外表面に指輪圧痕存。脚台部内面に粘土組接合痕遺存。	淡灰褐色 ↓ 淡灰茶色	密	良好	脚台部のみ
96	台付鉢?	基 部 4.0	脚台部内面は指輪圧成後深いナデ。指輪圧痕が遺存する。その他は、密なラミガキ。	淡灰茶色 ↓ 乳茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~1mm) を含む。	良好	脚台部のみ
97	直口甕	8.6	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部はヨコナデによってわずかに内脣している。瓶部内面は板状工具によるヨコナデ。瓶部外表面は密なヘラミガキ。瓶部内面下位に粘土組接合痕遺存。	淡灰茶色 ↓ 乳茶色	やや粗 長石・石英 (0.1~1mm) を含む。	良好	口縁部のみ



調査区全景（東から）



3



21



4



34



7



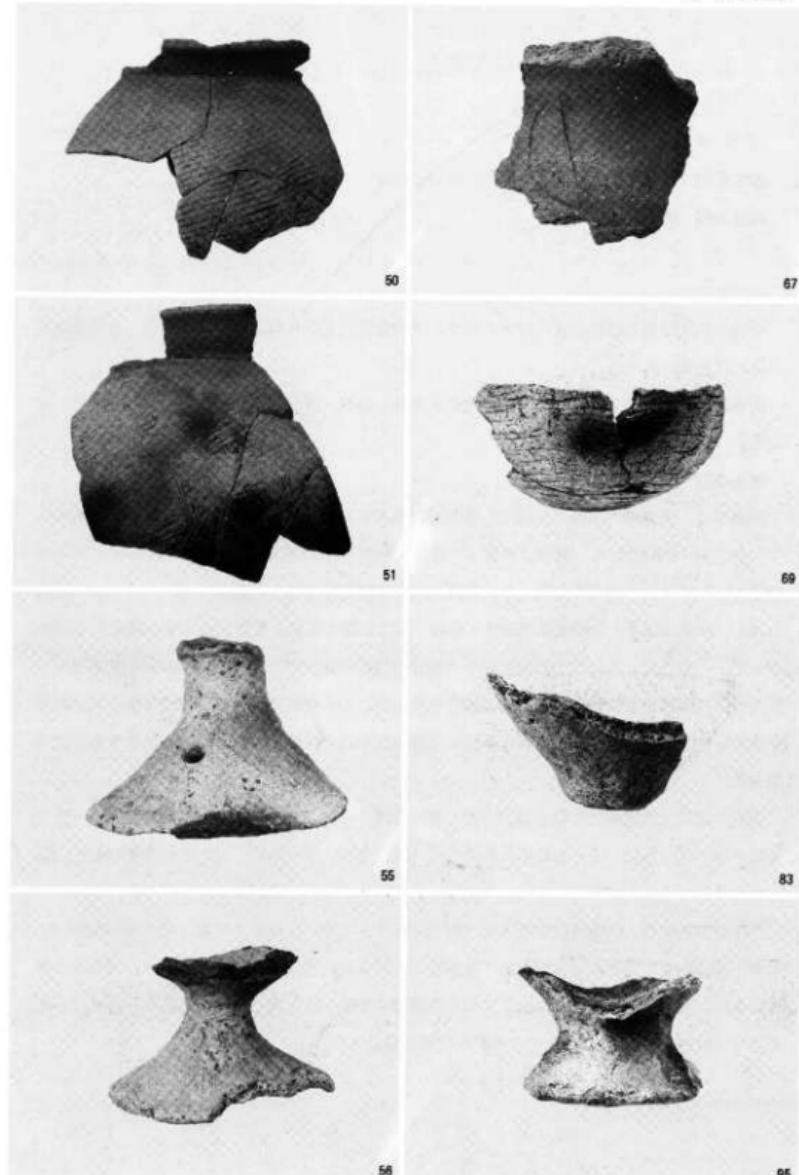
46



11



47



包含層出土遺物

22 八尾 南遺跡（第12次調査）

調査地 八尾市岩林町2丁目174

調査期間 昭和63年8月29日～昭和63年10月21日

調査面積 860m²

はじめに

今回の発掘調査は店舗建設に伴うもので、当調査研究会が八尾南遺跡内で実施した発掘調査の第12次調査にあたる。

調査地点は、昭和61年度に当調査研究会が実施した第5次調査地から南東約100m地点にある。

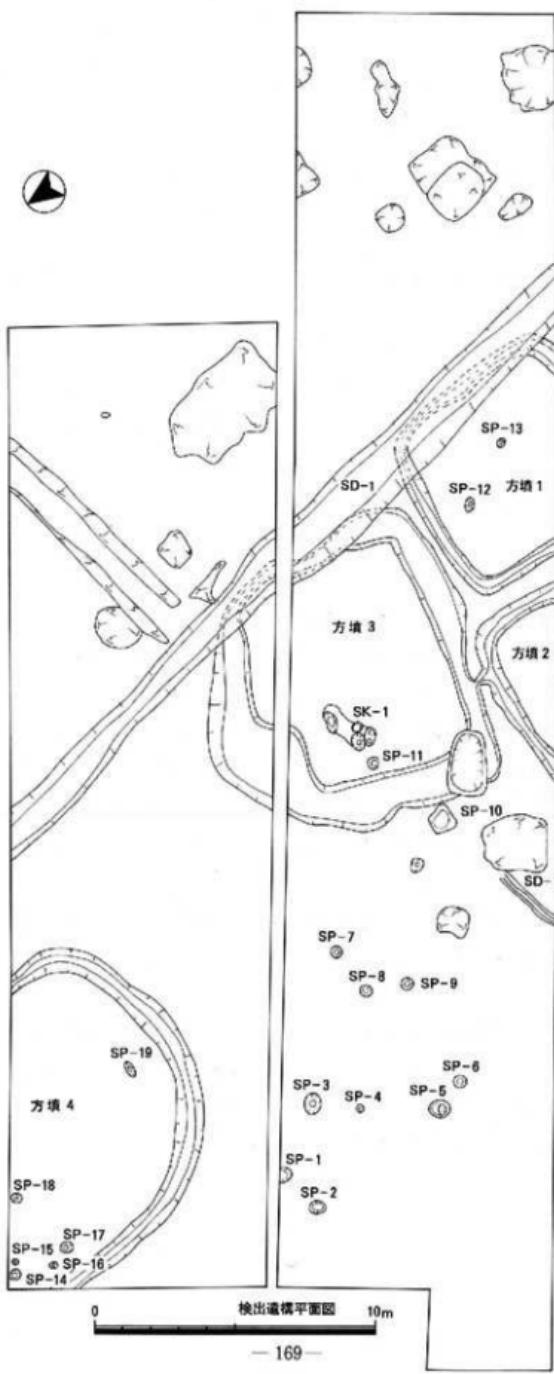
調査概要

調査では、調査地の南側と北側に、東西方向のトレーナー2本（南調査区5×55m・北調査区5×41.5m）を設定した。掘削にあたっては、現地表下1.2m前後迄を機械で掘削し、以下は層理に従って人力で掘削を実施した。南調査区から調査を実施した結果、表土下1.2m（標高11.3m）前後に存在する淡灰茶色細砂～中砂上面で古墳の周溝と推定される溝状遺構を3条検出した。このため、これらの調査経過を市教育委員会に報告した結果、南調査区と北調査区の間を含めた全域を調査対象とする旨の報告を受けた。このため調査途中で調査面積および調査期間を変更した。なお、掘削土量の関係から調査区を二分（南調査区・北調査区）する方法を取った。

調査の結果、古墳時代中期末葉の方墳1基（方墳1～方墳4）・土坑1基（SK-1）・上器集積・溝1条（SD-1）と時期不詳の小穴19個（SP-1～SP-19）と里界溝を検出した。

まとめ

今回の調査では、古墳時代中期末葉（陶邑編年I～4期）に比定される方墳4基を検出した。なお、同時期に比定される古墳が第1次調査⑦・第8次調査⑮で検出されており、同時期の墓域の存在が明らかになった。なお、これらの墓域を構成したと考えられる集落が、第8次調査（⑯）で検出されており、両者の有機的な関係が推定されよう。





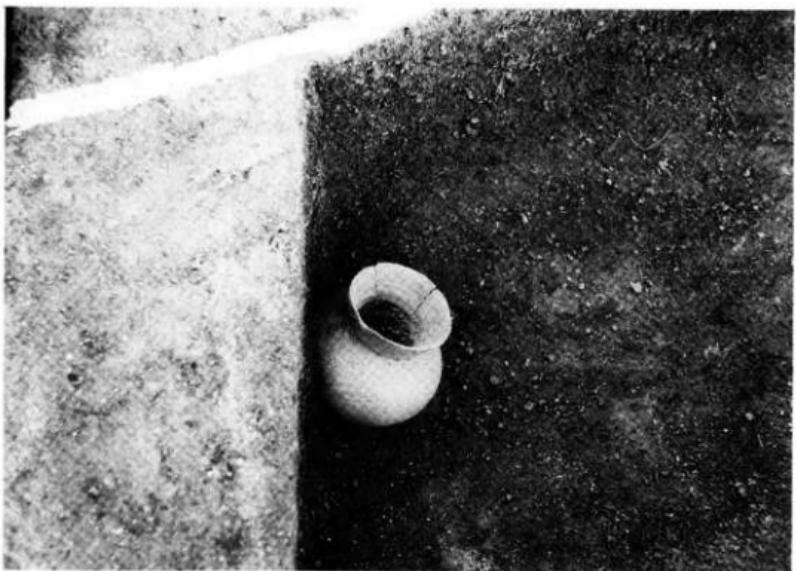
北調査区全景（東から）



南調査区全景（東から）



土器基壙検出状況（南から）



方墳 2—東周溝内遺物出土状況（東から）

23 八尾 南遺跡（第13次調査）

調査地 八尾市若林町1丁目76-3

調査期間 昭和63年9月14日～平成元年2月25日

調査面積 1800m²

はじめに

今回の発掘調査は社屋建設工事に伴うもので、当調査研究会が八尾南遺跡内で実施した発掘調査の第13次調査にある。

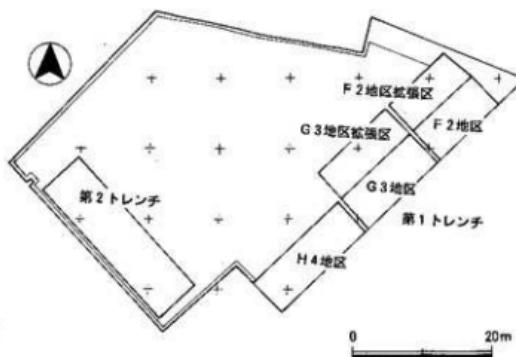
調査地点は、昭和61～62年度に当調査研究会が実施した第5次調査地の北側に位置する。

調査概要

掘削に際しては、現地表（標高11.9m前後）下1.8～2.0mまでに堆積する盛上・旧耕土等を機械掘削によって排除した。以下0.2～0.3mまでを人力掘削とし、2面を調査対象とした（上層調査－第1面・第2面）。さらに、地下室予定地部分に付いては新たに調査区を設定し、IH石器時代相当層までを調査対象とした（下層調査－第3面～第5面）。

第1面

現地表下2.0m前後（標高9.8m前後）付近に堆積する第6層灰黄色～灰褐色シルト混粘土面を調査対象とした。その結果、古墳時代前期（庄内式期）の溝6条、古墳時代中期の土坑1基、中世の農耕に伴う溝9条、近世の河道1条の他、時期不明の上坑1基・小穴31個を検出した。



調査地区および下層調査トレンチ設定図

た。

第2面

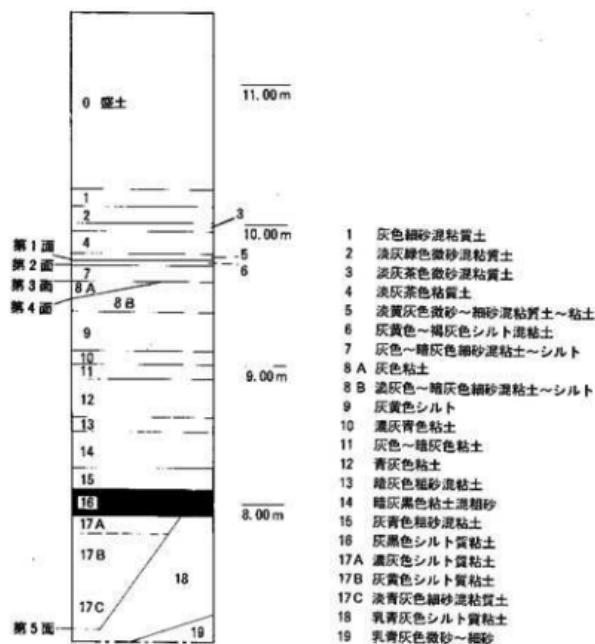
現地表下2.1m前後（標高9.5～9.7m）付近に堆積する第7層灰色～暗灰色細砂混粘土～シルト上面を調査対象とした。その結果、弥生時代後期の水田造構を検出した。水田は計55筆が確認でき、全体的にみれば南～西が高く、北～東が低い。畦畔の構築方向は概ね東西・南北である。

第3面

第1トレンチH4地区で検出した。現地表下2.1m前後（標高9.6～9.7m）付近に存在する第8A層上面で時期不明の小穴2個を検出した。造構の所属時期は不明である。

第4面

第1トレンチF2・G3地区で検出した。現地表下2.3m前後（標高9.3～9.7m）付近に存在する第8B層濃灰色～暗灰色粗砂混土上面で、畦畔4条・溝1条を伴う水田造構を検出した。この水田の所属時期は、近隣の調査結果から弥生時代中期と考えられよう。



基本層序模式図

第5面

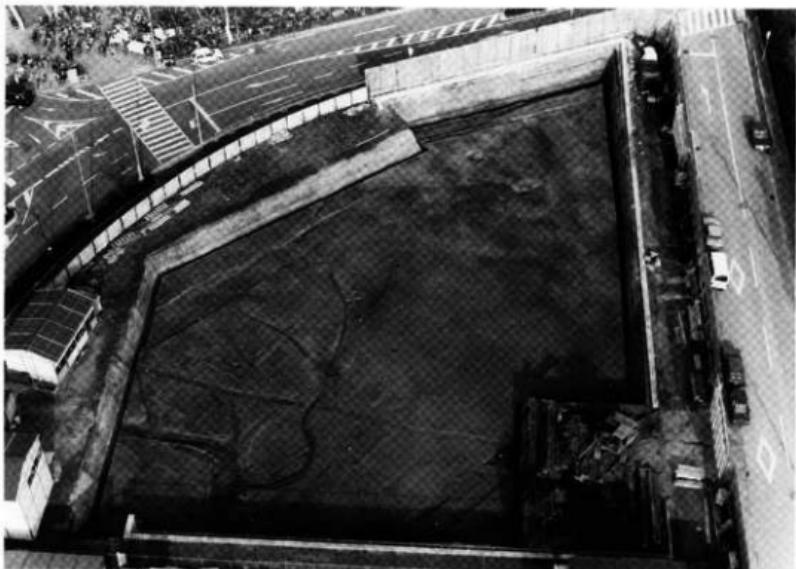
現地表下4.0～4.7m（標高7.1～8.0m）付近に存在する第18層青灰色シルト質粘土（長原地山）上面を調査対象とした。第5面では、旧地形の復元を主に調査を進めた。検出した旧地形の概略は、第1トレンチの東部（F2・G3地区）と南東端（H4地区）が高く、第1トレンチの西部（F2・G3拡張区）が0.5～0.7mほど下がり谷状となっている。第2トレンチでは、西端が急に落ち込んでおり、深い谷を形成している。4m余りを機械で掘削したが、底には達していない。上層に堆積する第17層（濃灰色～乳灰黄色シルト質粘土～微砂）下部から、剥片・石器・土器片が60点程度出土しているが、すべて斜面・流路内からの出土であり、原位置を保っているものは少ないと考えられる。なお、第18層直上からの出土遺物は皆無である。

まとめ

今回の調査では、既往調査の結果と同様、弥生時代中期・後期の水田、古墳時代前期～中期の集落、中世の素掘り溝、近世の河道を検出した。さらに、面的には確認できなかったものの弥生時代中期相当層から旧石器時代相当層までの間にも、遺構が存在する可能性が高くなってきた。また、旧石器時代相当層の調査については、調査した地点の旧状が谷状であったことから、既往調査の成果との比較が困難であった。また、この付近で旧石器時代相当層の鍵洞としている黒色帶（第16層～火山灰の堆積土）の存在も認められたものの、二次堆積の可能性が高く、科学的な分析を待つて考える必要があろう。



第1調査面全景（南から）



第2調査面全景（南から）

24 長原遺跡（第1次調査）

調査地 大阪市平野区長吉川辺3丁目

調査期間 昭和63年8月2日～昭和63年8月4日

調査面積 8 m²

はじめに

今回の発掘調査は公共下水道布設工事に伴うもので、当調査研究会が長原遺跡内で実施した発掘調査の第1次調査にあたる。

0 築土・擾乱

1 灰色～黃色中砂

2 黄灰色砂質土

3 黄色～青灰色細砂

4 黄褐色砂泥粘質土

5 茶褐色粘質土

6 灰黄色砂泥粘土

7 灰灰色粘土

8 灰黄色シルト

9 茶灰色シルト質粘土

10 灰黄色シルト質粘土

11 黑褐色粘土

12 黄褐色粘土

13 黑紫色粘土

14 灰黄色～灰茶色粘土

15 灰黄色粘土

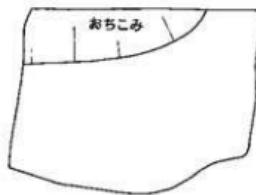
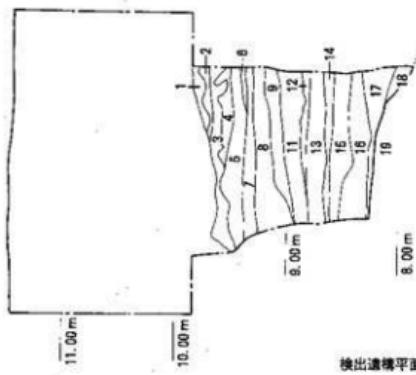
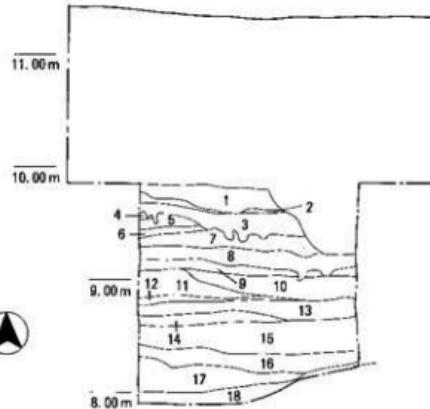
16 灰綠色微砂泥粘質土

17 綠灰色シルト～微砂

18 綠灰色微砂

19 綠灰色砂礫

黒色帶



0 1m

検出遺構平面図

調査地点は、昭和58～59年度に当調査研究会が実施した第2次調査地の南西部に接している。

調査概要

現地表下約1.2mまでの土層を機械で掘削した後、以下2mを層理にしたがって人力掘削を行ったが、顕著な遺構・遺物は検出されなかった。

近隣の調査結果から、4層～7層上面が古墳時代初頭～縄文時代晩期に相当する生活面、11層～13層が長原遺跡南部層序の第3黒色帶にあるものと考えられる。この黒色帶は、西部では3枚に分かれるが東部では1枚となる。黒色帶以下の層序は、粘性の高い粘土から徐々に砂混じりの土層となり、現地表下3.1m（標高8.2m）前後で硬くしまった砂礫層（19層）に達する。19層上面は北西部が落ち込んでおり、内部には微砂（17層）・シルト（18層）が堆積している。

まとめ

今回の調査では、顕著な遺構・遺物は検出されなかったが、近隣で実施された調査と対応する上層の堆積が確認された。今後、長原遺跡南部と八尾南遺跡の土層を総合的に対比する必要があろう。



調査区全景（南から）

III 委託業務

(1) 八尾市立歴史民俗資料館の管理

1 沿革概要

開館日 昭和62年11月8日

沿革 昭和59年1月 仮称歴史民俗資料館建設構想委員会設置

昭和61年7月 工事着工

昭和62年8月 工事竣工

2 施設概要

敷地面積 1752.02m²

延床面積 1193.50m²

構造 鉄筋コンクリート2階建

主施設面積

室名1階	面積(m ²)	室名2階	面積(m ²)
展示室	202.500	研究室	119.918
収蔵庫	181.712	写場	34.850
作業室	93.735	図書室及資料室	78.840
くん蒸室	9.500	特別収蔵庫	40.000
管理室	37.196	ロビー・その他	130.392
ホール	86.840		
その他	178.017		

3 開館時間等

開館時間 午前9時～午後4時30分（入館は4時まで）

休館日 毎週月曜日の午後・火曜日および祝日・年末年始

観覧料 大人200円・高大学生100円・小人50円（団体20人以上半額）

4 公開展示

- ① 常設展 「八尾の歴史と文化財」
昭和63年4月1日～7月10日
“ 9月28日～12月25日
平成元年1月4日～3月31日
- ② 特別展 市政40周年記念 「河内の名宝」展
昭和63年7月24日～9月11日
- ③ 特別陳列 「八尾を掘る」
昭和63年4月27日～7月10日
「愛宕塚古墳展」 —よみがえる河内の古代豪族—
昭和63年10月26日～12月25日

5 利用状況

開館日数 延べ287日 総観覧者数 8,449名（1日平均29.7人）

（内訳）有料観覧者数

個人 大人2,830名 学生290名 小人1,072名 計4,192名

団体 大人976名 学生28名 小人244名 計1,248名

招待・減免関係

大人1,760名 学生8名 小人1,241名 計3,009名

6 講座の開設

- ①「古文書入門講座」 35名 講師：資料館職員

昭和63年10月2日～11月20日の月曜日 午後1時30分～3時30分

第1回（10月2日） 古文書への誘い—取り扱い方と解読の基本—

第2回（10月9日） 江戸時代の検地と年貢

第3回（10月16日） 農村の証文類を読む

第4回（10月23日） かな文字を読む「古人一首・河内名所図会」

第5回（10月30日） 五人組帳前書きを読む I

第6回（11月6日） “ II

第7回（11月13日） 御触と上書を読む

第8回（11月20日） 大塙の乱と八尾を読む

- ②「考古学入門講座」 30名 講師：米田敏幸・財团職員

平成元年1月28日～2月25日の土曜日 午後1時30分～3時30分

八尾市における考古学資料と問題点 5回シリーズ

③「日本書紀入門講座」 50名 講師：竜谷大学短期大学部 平林章仁氏

平成元年2月5日～3月12日の日曜日 午後1時30分～3時30分

古代の河内を読む 6回シリーズ

④「親と子の体験学習」 10組 講師：寺尾和一郎氏他

平成元年3月26日（日）

河内木綿を織る 「綿くり」から「織り」まで

7 学術講演会

「河内の仏教美術」 64名 講師：大阪市立美術館学芸課長 神山登氏

昭和63年8月27日（土）午後2時～4時

8 資料の収集 調査

①久保田家資料調査 昭和63年11月第2次調査終了

②貞觀寺文書調査 予備調査の後、平成元年度国補助事業とすべく計画書提出

③常光寺文書調査 “ 平成2年度 ”

④民只・農具等の日常収集活動

9 紀要・館報の作成

①愛宕塚古墳と物部氏

②戦国期の河内における国郡支配について

③八尾の延宝検地について

④館報創刊号

10 友の会の組織づくり

要項の作成に着手する。

(2) 瑞山楼の公開

① 週2回（水・土）の公開

延べ 107回公開

入場者 延べ1,414人（1日平均13.2人）

② 催物のための公開

イ 八尾まつりに協賛しての公開

日 時 昭和63年8月28日（日）

午前10時～午後4時

入場者数 239人

③ その他要請に応じての公開

イ 「俳句会」

主催者 紅梅会

日 時 昭和63年10月15日（土）

IV 啓発普及事業

(1) 出版物の刊行および頒布

- ① 鶴八尾市文化財調査研究会報告16 昭和62年度 年報
- ② 鶴八尾市文化財調査研究会報告17
- ③ 鶴八尾市文化財調査研究会報告18
- ④ 鶴八尾市文化財調査研究会報告19
- ⑤ 鶴八尾市文化財調査研究会報告20
- ⑥ 鶴八尾市文化財調査研究会報告21 八尾あれこれ—文化財講座記録集 2 —

(2) 文化財講座の開催

「文化財トーク やお・むかし・むかし」

日 時 平成元年3月24日（金） 午後6時30分～8時45分

場 所 文化会館

講 師 大阪府教育委員会文化財保護課技師 福田英人氏

(3) チビッコ文化財夏期学級の開催

日 時 昭和63年7月29日（金）30日（土）

場 所 教育センター

内 容 火おこし道具作りと火おこし体験

参 加 者 15名

(4) 出土遺物等の展示

チーマ 「八尾を掘る」 —市内で発掘された文化財—

期 間 昭和63年4月27日（水）～7月10日（日）

場 所 歴史民俗資料館

展示内容 昭和62年度に行った市内遺跡（小阪合・矢作・八尾南・萱振遺跡）の紹介と出土品の展示

(5) 萱振遺跡現場公開（改良住宅建設用地）

日 時 昭和63年8月6日（土）午前10時～午後3時

見学者 228人（市内58名・市外170名）

(6) 講演会・講習会等への職員派遣

①「土器づくり講習」

主 催 桂小学校

日 時 昭和63年6月23日（木）～25日（土）・7月12日（火）

場 所 桂小学校体育館および校庭

対 象 6年生 76名 教諭5名

②「調査現場見学会」

主 催 八尾市自治推進課

日 時 昭和63年10月26日（水）午後1時～3時30分

場 所 八尾南遺跡調査現場（朝日生命ビル建設予定地）

対 象 市政モニター15名

③「郷土史講座」

主 催 久宝寺コミュニティセンター運営協議会

日 時 昭和63年11月16日（水）午後7時30分～9時

場 所 久宝寺コミュニティセンター集会室

対 象 地域住民45名

④「郷土史講座」

主 催 山本労働会館

日 時 平成元年2月16日（木）午後6時～8時30分

場 所 山本労働会館

対 象 市民100名

V その他

(1) 「第6回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会」の協賛

主 催 関大阪文化財センター

日 時 昭和63年10月1日（土）2日（日）

場 所 大阪科学技術センター

(2) 「写真測量に関する技術研修会」に参加

主 催 大阪府埋蔵文化財協会

日 時 昭和63年4月21日（木）

場 所 大阪府埋蔵文化財協会 泉大津調査事務所

(3) 奈良国立文化財研究所主催の研修会に参加

「埋蔵文化財発掘技術者専門研修・遺跡環境過程」

日 時 昭和63年10月12日（水）～10月25日（火）

VI 受贈図書一覧

書 名	団 体 名
北海道	
上ノ国町教育委員会	史跡上之国勝山館跡調査概報IX
千葉	
山武考古学研究所	釜利谷やぐら遺跡 専光寺付近遺跡 堀越遺跡 平山谷遺跡群 新林古墳 柳久保遺跡群VI 桑原遺跡群
姫君津都市文化財センター	高千穂古墳群 念仏塚遺跡 林遺跡 當田遺跡群 富士見台遺跡 野々畠遺跡 内萩原遺跡 上ノ山遺跡 宮脇遺跡 上野塚古墳 三箇遺跡群I 三箇遺跡群IV 郡遺跡確認調査報告書 年報No.2 年報No.5
木更津市教育委員会	丹迺遺跡確認調査報告書 跡内遺跡群発掘調査報告書
千葉市立加曾利貝塚博物館	千葉市立加曾利貝塚博物館20周年記念特別講演講演集
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告第16集 同上17集 同上18集

島崎区教育委員会	柴又河川敷遺跡 高西城址島崎区青戸7丁目36番地発掘調査報告書
神奈川 神奈川県教育庁	神奈川県文化財調査報告書第47集 神奈川県埋蔵文化財調査報告30
神奈川県立埋蔵文化財センター	紀牛座脇やぐら群Ⅱ 新吉田町四ツ家横古墓群 新戸遺跡 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告17 神奈川県立埋蔵文化財センター年報7 草山遺跡Ⅰ 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告18 金沢文庫遺跡 同上19
山梨 山梨県文化財研究所	研究所報第4号 吉間田遺跡 研究所報第5号～第6号
愛知 愛知県教育委員会 岐阜県立埋蔵文化財センター	愛知県埋蔵文化財情報3 年報昭和62年度 豊川遺跡 大瀬川遺跡・阿弥陀寺遺跡 杉山遺跡 埋蔵文化財愛知第13号 同上15号 開館記念特別展「一宮の名宝（I）」真清田神社と妙興寺 文化財のしおり 博物館だより 第2号～第4号 昭和63年度春季特別展 美人画にみる織姫の手仕事 開館一周年記念特別展「一宮の名宝（II）」 廻駄(市)遺跡発掘調査報告書
一宮市博物館	
石川 金沢市教育委員会	金沢市礪部運動公園遺跡 金沢市八日市B遺跡 金沢市一小牛ハバ遺跡発掘調査概報 昭和62年度金沢市埋蔵文化財調査年報 敷地大神山遺跡群 吉崎・次湯遺跡Ⅰ 石川県立埋蔵文化財センター年報第8号 下安原海岸遺跡 岩内遺跡 八田中遺跡 五十里A遺跡 竹生野遺跡 白山櫛川宮遺跡Ⅰ 刈安野々宮遺跡 長口西部遺跡群Ⅰ 石川県右川郡河内村福岡遺跡
河内村教育委員会	

福井	吉河遺跡発掘調査概報 福井県埋蔵文化財調査センター年報2（昭和61年度）
滋賀	滋賀県埋蔵文化財センター 京都府埋蔵文化財調査研究センター
長崎	長崎市教育委員会 長崎市埋蔵文化財センター
野田川	野田川教育委員会 大分
大分	大分府教育委員会 大分市文化財協会 大分文化財センター
	文化財資料展示室特別展 草火 13号～15号 大分城跡II 龜井（その3） 龜井北（その1） 龜井北（その3） 新家（その1） 城山（その2） 城山（その3） 久宝寺南（その2） 久宝寺北 丹上（その4、6） 太井（その1） 太井（その2） 太井（その3） 小坂（その2） 小坂（その3） 小坂（その4） 福岡（その1） 第6回近畿地方埋蔵文化財研究会資料 福大歴文化財センター通信No.1 第19回大分府下埋蔵文化財研究会資料

大阪府埋蔵文化財協会	唐中遺跡 芝ノ垣外遺跡発掘調査報告書 滑瀬跡発掘調査報告書 箕面池西遺跡発掘調査報告書 信太川遺跡発掘調査報告書 第十路遺跡発掘調査報告書 向井代遺跡発掘調査報告書 弥生・古墳時代の大陵系土器の諸問題 第1分冊・九州編一 同上第2分冊・中国・四国・近畿・中部以東編 同上第3分冊・先秦考古・追加資料一 昭和62年度発掘調査成果展・泉州の遺跡 山直郡とその周辺 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1987年度 野畠春日町第1次調査報告書 同上第2次調査報告書 箕ヶ池西遺跡 新免遺跡第23次発掘調査概要・板倉・安塚連立立体父差に伴う埋蔵文化財 発掘調査一 文化財ニュース第9号
臺中市教育委員会	
吹田市教育委員会	昭和62年度埋蔵文化財緊急発掘調査概要 吹田市文化財ニュースNo.9 昭和62年度発掘調査概要1 東京良縁跡発掘調査概要 上中条遺跡発掘調査概要
池田市教育委員会 高槻市教育委員会	池田市埋蔵文化財発掘調査概要1987年度 昭和59・60年度高槻市文化財年報 堀原南遺跡発掘調査報告書 堀上郡 発掘調査報告書
枚方市教育委員会 關枚方市文化財研究調査会	枚方市文化財調査報告書第20集 枚方市文化財年報III 國跡・枚方の遺跡 10年のあゆみ 高宮八丁遺跡・石器編一 寺川・北条遺跡発掘調査報告書 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要29 協会ニュースVO13 No.3・No.4 同上VO14 No.1 若江遺跡第35次発掘調査報告 同上第27次発掘調査報告 神並遺跡II 同上III 八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書I
寝屋川市教育委員会 大東市教育委員会 東大阪市教育委員会 關東大阪市文化財協会	寺川・北条遺跡発掘調査報告書 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要29 協会ニュースVO13 No.3・No.4 同上VO14 No.1 若江遺跡第35次発掘調査報告 同上第27次発掘調査報告 神並遺跡II 同上III 八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書I
八尾市教育委員会	同上II 八尾市文化財紀要3 寺内町の基本計画に関する研究 八尾市史

松原市教育委員会	松原市遺跡発掘調査概要昭和62年度
羽曳野市教育委員会	古市遺跡群II 同上III 同上VI 同上VII
堺市立埋蔵文化財センター	平井遺跡 堺市文化財調査報告第26集
河内長野市教育委員会	河内長野市埋蔵文化財報告II
三日市遺跡調査会	二日市遺跡調査報告書I
泉大津市教育委員会	泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報6 泉大津の民家
泉佐野市教育委員会	泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要VII 桔田池遺跡発掘調査報告書-87-2区の調査- 川原山地区埋蔵文化財試掘調査報告書 泉佐野駅上池PA試掘調査報告書 若光遺跡発掘調査報告書-87-1区の調査- 同上3号
阪南町教育委員会	阪南町埋蔵文化財分布調査概要I 泉南市遺跡群発掘調査報告書V 河内 花岡山遺跡 特豪山遺跡II 泉北考古資料館だより №32~№34 大阪八尾開発事業団のあゆみ
奈良県立文化財研究所	埋蔵文化財ニュース 59~63 奈良国立文化財研究所年報1987 昭和62年度平城宮跡発掘調査概報 人和郡山市文化財調査報告概要 9・10・11 天理市埋蔵文化財調査概報昭和61・62年度 天理市平等坊・谷里遺跡発掘調査概報 いかるが 藤ノ木古墳 桜井市古墳 古墳池遺跡切田地区発掘調査報告書 初瀬小学校一輪小学校体育館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 桜井市浅吉 舞台1・2号墳 市計画道路東原一池之内駒工事に伴う 発掘調査報告書 金剛寺遺跡 橿原町遺跡群細分布調査概要 むかし、むかしの橿原 名張市夏見 下川原遺跡 名張市赤口町丈六 津代遺跡 名張市赤口町・舟 龍野氏城址 文化財学級第5集
奈良人文学文学部	年報No.2
兵庫	芦屋市遺跡G・1地点発掘調査報告書
芦屋市教育委員会	芦屋市文化財報告第16集
伊丹市教育委員会	伊丹山口西井遺跡（第11次発掘調査報告書）

川西市教育委員会	縄ヶ丘遺跡第3次調査報告書
神戸市教育委員会	川西市加茂遺跡発掘調査報告書
	昭和60年度遺跡現地説明会資料
	昭和61年度遺跡現地説明会資料
	地下に眠る神戸の歴史展V 同上VI
	昭和62年度遺跡現地説明会資料
	昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報
	繁田古窯発掘調査報告書
三田市教育委員会	武庫川下土地改良区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の処理
尼崎市教育委員会	尼崎市文化財調査報告書第20集
岡山	要覧
津山郷土博物館	朝鶴川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書IV
鳥根	鳥取女了短期大学移転予定地内真山遺跡発掘調査報告書
島根県教育庁	山陰地域研究 伝統文化部門分冊第4号
島根大学付属図書館	史跡毛利城跡保存管理計画策定報告書
広島	山口大学構内遺跡発掘調査研究年報VI
古田町教育委員会	高松城東ノ丸跡発掘調査報告書
山口	小沼C遺跡発掘調査報告書
山口大学埋蔵文化財資料館	高知県遺跡地図－幡多ブロック－
香川	土佐国遺跡発掘調査報告書第8集
香川県教育委員会	国豐城跡発掘調査概報第1～3次
高松市教育委員会	後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書I
高知	七成町北原遺跡－内陸工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－
高知県教育委員会	九州文化史研究所紀要第33号
徳島	野尻町文化財調査報告書第3集
徳島県教育委員会	下那珂貝塚
福岡	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報III
九州大学九州文化史研究施設	月刊考古学ジャーナル4月号
北九州市立考古博物館	マニュアル通信第1号・第2号
宮崎	旧石器考古学35別刷 長崎県吉花台東遺跡第4次発掘調査報
野尻町教育委員会	八尾の120年の歩み－明治から現代まで－
宮崎県総合博物館	紀要 潟友第1号
鹿児島	
鹿児島大学埋蔵文化財調査吉年報III	
ニューサイエンス社	
福田英人	
松藤和人	
一上幸寿	
吉岡哲	

(財)八尾市文化財調査研究会報告25

八尾市文化財調査研究会年報

昭和63年度

発行 平成元年12月

編集 財團法人 八尾市文化財調査研究会

〒581 大阪府八尾市清水町1丁目2番1号

0729-94-4700

印刷 明新印刷株式会社

(表紙 レザック66 <215kg>
本文 マットアート <110kg>
見返し 上質 <90kg>)

